140-Ma61-2ウ
1200500726357

始

140
MA61
2

浪速高等學校教授
正木正著

心理學

刀江書院刊

924
25

序

本書は四篇に分けて論述されます。第一篇では日常生活の上で直接に問題とされる精神生活の具體的構造が主な對象となります。卽ち現實的行動の諸形態が問題となり、その根源、發達、變容、或は環境、習慣、仕事等の諸構造が述べられます。第二篇では精神生活に於ける內面的意識過程の分節的構造が取扱はれます。こゝで、從來心理學の主對象であつた知覺、表象、想像、思考、感情、意志等の諸々の意識面が考察されます。第三篇では精神生活の擔ひ手である個體の具體的在り方としての類型的構造が對象となり、智能、氣質、性格が考察されます。第四篇では精神生活の文化への聯關が取扱はれ、自我、社會、世界觀、民族、文化の心理構造が理解されます。かくて第一篇に於て經驗上觀察把握される行動の考察から出發し、次に第二篇に於て內的過程としての意識構造の分析に進み、第三篇に於て統一的主體の特性像としての類型の把握に進み、最後に社會、歷史に聯關する最も具體的な精神生活の問題の理解把握に至るのであります。

心理學は今日實驗的方法によつて次第に未知の領域を開拓しつゝ、日に進歩發展してゐます。それは又新しい理論と聯關して極めて活潑なる活動を呈しております。著者の理解する限り、此の方面の成果を本書のうちに簡潔に取入れるように努めました。專門にわたるものや、理論的、實驗的に重要であつても、具體的な生活に比較的緣遠いものは主として註に於て叙述しました。蓋し此の方面に於ける眞の理解は心理實驗の方法を學ばれ、自ら實驗してゆくことによつて可能ではないかと思ひます。今日心理學を深く學ばうとされるには、實驗技術の習得と實行とが肝要であります。

併し、又精神生活の理解には日常生活に於ける體驗の省察を必要とします。心理學を人間學の土臺の上に考察せんとすればどうしても生ける體驗の分析が大切です。著者は本書に於て心理學をこの立場に於て把握しようと努力致しました。この爲に、聖賢、哲人、詩人、モラリスト達の言葉に敎示を得、比較的澤山それ等の命題を引用しました。多くは註として揭げましたが、本文の叙述をそれらの勝れた典型的な命題で補つて戴きたいのです。本文に註とあればその都度直ちにその註を參照して讀んで載きたいと存じます。此の註を手がかりとして一歩進んで下されば更に幸です。著者の氣持としては註は本文と同樣の價値をもつもの、或は本文の發展として重要の意味をもつてゐるものであります。尙卷末に、主として人間知に關する問題一〇一題を揭げ、研究の參考に供しました。

本書は著者の今日まで十二ヶ年餘の高等學校に於ける講義の體驗に基いてゐます。本書の如き組織になつてからプリントにしてこゝ數年來講義をつゞけて來てゐます。この故に心理學の理論的關心よりも敎育的關心が前景へ出てゐます。高い敎養をうけようとする靑年に對して、現實の人間の心理構造は何かを理解せしめる點にあります。講義に際して生徒諸君の尋ねた鋭く且現實的な問が大變刺戟となり參考になつたことを告白せざるを得ません。これに對してこゝに感謝の意を表します。かく本書は理論的秩序的論述の滿足よりも、むしろ出來るだけこの樣な現實の質問、要求に答へようとするものであります。併しやゝもすれば陷り易い觀念的、獨斷的敎說とならぬやう充分の警戒と注意を致しました。かくて、人間の現實的理解に基き、自他の認識と變革への敎育的技術として心理學が要求されるのです。

心理學もその思想及び方法に於て未だ明確な一致をしておりません。對立した思想理論が現在互に抗爭してゐます。これも學としての心理學の科學的運命でありませう。この克服の爲に絕えず共同的な實驗的研究が生まれて行かねばなりません。本書は心理學への一つの入門書として、精神生活理解への一つの道標として、現實の人間の具體的な在り方の把握を中心的課題としてゐます。

諸先生、諸先輩、學友の日頃の御教示御指導についてこゝに深く感謝致します。尚本書が讀者をして精神生活の理解へ一歩でも進めることが出來ますならば望外のよろこびとするところであります。

最後に本書の出版をすゝめられ、それについて色々御世話下さつた依田新學兄に深い感謝の意を捧げます。

昭和十六年九月十五日

正木正

目次

序

第一篇　精神生活の現實的構造

第一講　心理學の一般について……三
第二講　行動の根源について……一五
第三講　行動の形態について……二九
第四講　行動の發展について……三八
第五講　環境について……四九
第六講　精神發達について……五九
第七講　精神と肉體について……六七

第八講　意識について……七四
第九講　習慣について……八七
第十講　仕事の心理について（付遊戯と休養）……九九

第二篇　精神生活の分節的構造

第十一講　知覺について（一）……一一五
第十二講　知覺について（二）……一二七
第十三講　空間・時間及び運動の意識について……一四八
第十四講　表象について……一六三
第十五講　記憶について……一七三
第十六講　想像について……一九〇
第十七講　思考について……一九六
第十八講　言語について……二〇七

第十九講　感情について（一）……二二四
第二十講　感情について（二）……二三六
第二十一講　意志について……二五〇

第三篇　精神生活の類型的構造

第二十二講　智能について……二七三
第二十三講　氣質について……二八六
第二十四講　性格について……二九五

第四篇　精神生活の文化心理的構造

第二十五講　自我意識について……三一三
第二十六講　個人と社會について……三三〇
第二十七講　世界觀の心理と類型……三三九

第二十八講　民族性と文化の創造……三四五
幾何學的錯視圖
問題
索引

第一篇　精神生活の現實的構造

第一講　心理學の一般について

一　「生」の探究に心理學的課題が出發する。生の直接表現である諸の**行動**及び**意識過程**、或はそれ等によつて織り成される**精神生活**の樣式、**文化の諸形態**が心理學の研究の全領域を形成する。此等の現實的形態は多樣多種であつて各々個性的・獨自的であるが、尙その基底には法則的構造が横たはつてゐるのである。此等諸現象を記述し、その構造を明らかにし、生の表現に於ける一般的法則及び類型を樹てることが心理學の問題である。

現實の生に對して各人は各自の自己の生活經驗から一定の見解を持ち、それによつて自己の生活のみならず、生一般を理解し、實踐的行動の導きとしてゐる。併しかゝる見解は普遍的認識の下によることと少く、やゝもすれば主觀的、任意的理解によるものが多く、從つて生の理解が歪曲されて不合理な生活過程に導かれると云ふこともあるのである。心理學は生の諸表現を正しく理解し、且具體的に、實證的に把握しようとする科學的要求をもつものであり、進んで、生活の統制、指導を可能にする原理、法則を樹てんとするものである。

二　此等の課題の探究に當つて、先づ要求されることは生に對する關心と省察である。寧ろそのうちに問題の發見と方法の探索が出發するのである。各自自分の日常に於ける行動、體驗を內省し反省すると共に又他の行動、態度、表現を觀察し理解する用意と關心とが必要である(一)。

「私は人間だ、人間に關する何事も私によそごとゝは思はれない」(テレンテイウス)と云ふ態度が望ましいのである。

心理學は、學として現實的普遍的認識を目的とするから、單に簡單な經驗や體驗的の思辨的、臆測的理解によるべきでなく、學として一定の方法をもつものである。先づ實證的な觀察が採られる。卽ち他の行動について客觀的なる觀察(**外部觀察**)を行ひ、或は自己自身について經驗的意識現象についても觀察し記述する。又その意識現象を同時に自から觀察し得ない時は、その經驗後にそれを追觀察する、(例へば情緒興奮の觀察の如き)。かゝる自己自身の觀察、卽ち**內部觀察**は他の諸學科に見出されざる心理學的獨特の方法である。

尙心理學は實驗的方法を可能なる限界のうちに採用するものであつて、此れによつて心理學は長足の進展をなしたのである。卽ち一定の條件下に於て行動を生起せしめて、その過程を觀察し或はその意識現象の變化の內省を求め、以つて精密に現象の探究に進まんとするのである(**實驗的外部或は內部觀察**)。

こゝに注意すべきは觀察でも、實驗でもその對象は人間(主として)であり、又觀察者、實驗者も亦等しく人間であると云ふことである。卽ち兩者の人間的關係が觀察場面の重要な條件となる。觀察者自身がすでにその研究の對象たる現象の一條件となり得るのである。故に心理學に於ては、研究者はよく全體の場面を觀ると共に常に自己を超越して觀る自己否定の立場を持つものでなければならない。殊に內省は自己が自己を觀ることであるから、內省の訓練並びに觀察への忠實さの德が要求されるのである。

心理學はかくて、その特殊の方法として、質問法、品等法、テスト法等を採用し來るのである(二)。

精神生活には又その客觀的所產として種々なる表現物、卽ち作品、言語、慣習、制度等がある。此等は精神の表現されたものとして、精神生活理解の對象となる。殊に社會的歷史的現象は觀察や實驗に供することは出來ないが故に、その客觀的產物の構造を通してそれを表現する精神構造を探索、理解せねばならないのである。こゝで理解が重要なる方法となるのである。

さて此等の方法によつて探究を進めるに當り、心理學にはその特殊な性質により二つの概念、卽ち

機能概念と**記述概念**が區別されるのである。これを混同しないことが大切である。前者は行動、意識を環境的條件との關係に於て說明する自然科學的概念であり、後者は意識事實をありのまゝ記述するに用ふる概念である。心理學の概念は一般に他の自然科學に比して、多義性を含む傾向が多い。殊に記述概念に於て然りである。併し、出來るだけ、事實に妥當し、誰でも承認し、それによつて報告し得る如き、明晰、判明な概念を作らねばならないのである(三)。

結果の統整に當り、現象の**個性**の記述に重點を置く場合がある。兒童の觀察、性格の觀察の如きはそうであり、事例研究（ケース・スタディイ）はその立場である。又、現象間の**法則**を定立することを目的とすることもある。又、同一形態を示す現象をまとめて、若干の**類型**を求める立場もある。法則の樹立と並んで、個性記述や類型の樹立を重要視するのは、心理學の對象のもつ獨自の性質に由來するものである。

三　さて、精神生活を究めるに當つて、次の諸性質を理解しておくことは極めて大切である。

一、**精神生活は有機的全體をなすものであつて部分は全體に依存しそれに規定される。**例へば行動の如きも、部分々々の動作の單なる集合連結でなくて一つのまとまつた全體をなすものである。

又意識作用に於ても、從來說かれて來た如く、若干の能力が集合して作用すると云ふのでなく、常にそれは全體的形態をなしてゐるものである。故に不可分性、獨自性を有するものと云ふことが出來る。從來心的要素なるものを分析し、それのモザイク的集成によつて精神を說かんとした如き考想は全く廢棄されねばならぬ(四)。勿論研究に際しては、それ等を分析するにしても、それを、原子の如き要素に切り離すのではなく、全體の分節的形態として見てゆくのである。感情を論じても、單に感情のみが孤立的に意識的經過をとるものとしてでなくて、全體に規定された一分節面として見てゆくのである。

二、**精神生活は常に經過的であり流動的である。**ヂェームスは意識の流れと云つた。流動的現象の背後に、恒常的實體の存在することは否定される。精神は全體として流れゆく形態である。この故に精神は時間的形態として特質づけられる。吾々はやゝもすると、それを靜止的、固定的な姿として把握しようとするが、流動流轉のうちに生の本質が顯現すると云ふことに注意せねばならない。

三、**精神生活は目標を追求し價値を志向する活動である。**それが意識的でも或は無意識的でも、何等かの目標、對象に向つて、緊張を生じ、その解消へと力動的活動が生起するのである。所謂緊

張組織をなしてゐるものであつて、緊張と弛緩、要求と滿足、不安と安心の絶えざる交代連續をなしてゐる。

四、**精神生活には傾向性が生じ、次の諸行動、意識をその方向へ規定してゆくのである。**心構へ、習慣、性格、情操の形成はかゝる傾向性の具體的表現である。此れによつて環境へのなめらかな順應が可能にされる。注意すべきは、かゝる傾向性を以つて、固定的、實體的のものであると考へてはならぬこと、及びこの傾向性と、行動意識の流動的過程とを概念的に混同してはならぬことである。例へば愛について見ても、傾向性として見る場合と過程的現象として見る場合では觀察研究の對象及び方法は異つて來るのである。卽ち前者は愛を情操に於て、後者は愛を情緒過程に於て見んとするのである。

さて以上示した如き、**全體性、流動性、力動性、**及び**傾向性**は精神生活の研究に這入るに當つて肝銘しておくべき特質である(五)。このうちにこそ、生の本來の相が顯現されて來るからである。

四　精神生活は多樣の統一として全態性をなすのではあるが、分析によれば四つの主なる條件が擧げられる。

一、**遺傳**――これは精神形成の方向並びにその精力を祖先より傳承することであつて、精神生活を可能ならしめ、特質づける基礎となるものである。又これによつて父祖との相等しい生活の展開の可能性がおかれ、個體的にも、種族的にも一般的傾向の保持がなされる。又これによつて生物的、社會的、精神的秩序が維持され得るのである。

かゝる遺傳的規定が素質概念として考へられる。生物學的にはかゝる遺傳因子の分析及びその傳承の過程は比較的明瞭であるか、精神生活に於てそれを把握することは甚だ困難である。前述せる如く、精神生活は全態性をなすものであるから素質を其れとして抽象分析して把握することは出來ない　素質は環境との關係に於て現象するのであるから、嚴密に云へば、素質は研究して行く場合の極限概念であるとも考へられるのである。吾々は具體的の精神生活を通して、底に潛む基底的なあるものとして素質を把へてゆかねばならない。

二、**環境**――これは精神生活を可能にし、それを特質づけ、以つて、生の發展について意味を與へるものである。遺傳的傾向の發展を可能にし、それを刺戟し或は制止し、以つて影響を與へ可塑しゆくものである。廣い意味で吾人を圍繞する世界はかゝる環境の特質を有する。精神生活は常

に環境に於て育つものであると云はねばならぬ。精神生活が「個體—環境組織」として理解されねばならぬ所以である。

三、**發達**——精神生活は絶えず發達變化しゆくものである。兒童期、青年期、成年期、老年期の各期間に於て精神生活は各々特異の相を示すのであるが、これは又人間存在の一つのあり方としての精神生活の必然の過程である。體制は複雜になり機能は分化しつゝ同時に調和的統一的形態を示してゆくのである。かゝる發達の過程に於て比較的に遺傳的傾向の展開として考へられるものと、一定の目的の下に行動の新しい分化、統制を形成してゆくものとに分けて見ることが出來る。前者は、肉體的發育と平行關係をもつもので、成長或は成熟の名を以つて呼ばれる**自然發達**である。後者は、人間の社會的、教育關係から生ずるもので、廣く、學習と云はれる**目的發達**である。此等の發達の各位相に於て、各個人はその具體的な精神生活の現實態を示すのである。人間に於ては、かゝる發達の最高の可能性を遺傳的素質として與へられてゐること、及び、目的發達を充分なし得る社會的、文化的生活組織を有すると云ふことによつて、精神生活の高度の發展、伸長を可能にしてゐるのである。此等の發達過程は個體發生に於て見出されるのみならず、又、下等動物から高等動物まで、又、未開人から文化人までの發達にも考へられるのである。かくして精神生活は發達の一定の位相に於て理解されるのである。

四、**自我**——精神生活（特に人間を中心として見る時）にはその中心として自我が認められる。この自我は精神生活の總體を規定する無形の點としてあるのであるが、これは又單に論理的に要請されたのではなく直接的自證として與へられるのである。かゝる自我の外界に對する交渉が諸々の體驗を與へ、行動を起し、精神生活を充たすのである。體驗の樣相、例へば色彩や音樂の印象、喜び、悲しみ、或は希望、決意等の意識過程はすべて自我の**內部知覺**として明證的に與へられるのであつて、そこに經驗の把握が可能になるのである(六)。

五　心理學はその研究する主要領域、方法及び目的によつて數多の部門に分たれる。ここに心理學概說としてとくところのものは、正常なる一般的な精神生活についてである。これに對して(イ)個人の精神生活の差異を特に研究せんとする部門——變態心理學、病態心理學等、(ロ)變態的現象を主要對象とする部門——差異心理學、性格心理學、種族心理學等、(ハ)特に精神發達を主要對象とする部門——發達心理學（尙こゝでは對象により民族心理學、兒童心理學、青年心理學、老人心理學、動物心理學などを區別し得）、(ニ)社會現象を對象とする社會心理學（群集心理學、團體心理學等）等にわ

かれ得る。

方法論的方面からみて自然科學的心理學に對して精神科學的心理學あり、前者に生理學的心理學＝實驗心理學、生物學的心理學、後者に文化心理學、世界觀心理學等が見出される。

目的によりて一般の理論を主とするものに對しその原理の實踐的應用を主要目的とする所謂應用心理學あり、こゝに政治、經濟、產業部門に於ける心理學的認識の適用、教育教授への應用、人事管理、犯罪、航空、傷兵保護、國防等への適用が可能になり、精神生活統制への指導が目ざされる。蓋し精神生活が多面で多樣である限り其部門も亦研究の進展につれて細かくなるものであるが、結局それ等各々は精神生活の全面的理解へ綜合され、互に聯關をもつものでなければならぬのである。

(一) 汝、自らを識らんと欲せば、他の行ひを賢察せよ。
汝、他を理解せんと欲せば、汝自らの心を洞見せよ。(シルレル)

「愼我感以觀彼應觀彼應以愼我感」(佐藤一齊)

(二) 質問法——研究せんとする現象について被驗者の考へを求め、それを材料にする。

品等法——研究せんとする現象について被驗者をして判斷、品等せしめ、その順位によりて現象を研究せんとする。

テスト法——確立された標準にてらして現象を測定し、現象の研究をすゝめる。

(三) 最近問題となつてゐるオペレショニスム(操作主義)はかゝる要求をもつものと考へられる。

(四) 現代の新しい心理學は全態(Ganzheit)、形態(Gestlt)、構造(Struktur)、或はひと(Person)、と云ふ概念によつて精神生活のかゝる特質を把握せんとしてゐる。各若干の學說の相違はあるが、何れも精神生活の全體性の認識に基くものである。そして個々の心的要素から精神を構成せんとする立場を極力否定せんとしてゐるのである。

(五) 此等の特質は人間學的に見ても亦重要なる特質である。即ち人間の存在の統一性、不安定性、缺如性、有限性、或は歷史性の如きは此等と緊密なる聯關に立つものである。例へば「我々の生活は活動にほかならない」(モンテーニユ)、或は「人間の狀態。不安定、倦怠、不安」(パスカル)の如き言葉も此等の特質と內的聯關を有してゐる。

(六) 方法論の問題として、觀察、實驗、內省の對象となる體驗が同一性を保つには、自然の齊一性の樣に、又自我の齊一性が要請されねばならぬ。

補遺——心理學の發達について——

心理學が科學として組織づけられたのは、ごく新しく近代のことである。勿論古くから心理學的考察の意圖は俚諺金言警句のうちに、或は文藝家、詩人、モラリスト達の表現、考察のうちに見出される。特に哲學、倫理、宗教等の理論教說に於て古くから展開されてゐる。例へば靈魂の問題について、人間の運命、動機について、或は人間の本質について等の考察に於て見られる。アリストテレスは既にその精神論や倫理學に於て意識及び行動を分析した。下つて十七、八世紀のイギリスに於ける知識論は、經驗的立場から、感覺、表象及びその關係を分析し、所謂聯想心理學を說き、この國の傳統を形成した(ロック、ヒューム、ヂエ・エス・ミル、ベーン、スペンサー)。これは哲學に對すると等しく近代心理學に大きな影響を與へた。

併し心理學が實證的科學的方法によつて體系づけられたのは十九世紀の中葉である。ヴントが一八七九年ライプチィヒに心理學實驗室を設立したのは劃紀的の事業であつた。この頃、直接心理學に影響を與へたのは腦生理學、感官生理學、天文學(天體觀測に於ける時間測定の誤差)からの刺戟であつた。蓋し生理學の研究方法及び考想がそのまゝ心理學に移されたので、例へば細胞の如く意識を感覺や簡單感情の如き心的要素に分析し、再びその構成によつて意識現象を說明せんとしたのである。勿論ヴントはかゝる個人心理學で把握されぬものは民族心理學によつて補ふとしたのである。その後心理學が理論的に實驗的に進步する

につれて構成的心理學の立場は批判され、むしろ初めから精神の全體性を主張するに至つた。即ち**ゲシタルト心理學**（ケーレル、ウェルトハイメル、コフカ）、**全態性心理學**（クリューゲル）がそれである。又、體驗や理解を重んじ、個性記述的に精神生活の現實を把へんとする**精神科學的心理學**、**構造心理學**（ディルタイ、スプランゲル）が主張せられて來てゐる。

イギリスでは從來の傳統的聯想心理學の外にゴールトンより出發した生物測定學、統計學の方法による相關心理學（特に知能の學說）が發展してゐる。フランスでは生物學的傾向があり、變態心理學の方面で勝れた研究を示してゐる。又兒童の研究に於ても獨創的勞作を出してゐる（ピアヂェ、クレパレード）。メンタルテスト（ビネー）の創始の榮譽もこの國が擔ふものである。アメリカに於てはプラグマチィズムの傾向の下に精神過程をある目的への機能であると見、環境への順應過程を重要視して、所謂**機能心理學**を唱へた（チェームス、エンヂェル）。又內省的方法を否定して、純客觀的に研究を行ふべしとする**行動主義**（ワトソン）が出てゐる。かく極端でなくとも、これはアメリカの一般的傾向であつて、**目的的行動主義**（トールマン）、**社會的行動主義**（ミード）等が主張される。現代は**オペレシヨニズム**（操作主義）なるものが方法論の問題として發展して來てゐる。

我國に於ては東洋的な直觀的感覺のうちに、心理學的考想の深いものがある（幽幻、いきの如き思想）。學としての心理學は明治の初年に紹介され、急激に發達して今日に至つてゐる。東洋の心理學、我國の心理學としての獨自の體系的樹立が今課題として與へられてゐる。

第二講　行動の根源について

六　先天的に決定された行動群を本能的行動と呼ぶ。動物の生活は主としてかゝる本能的行動を以て成る。而もその環境に順應せる行動樣式の秩序の複雜微妙なることは驚嘆に價するものがある。動物は、之を習ふことなく、而も合目的的の行動をなし得ることによつて、個體の保存のみならず、種全體の維持發展を可能にしてゐるのである。これは極めて低い段階の動物から吾々に至るまであらゆる種類に於て見出され得る。一例として鳥の營巢、產卵、貯蓄等の行動樣式を見るべし(一)。

人間に於ても亦、特に精神發達の初期に於てはかゝる本能的行動に支配されてゐる、誕生と共に、本能的行動の諸系列が發展する。即ち吸乳、嚙む、舐る、握る、泣く、笑ふ、等は本能的に規定された運動として秩序よく發展して來る。そして此等は幼兒の環境への應答を次第に可能ならしめてゆくのである。

本能的行動の樣式は各動物の種によつて各相違するもので、そこに、動物特有の習性を示すのである。これは各種が長い進化的過程に於て獲得し來つた最も順應的な行動樣式である。然しこの樣式が

強固であると云ふことには、又、環境の非常の急激な變化に對して順應を不可能にする危險も存するのである。

人間に於ては、本能的行動は進展すると共に、一面、歪曲され、或は壓迫されて、非常に異なる樣式を取りうるのである。卽ち人間に於ては、その各々の生活に應じて統制されて行くのである。併し精神生活の根源として基底には本能的行動が横つてゐるのである。

七　本能的行動は常に固定的、無變化的であるとのみ考へられないのであつて、次の樣な性質も見出されるのである。

一、本能の暫存性――或一定の期間に現はれ、その後消滅する(二)。

二、本能の定期性――或一定の時期に於て初めて現はれる(三)。

三、本能の融通性――本能の對象は本來はやゝ一定したものであるが、尙經驗によつて、變化され得る(四)。

尙發育中著しく變態をなす動物に於ては本能的行動も變化すると云はれる。

本能的行動は一見完全と思はれるが、併し、この行動も初めは漠然としてゐるもので、その繰返し練習によつて判然として來るものである。又合目的的で秩序あるとおもはれるが、時には無能と魯鈍を示したり、目的に反する如き行動に出ることもある(五)。

本能を以つて、何か神祕的の實體の如く考へ、これによつて行動が合目的的に支配されてゐると考へてはならない。本能は、先天的遺傳的の傾向であつて、それは環境との關係に於て比較的決定された樣式を以つて表現されて來たものと見るべきである。

實際科學的研究としては刺戟條件と本能的行動の樣式との關係如何を規定してゆくのである。卽ち妨害實驗、對抗實驗、訓練實驗等が行はれてゐる。又、神經組織に損傷を與へて、それとの行動の聯關を見る如き方法も行はれる。此等によれば、本能的行動は一つの刺戟に對する一つの反應としてではなく、全體の狀況に對する全體的行動聯關として見るべきことが結論される。

八　本能的行動を規定する本能的傾向は、精神生活を根源的に決定する傾向であつて、本能的行動が人間に於ける如く歪曲、發展、壓迫された樣式をとるにしても、種族全體を通じ、共通的な規定として働いて來るものである。かゝる本能的傾向は、生物の個體保存と、種族保存の目的に適合する樣に働く。こゝで個體の本能と、種族の本能の二大分類がなされる。

イ、**個體の本能**　これは個體の維持發展と云ふ方向において發動する本能の諸樣式である。

第一は環境に順應し、之を支配し、以つて、自己の生存を保持、維持せんとする方向に於て發動する。

a. **營養攝取の本能**――索餌、狩獵、獲得、蒐集、貯蓄、彷徨等の行動として現はれて來る。動物に於てはその本能の樣式は可なり一義的に決定されてゐるが、人間生活では複雜多樣の發展と變容をなしてゐる。經濟、社會組織、慣習により、この本能の樣式は大いに異る。この本能の滿足が到達されないと云ふ場合には、生物體の極めて强力のエネルギーが發動して異常の生活形態をとるに至るのである。(恐慌、飢餓、物質缺乏の時期における生存の危機を見るべし)。

b. **有機體の要求による本能**――生物體に必要なる溫度、排泄、呼吸、休息、睡眠を求める方向への行動として出る。普通の狀態に於てはあまり要求は意識されずにゐるが、一旦その要求の限定が生ずると極めて力强く發動して來るのである。人間の社會に於ては此等がよく統制され秩序づけられてゐるのである。

かくて衣、食、住の追求と滿足が行動の基底的傾向として働いてゐる(六)。

第二は、個體が環境に對して自己の保護、防禦をなし、以つて環境に順應せんとする方向に發動するものである。

a. **逃避本能**――これは危險な環境より逃れんがために遂行される行動樣式である。此等の行動は主觀的に生ずる恐怖の情緒の特有なる種々の變化によつて强められる。

この本能は一般的に云へば今までの狀態より急に不馴れな珍らしい狀態が出現する時に發動する。例へば幼兒についての觀察によれば、突然生ずる大きな音、抱かれたる支持がなくなることがこの本能を發動せしめる。その他一般に爬虫類、昆蟲、暗闇、雷鳴、火事、地震、日蝕等この本能の刺戟の對象となり易い。

或場合は逃れ樣とする積極的の行動の代りに、不動狀態、卽ち運動の痲痺を生ずることがある。一定の昆蟲、鳥類、及び哺乳類の「擬死」の態度に於て見られる。

恐怖は、他の重要なる本能の發現を支配し、且禁止することもある。併し、一方に、他の本能、例へば親子の本能に征服されて幼兒をすすんで防禦する場合の如き、屢々この本能も無力になつて了ふこともある。

b. **拒否本能**――逃避本能が對象から後退するに對し、これは進んでそれを取除かんとする行動である。口に入れたものを吐き出し、醜いものゝ皮膚にふれたものを取除く如きもので、生後一

年頃に生ずる。これによつて環境の順應支配が可能になる。主觀的には嫌惡の情を誘發し、それが經驗によつて、種々なる對象に擴充放散し、それ等に拒否的行動を發動して來るのである。

第三は、個體の發展、擴張と云ふ方向に發動する行動樣式である。

a. **好奇本能**——對象、現象により近づいて、それを探究せんとする行動である。一般に漠然として、規定されぬ對象は、この本能を刺戟して、この行動を發動せしめる。この目的はより明らかな對象の理解を得んとし、新しき經驗を過去の經驗に同化せしめんとすることであつて、知的發達の時期の極めて重大な行動樣式である。好奇本能は主觀的には驚異の情を伴ふ。この好奇本能、驚異の情は、又容易に、恐怖と逃避とに移行するし、又交替的に發展するのである。

b. **爭鬪本能**——これは或一定の對象に關するものでなく、寧ろ或本能の自由なる發動が妨げられた時に、その妨害を打破せんとして生ずる行動樣式である。子供の所有物を奪つたり、或はその身體運動を拘束したりする時にこの發動を見る。この本能は又容易に逃避本能に置き換へられるし、或は又逆に、逃避本能が爭鬪本能へ移行するのである。窮鼠猫を嚙むの如きはその例である。この本能は自己の行動の發展を獲得するものとして、環境支配への根源的力を與へるものとして極めて重要である。

c. **建設本能**——これは對象に接し、之を弄び、或は之を破壞し、或は構成し、以つて自己の意欲の滿足に供せんとする傾向である。有用なもの、美しきものを製作し、創造せんとする傾向である。これは人類の建設的創造における根源的基底の作用をなしてゐるのである。

九　ロ、種族の本能　これは種族の維持、發展と云ふ方向に於て發動する本能の諸樣式である。

一、生殖本能　これは生物學的に云へば受胎を確保することにあるので、その發動の樣式は動物をして交尾期に異性を牽引する爲に、種に於て諸々の習性をなしてゐるところのものである。

人間に於ては極めて複雜の形態をとるもので、精神生活の底層に力强い流れをなしてゐるものである。十四、五歲に於て、此の本能の發動期に入る(思春期)。

この本能の現はれ方は、初期に於ては、性的對象を理想的の姿態に於て考へ、夢想し、憧憬するのである。併し一方には、局部的な性的衝動が並行する。初めこの二つの傾向は無關係に並行するが、時には抑壓し葛藤する場合もある。年齡の進むに從ひ此等が解決されて來る。

社會的風習、或は社會的イデオロギーとこの本能の發動との間には一般に葛藤が多く、この爭鬪こそ、人生に於ける悲喜交々の綾を織りなしてゆくところのものである。多くの悲劇や懊惱の

根源をなしてゐるのである。

この本能のもつ淨化形態或は倒錯形態は他に類を見ざる程種々複雜多樣の相を示すのである。前者に於ては、創造的感激、探究的情熱、愛他的熱情等が發展する。後者には、サデスムス、マソヒスムス、フエチスムス、エキジビショニスムス、自瀆、同性愛、等々の不自然の發露形態が見出される。

此の問題に關して、フロイドは彼一流の學說を立てた。彼はあらゆる吾人の行動の背後にリビドーなるものを立て而も之を性的エネルギーであるとしたのである。併し彼の云ふ性的なるものは一般に云ふ所の性的なる概念より廣く、思慕（eros）と云ふ意味を有す。彼は此のリビドーの發展段階と云ふものを區別し、その各々の時期に特質あるリビドーの發現を說いてゐる。

一、幼兒期　a. 器官愛期　b. ナルシスムス期（自愛期）　c. 同性愛期　d. 異性愛期

二、兒童期—潛伏期（エデイプスコンプレックス、エレクトラコンプレックス、等）

三、思春期—本來の異性愛期

この思春期の初めに於ては、在來のリビドー發展の段階にリビドーが向つてゆく傾向があり、過去の一つの段階にリビドーが定着すると倒錯現象が生じ、此の人の思春期の重大な傾向として現はれる。昔の時期にリビドーの定着するを退行現象と云ふ。

尙彼は自己保存の本能を環境支配への基本傾向と考へ、三つの發展段階を考へてゐる。

一、絕對的萬能の狀態（母胎內）—環境支配絕對的

二、比較的萬能　〃　（幼兒期）—環境支配相對的

三、現實的狀態（成人期）—補償、權力への欲求

二、親としての本能　この本能は、賴りない幼い自分の子供によつて發動される。主觀的には慈愛の發露を伴つて、子供の養護、教育への行動となつて現はれる。この本能は動物に於ても現はれるので、例へば親雞が雛の危險に對して、身を以つて、それを防護すると云ふ行動をとる如きである。人間に於てこの本能の發動樣式は、環境や社會的慣習等によつて、强化され、或は歪曲される。自分の子供のみに對象が限定され、それにのみ集中して、他への顧慮がない時は、盲愛として、利己的行動形態として發動して來る。併しこの本能は自分の子供に對するやうに、又他の子供或はたよりなき存在等へと擴充してゆくものである。慈愛の情は次第に自己の周圍に廣がり乍ら、社會化してゆくのであつて、そこに利他的行動形態として現れて來る。卽ち同情、博愛、慈善、教育等の諸活動に於ける根柢の主要なる働きをなして來るのである。マクデュガルはこの本能を「最も純粹な利他的傾向」であると云つてゐる。

この本能の發動は極めて强烈である場合があるので、他の諸本能に對して支配的位置に來ることがある。「女は弱しされど母は强し」と言はれる所以である。

尙この本能に相應して**子としての本能**がある。これは自分を慈愛する親を追ふ行動として現はれ、主觀的に愛慕の情として發露する。この本能も親の態度、環境如何によつて、色々の樣式として發展して來る。

さて、この本能と生殖本能とは血と性のつながりとして人間の社會生活の根源的基底をなすものであり、これを基として人間の人倫、社會的習俗、組織、思想が發展するのである。

三、群居本能　下等動物（蜂或は蟻）に於てもこの本能の發動が見出される。而もそれは驚くべき秩序關係を示してゐる。その他羊、羚羊その他の家畜は群居することによつて一團となり、以て種族の防禦、保存の目的を達せんとする。群居は各多數の個體を一體として行動せしめ、それによつて生存の目的を効果的に遂行せしめる。

人間に於てはこの本能は社會的生活の發展に基礎的の役割を果たしてゐる。仲間とゐることの愉快、獨りゐる時の孤獨感、群の意見に從はんとする傾向、他からの批難嘲弄に對する恐怖、嫌忌の情等として現はれて來る。

社會關係を、可能にし、それを維持發展せしめる一般的傾向として、共感、暗示、模倣の現象がある。（後章參照）此等によつて、意識及び行動の社會的な傳播、遺傳が可能になり、社會の秩序、維持、發展がもたらされる。

四、自己表示の本能　**自己卑下の本能**　自己の表示には、得意の氣持が伴ふ。この本能は、動物に於ても見出される（馬、犬、猿等……多妻性鳥類の雄等）。人間に於ては、社會生活の複雜な關係に伴つて、又複雜な發展を示すものである。

この本能の發動にはその傍觀者の存在、多くの人に對する關心のある事が必要である。青年が少女或はその同僚の面前に於て壯語せんとする動機となり、或は觀衆の面前に於て同僚の喝采賞讃を得んとする欲望となるのである。この本能は本質的に社會的のものである。權勢欲、名譽欲、或は支配欲の如き、欲情の發展の原動力となり、虛榮、衒學、傲慢、尊大、出シャバリ、等の諸性質が出て來る。

自己卑下の本能は前者と對蹠的の本能であつて、服從的態度として現はれる。主觀的には劣等感、無力感或は羞恥感として感ぜられる。又、追從、阿諛、引込思案の如き態度が出て來る。

かくてこの一對の本能は自我意識の發展の基體をなすものと云ふことが出來る。

五、競爭的本能　自己の欲するものを他が得んとする時、それが刺戟となつてこの本能の發動を見る。餘分の努力を生じ、自己が優先を得ようとする行動となる。人間に於てはその社會生活のう

ちに極めて、複雜にこの本能が織り込まれてゐるのである。これによつて社會にとり色々の妨害的な影響も生じ、個人的には悲劇を生むこともあるが、他方、努力を喚起し、社會の進展の原動力となることもある。

十　以上、行動の根源としての本能についての概觀であるが、次の諸點が注意さるべきである。

イ、本能も具體的には環境との關係に於て、發動し來るものである。處與の行動が如何なる本能に依るかは、その時、その場の全體的の精神生活の趣きから理解されねばならぬ。

ロ、從つて、本能と本能との聯關、即ち相互の調和、葛藤、相剋の諸關係、を見ることが必要である。本能の組織と、その組織に於ける個々の本能の位置を看取することが大切である。

ハ、次に、通俗的の本能の解釋には以上の說明と異つた場合がある。即ち本能は理性に對立するものであると考へられる場合である。それは絕えず理性と拮抗し、暗き衝動を以つて理性の抑壓に反撥せんとするのも、從つて動物的のもの、反價値的のものと考へられるものである。かゝる本能は抑壓さるべきあるものとされる。これは吾人の倫理的意識から生ずる考へ方であつて本能の主體的な把握である。瞋、貪、痴の三毒の如き、或は權勢欲、名譽欲の如き、欲情がそれに當るのである(七)。併し、以上述べて來たのはかゝる意味でなく、行動を規定しゆくところの根源的、自然的傾向を指したのである(八)。

ニ、以上の諸本能を尙一つの本能に還元せんとする要求と試みがある。即ち、一つの根源的の本能或は傾向を求めて、それに統一せんとするのである。例へば、リビドー、權力への意志、盲目の意志、生の躍動、生きる力等が擧げられる。これは宇宙或は人間を窮極に於て如何に見るかによつて生じて來るもので、世界觀的、形而上學的問題となるものである。

(一) リスは、生れてから親を隔離しておいても、くるみを與へると一部を食べ、一部は土地に埋める。尙昆蟲は、產卵の時、幼蟲が容易に食物を見出し、寄生し得る樣なものや場所に產みつけるのである。

(二) 孵化した雛は四ケ日間、目隱しをしておくと追隨行動を生じない。

(三) 生殖本能、候鳥の移住本能、僞死本能の如し。

(四) 雛は親鳥に從ふものであるが、親鳥をかくして、人が走るとそのあとに追隨するのである。

(五) 「本能はチヤンと指示されて居て變へる事の出來ぬ仕方では何でも知つてゐるが、この仕方を離れては何も知つてゐない。動物が常規の條件に於て行動するか若くは不慮の條件に於て行動するかに從つて本能は或は科學の崇高なるアンスピラチオンを現はし、或は痴愚の驚く可き矛盾を演ずる。」(ファーブル)

(六) 故人も亦曰ふ「衣食住並不可缺而人欲亦在此又其甚者食也故菲飲食尤爲先務」(佐藤一齊)

(七) こゝに「邪慾と力とが吾々全行動の根源である。邪慾は意識的行動をなし、力は無意識的行動をなす」(パスカル)と云ふ命

題が理解される。

（八）本能的と云ふ風に形容詞として使用される場合は、「教育されることなく極めて自然に」と云ふ意味であり、又種族的に共通的にと云ふ意味を含んでゐる。

第三講　行動の形態について

十一　生活はすべて行動を通して營まれるものであるが、先づそれは身體の運動として考察される。かゝる運動は刺戟を感受しそれに應答する反應の過程に於て現はれるものである。卽ち**刺戟—反應**の關係がかゝる行動形態の基本的模型となるのであつて、この模型に於てすべての行動が理解されてくる。

この刺戟—反應過程には一方生理的過程がそれに相應するものとして考へられる。卽ち刺戟は感受器官に受取られ、その興奮は求心性神經によつて、脊髓、視神經床、或は聯合中樞へと傳へられ、更にそれが遠心性神經によつて實行器官へ傳へられる。（第七講參照）

反射運動　はかゝる行動形態の最も簡單にして、一義的なる反應形式である（一）。主觀的には反應についての意識を介在しないところに特質がある。かくて反射運動は行動の單一要素とされ、或は發生的に見て初發形式とされ（二）、以て複雜な行動の構成要素と考へられる。例へば本能的行動は反射運動の連續として考へられ、**連鎖反射**、**複合的反射**の名を以つてする。併し反射は一つの行動の形式で

あつて、決して行動の基體をなすものでない。又吾人の具體的行動は單に刺戟反應關係だけで說明されない。刺戟もその生活の場に於ける全體的狀況によつて意味を異にし、從つて反應の具體的形態も相異なるからである。故に行動の具體的形態は生活體と環境との關係に於て考察されねばならぬ(四)。行動も個々に分析抽象された**分子的行動**としてでなくて、むしろ**團塊的行動**として全體的、具體的に把へねばならぬ。

十二　行動の根源は本能に發するが、それは環境との關係によつて具體的行動として發現するものである。卽ち生活體に始源する自發的な力が環境と交涉して釀しゆく緊張が具體的行動の基體となるものである。行動はかゝる緊張を解消せんとして發動し、それによつて弛緩が生ずれば更に他へ向つて緊張を生じ更にその方向へ向つて行動が發展してゆくのである。缺如から充足へ、不平衡から平衡への力動的な過程こそ行動の基本形態である。かくて、一定の目的の實現を追つて出發相から終止相に至る過程を行動の單位とすることが出來る。これを**S-E**單位と呼ぶ。

かゝる行動には二つの型を區別することが出來る。

第一は環境のある對象に向つて進行して行く行動型である。**進行的行動**と呼ばれる。かゝる行動型を通して生活體は環境との積極的關係にあることが出來る。かゝる行動に對應する環境の牽引的刺戟性を**積極的誘意性**と呼ぶ。

第二は環境のある對象から向背的に後退する行動型である。**背向的行動**と呼ばれる。逃走的、拒否的行動がその代表的のものである。對象は嫌忌されるものとして生活體をそれより離反せしむる。かゝる環境のもつ反撥的刺戟性を**消極的誘意性**と呼ぶ。

さてすべての具體的生活行動はかゝる二つの行動型の組織より成るものである。同時に之に應じて環境もかゝる兩誘意性の複合として現象するものである。かくて人生に於ては、悲喜交々なる過程、努力と沮喪、成功と失敗、希望と絕望、上昇と下降の諸々相が展開されて行くのである。

行動は單に機械的組合はせではなくて、交互影響的關係をもち、發展的な力動的聯關をなすものである。誘意性も亦行動のかゝる過程に應じて力動的變化相を呈するものである(五)。

誘意性の布置關係からして行動の形式を考察すれば次の諸形式が見出される。

一、一つの積極的誘意性あつて、それに向つて進行的行動をとる場合である。これは對象へ向つて直進的最短の途を採るものである。本能に直接規定された行動は本來自然の狀態に於てかゝる形式をとるものであり、その發現に周期性或は定期性をもつものもある。

二、一つの消極的誘意性があつて、背向的行動をとる場合である。この形式の具體的發動は環境的因子に規定されるものであつて、個體によつて頻數、强度を異にする。周期性を持たぬところに上述の形式と特に區別される。尙この背向的行動はより安定の場所に向ふと云ふ方面から見れば進行的行動を反面に含むものと云ふことが出來る。

三、さて以上は一方向的の行動形式であるが、環境が複雜であれば、其處に誘意性の葛藤、對立、拮抗による多方向的な行動形式が出る。

イ、對象へ到達せんとするにそれへの道や手段が複雜或は困難である場合、行動は分裂的形式、不安な形式をとる。かく行動に抵抗を與へるものを**障壁**と呼ぶ。こゝに**試行行動**を經て**迂路行動**或は**手段行動**が發展する。或は他の代償的誘意性で滿足する**代償行動**をとる場合もある(六)。(三六頁の圖形參照)。

ロ、二つの積極的誘意性があり同じ强度を持つて迫る時、行動の**對立的形式**が生ずる。

ハ、積極的と消極的の誘意性があり、それ等が同等の强さで、牽引、反撥する場合、行動の**拮抗的形式**が生ずる。例へば好奇心と恐怖心との拮抗、義理と人情のたたかひ、思想的なやみとして發動する。

ニ、二つの消極的誘意性があり、同じ强度をもつて迫る場合、**葛藤的形式**（ディレンマ）が生ずる。決意的な、或は爆發的な行動として、又は內面的な想像、空想の世界への逃避として發動してくる。

以上のロ、ハ、ニの場合は何れの行動形式も不安定であり、又行動の發展と共に誘意性の性質、强度は移動しゆくものである(七)。(三六頁の圖形參照)

吾人の直接關係する環境は多かれ少かれ積極性と消極性の誘意性が交錯してゐるものであり、その場に應じて變化移動し乍ら現はれるものである。この故に複雜多樣なる行動を生み、內面的にも複雜なる體驗を與へるのである。特に社會的、精神的環境であれば益々誘意性の性質も多樣に、その變化の度合も著しく、吾人の行動は外面的、內面的に色々の方向へと發展してゆくのである。

十三　次に行動に於ける內部狀勢について考察する。

行動の發現に於て最も始源的な力が**迫動力**と呼ばれる。これは生物學的必要に迫られて生ずる、未分化であるが極めて强力な內面的壓力ではある。これによつて生物は環境に向つての行動に逐ひ立てられる。これがある誘意性によつて方向づけられた場合を**意欲**或は**欲求**と呼ぶ。此等の動力によつ

て、進行的行動が展開されてゆくのである。かゝる內部狀勢は根源的には本能によつて規定されてゐるが故に、意識の段階から**欲求水準**にあると呼ばれる。

次に精神が發達し、體驗が複雜になるにつれて、內部狀勢も分化し統一して來る。卽ち對象を豫想し、それに對する要求を生み、それに關係して行動が生じて來る。對象への方向がより限定されると共に、行動についての意識性が增大する。かゝる行動は**要求水準**にあると呼ばれる。この水準は行動の發展と共に、變化移動するもので、かゝる水準の行動には個人性が現はれて來る。

更に意識が進展して來ると、種々なる體驗の中から自我の意識を生じ、自我を中心として種々なる行動が生起するのである。環境に於ける自我の位置、他との諸關係が把握され、行動を反省し統制してゆくのである。かゝる行動は**自我水準**にあると呼ばれる。此の場合社會的環境や精神的環境が行動の重要なる契機をなしてくるのである。かくて自我は環境壓迫を逃れる爲に非現實の世界を畫いたり、或は自我の保護の爲に殼がぶりをしたり、或は最高の價値の渴仰とそれへの義務を感じ、奮鬪努力し實踐躬行しゆかんとす行動態度をとるのである。こゝに自覺的、個性的、人格的行動が生れるのである。

（一）反射運動は二群に分類される

一、生理的反射—瞳孔反射、膝蓋腱反射、唾液分泌（此等は意識を全然ともなはぬ。

二、感覺的反射—咳、嚏、瞬、嘔吐、嚥下等。

反射は一般に遺傳的であるとされるがそのあらはれ方には早い遲いがある。例へば初生兒に於ては嚏、咳は生後數日にして現はれるが、瞬は七—一一週後に現はれる。初生兒の行動を分析するとかゝる反射形式をとるのが非常に多いのである。

尙反射の種々なる特殊樣態は病態の徵候として臨床診斷に使用される。例へば膝蓋腱反射、瞳孔反射、バルビンスキー反射等。

（二）今日の研究によれば反射は必ずしも初發形式ではない。卽ち神經系の未だ發達せざるも團塊的運動がある。これより次第に個々の運動が出る。反射はむしろ發達せる形式であつて、有機體の前神經的融合の狀態に基礎をおくものであると云ふ。（コグヒルの研究）

（三）「鵜は嘴で蟲をくはへ、そして若し自分が食べようと云ふ時は其の蟲を嚥み込んでしまふ。これは全く反射の連續に依つて行はれると見ても差支へないやうである。ところがこの鳥が眷族を養はうと云ふ時は決して蟲を嚥んでしまはない。反射說によれば嚥み込むと云ふ動作は口の中に入つた蟲の刺戟によつて自働的に起さるべきなのであるが、鵜はその蟲を口に含んだ儘もつと他に澤山の蟲を追ひかけて摑へ、然る後に巢に戻つて來る。」（ラッセル）

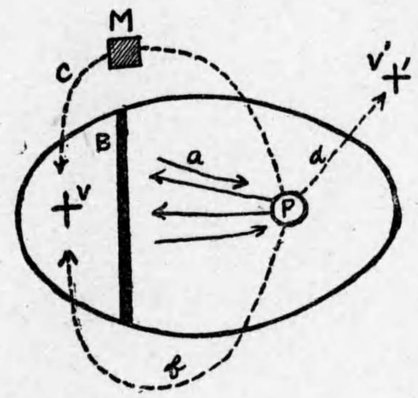
（四）行動の單一な形態を示すに**トロピズム**（Tropism）がある。これはその趨性的刺戟によつて**向化性、向著性、向地性、向光性**、**背光性、向流性、向溫性、向電性**等に區別される。從來此等は刺戟と行動との形式的關係にのみ留意して說かれたが、今後は、**生態學的常態**（ラッセル）との聯關に於て考究さるべきと云ふ。「蚯蚓の有する向化性、向地性、向著性、及び背光性……此の蚯蚓の行動は元來の環境に戻らうとする努力又は試みであると考へる方がより簡單で而も分り易いやうに思はれる。」（ラッセル）

（五）一例を擧げると感化院に收容された兒童が解放の日が近づいた時に却つて脫走を企てる事のあることである。外界の自由なる世界が解放の日の近づくにつれて次第に積極性の誘意性を得て、それが制限以上に强大になり、あへてかゝる行動をおかすに至るのである。

かくて誘意性の强さはその環境の時間的の配置及びその個人の內面的狀況に依存するものである。

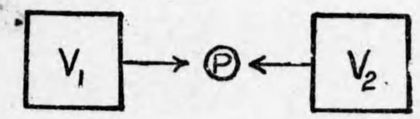
a. 試行行動
b. 迂路行動
c. 手段行動
d. 補償行動
B. 障壁
V. 積極的誘意性
V′ 補償的誘意性
P. 個人
M. 手段或は道具

(六)

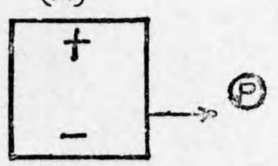


(七) ロ、ハ、ニを圖示すれば次の如し。

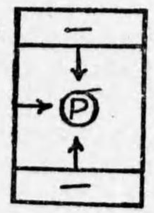
(ロ)



(ハ)



(ニ)



補遺

行動は次の如き相互聯關をも構成してゐる。

a. **重複關係** ——外見的には同じ行動形態を示しても內容に於ては若干の行動單位が重複をなしてゐる場合がある。若干の方向をもつ行動が同一の行動のうちに實現されてゆく關係である。

b. **段階的關係**——ある行動單位はより包括的單位に含まれ、或はより小なる單位を含むことによつて相互に段階的系統をなしてゐる。吾人の日常行動はかゝる段階的系統をなして秩序づけられてゐる。

c. **干涉關係**——ある行動が目標に到達するに至らないで、中途で中止を餘儀なくされる關係を云ふ。行動の複雜な發展がこれから生じてくる。

d. **葛藤關係**——ある狀況に於て二つ以上の方向をもつ行動が相互に葛藤する關係を云ふ。これに對立、拮抗、葛藤の諸形式あることをすでに見て來た。

第四講　行動の發展について

十四　本能的行動は比較的にその現はれ方や對象が固定してゐるのであるが、本能的行動が完全に發現するにはそれに適應した環境の存在が必要である。併し環境は必ずしも常に適應した姿で存在しない。或はその本能的行動を促進し或は抑壓する作用を持つものである。こゝに於て本能的行動は環境との交互作用に依つて或は發達し或は變容して新しい行動樣式を生み出して來るのである。勿論かゝる發達と變容の可能性は夫々の生物の種に依つて相違するが、特に人間は非常に豐富なる可塑性を持つものである。

今かゝる行動の發達と變容の過程に就いて若干の考察を試みる。

一、本能的に規定された自然の行動は一定の目的到達の爲にそれを度々繰返す事に依つて、

イ、速度に於て速かになる

ロ、質に於て巧みになる

ハ、その一々の行動の意識がなくなつて單に目的を意識するだけで充分になる。卽ちその行動に

含まれてゐる部分的な行動が統一せられて、まとまつた全體を形成してくるからである。此樣にして最初に於ける行動とは構造を異にした新しい行動が生れてくるのである。

かくて行動は熟練の過程を經て、合目的的な發展をなしてゆくのである(一)。このことは又吾人が一定の目的に向つて行動を統制、指導せんとする目的的發達、卽ち一定の文化樣式或は作法に適應せしむる樣行動を發現せんとする場合にも同樣に生ずる行動の樣相である。勿論、內面的な精神の訓練、發達もこれに伴ふのである。例へば音樂、語學、習字、スポーツ、繪畫、工作、計算等何れもさうである。文化人は誰でも、かゝる行動の熟練過程を敎育の一面（藝能科）として有するのである(二)。

かゝる行動の發達の速度は必ずしも一樣でなく、リズム（遲速、進步、停退）をなすのである。この行動の發展の型には若干の型式が見出されてゐる。一、直進式、二、律動式、三、掉尾式、四、中段休止式、五、停滯式である。此等は行動の性質、種類にもよるが、又個人の型にもよると云はれる。

行動の發展が一定段階に達すると停滯狀態に達する。これを高原となづけてゐる(三)。練習の持續は又やがてこの高原期を越えて、發展の經路を辿つてゆくのである。高原の生起の說明に於て、一說は、高原を以つて、下級習慣の自動化の時期であると云ふ。卽ち、下級學習が充分强固になつて初めて、上級習慣の形成に注意され以つて第二段の發展が可能になるのである（段階說）。一說は高原を以

つて、興味努力が喪失し、注意統一が亂れ、努力が誤つた方向へ向ひ、以つて從來の練習效果が阻害されることによつて生ずると云ふ。何れにしても、吾々が或技術、技巧の獲得に際し、その高原に達した時は尙奮起して練習を持續する樣心掛けることが大切である。かくて熟練の極には骨（コツ）とか勘とか云ふ特殊の行動が展開されるのである。これには、單なる技術の問題以上に精神全體の新しき態度の創造が參與する(四)。殊に東洋に於ては技藝修練の問題としてかゝる態度が特に重要視される。

或行動の發達は練習せざる行動に影響を與へて發達せしめると云ふことがある。これは練習の波及と名づけてゐる。例へば右手の練習の效果は、又左手にも及ぶのである。左右間のかゝる交渉を交叉教育とも呼んでゐる。次に、練習效果が他の行動を妨害する場合もある。これを練習の干渉と名づけてゐる。

行動の發展の極は、妙技或は神技と云はれる程の極致までに達する。個人の素質もあるけれども練習努力が主として與つてゐるのである(五)。

尙、發展の限界として理論上、生理的極限は認めねばならないが、實例について明示することは頗る困難である。

十五・二、本能的行動の發達及び變容の過程として訓練といふ經路を擧げることが出來る。之は或本能的行動を抑制し、又他の本能的行動を發展せしめ、そこに一つの新らしい行動樣式を生む經路である。例へば獵犬はその獲物に近づいた時、主人がそれを擊つまで靜肅にかまへてゐるし、或は獲物を捕へても强く嚙まない。之等は犬の本來の本能的な行動を抑壓した結果である。併し又他方嗅覺に依る探索行動の如きは訓練に依つて益々洗練せられたのである。かくの如き訓練は動物が環境に應じて一定の行動樣式を學習する事である。かゝる經路は主として成就と失敗の經驗に依る反復から形成せられるのである。例へば、雛を廣場に放つて唯一の穴からのみ餌のある所に歸るといふ風に裝置しておくと始めは本能的に食物を得んとして、あちらこちらと無暗な運動をやる。而るに何かの偶然によつてその穴に入つて餌を求める事が出來る、卽ち成功する、之が反復せられる時、次第に餌のある所に歸る時間が速かになり、同時に行動も圓滑に場面に應じたる形式を取るのである。かくの如く學習して行く經路を試行錯誤に依るといふ(六)、卽ち行動してみて絕えず失敗する、然るにその中に於て偶然に成功する事が生ずる。その反復の後に行動が常に成功してくるといふ行動樣式を生じて來る。所謂訓練とはかゝる行動過程に依つて新しい行動樣式を成立せしめるものであると云ふ。併しかゝる訓練も飛躍的に形成されることもある。又訓練的行動は從來の行動の單なる量的な凝集の結果ではな

くて、新しい行動形態の生産であると考へるのが妥當である(七)。

人間に於ても幼兒の行動樣式の發展にはかゝる訓練的經路がある。行儀作法の學習の如きそれである。人間に於ては環境が甚だ複雜で單に物的のみならず精神的な環境が存在するのであるから、かかる環境に適應するため兒童の行動樣式は非常に複雜な變容を受けて多樣なる行動樣式が生ぜしめられねばならぬのである。卽ち躾とか鍛錬の如きは我々の社會に於ける訓練である。尙此場合、模倣に依つて成人の生活行動を眞似るといふ事による行動樣式の發展も非常に多いのである。卽ち成人の行動が範例として何よりもまして大なる作用を與へるのである(八)。

十六　條件反射　も亦一定條件によつて後天的に形成せしめられる行動である。反射は元來、先天的に決定された行動樣式であるが、訓練的經路を經て新しい行動樣式が形成せしめらるのである。パブロフの有名な實驗はこのことを證明ずる。犬を被驗動物とし、食餌と同時に一定の音刺戟を與へる時、或時期に達すれば、食餌なくとも音刺戟のみにて唾液の分泌を見るに至つた(九)。食餌に對する唾液の分泌は先天的遺傳的反射樣式であるが、音刺戟に對する唾液の分泌は後天的に獲得された反射樣式である(十)。かくてこの條件反射は、第一に、或一定の條件を與へて兎も角も形成しなくてはならぬ。第二に、その普通の形のものは非常に澤山の條件で形成出來る(十一)。

人間に於ても、躾、教育、習慣の如き諸形態のうちにはかくの如き條件反射的形態を見出すことが出來る。

十七　三、次に行動の發達及び變容に於て單に試行錯誤や模倣に依る事なく新しい行動樣式がとられてくることがある(十二)。之を**知性**に依る行動樣式と呼ぶことが出來る。之は行動の反復に依つて偶然の成功を得るやうな過程でなく、與へられたる事態を認識し、それを**洞察**して新しい行動樣式を發見するといふ經路である。人間が動物と區別される所以のものは、人間が高い知性を豐富に持つ事であつて器具を發見しそれを自己の目的のために使用し得る點、換言すれば知性に依つて環境の克服が甚だ自由になるといふ事である(十三)。

偖、今知性による行動の特性を擧げると、

イ、急に或解決の道がついて不安、動搖、無目的の行動から一定の目的ある而も統制された行動に急に變化してくるのである。

ロ、かゝる解決が起るとそれが單に一回でもその後は練習する事なく適應した行動がとられる。時

間は急に減少するのである。

八、或解決に成功し、その原理を學ぶと、同樣の事に適應してゆく事が出來る、卽ち經驗の擴充（應用發展）が可能である。

かゝる知性の作用に依つて吾人は多くの時間と不必要の行動を省略して行爲の經濟をなし、以つて環境に適應し或は支配することが甚だ可能になる。こゝに於いて道具の發見、**技術**の獲得が生じ、以つて文明の發展の基礎が得られてくるのである(十四)。

一度技術が發見されると、直ちにそれは社會化されて共有される。それは又次の世代へと傳へられる。かくて技術は改良の機會をもち、その技術の上に新技術の發見を生んで行くのである。かくて今日においては、技術は益々微に互り、高度の發達をなしつゝある。從つて、かゝる技術の獲得はもはや、人間の自然性なる知性のみでは不可能であつて、教育的方法を通して、熟練、訓練、知性の交互作用による發展を俟ねばならない。

人は更に經驗を抽象し、所謂**知識**として、それを保持する。かくて初め身體的活動と一體であつた技術は、知識として內面化されて來るのである。時には技術は外的な具體的行動として、理論化せる知識と分離對立して來ることもある。併しデューイーの云ふ如く、知識も內的道具性をもつものとして技術と等しく、人間の高等なる精神活動に參與するものである。

次に人間は自己の存在や、宇宙や、偶然的なものや、無常なるものに對して、問題をもち、解決を求めんとするものである。こゝに人間は修業を志し、正しき理想を求め、色々の人生觀を生んで來たのである。かくの如く人間存在そのものへの問題の解決、方法の修練に向ひ、求めてゆく知性を**智慧**（叡智）と名づける。こゝに文化の發展の基礎がおかれる。

かくて人間は技術と知識と智慧とによつて、最も高度の統制された行動を發展せしむることが出來るのである。かくて、文明と文化の發展が可能になるのである。

(一)　例へば雛は生れた時は直ちに穀物を本能的に啄むのであるが、その行動は甚だ拙い、然るに數日後になると、はるかに速かになり巧みになるのである。又幼兒の吸乳運動も最初よりは日のたつにつれて巧みになつてくるのである。此事は一方には身體の成熟が並行し、又一方には精神作用の發達が隨伴してゐるのである。例へば人間に於て握る運動（一ヶ月）、匍匐運動（一〇ヶ月）、歩行（一二—一五ヶ月）などは身體の發育の一定の時期に現れる。然もその最初に於ては甚だ危く不安定であるが、反復するにつれて次第に巧みになるのである。又描畫の如きも初めは無暗な「搔畫」的な運動であるが二年頃になると圓運動、水平運動、垂直運動の如き描線の運動が分化發達してくるのである。發音の如きも又然りで初めは未文化な喃語であるが、次第に明瞭な發音が生じてくるのである。

(二)　「熟練と能力とはみなこれに相應する行爲によつて維持され、また增進されるものである。例へば歩行の能力は歩行することにより、疾走の能力は疾走することによつて維持され、また增進される。若しおんみ達が巧に朗讀したいなら絕えずさうするがよい。おんみが（立派に）書かうと欲したら矢張り書かなければならぬ」（エピクテートス）。

（四）藝能之熟動之以天妙在才不才之外。（言志叢錄）

（五）人一能之己百之人十能之己千之果能此道矣雖愚必明雖柔必強。（中庸）

（六）今有名なる實驗の一例を擧げると、ソーンダイクは問題箱といふものを造り猫を使つて實驗した。此箱の內部には垂れてゐる紐があつてそれを引くと戸が開くやうに裝置してある。今猫を箱の中に入れ、箱の外に食物を置く、此箱の中に入れられた猫は本能的にその箱を出て食物を得んと無暗な行動を開始する。然るに偶然にも足が紐にふれて戸が開き外へ出て食物を得るに至る事がある。かゝる過程を度々繰返して行くと戸の開く早さが速かになり無益なる行動が省略せられてくるのである。即ち環境に適應した妥當なる行動群が形成されて來たわけである。かくの如き實驗は迷路の學習實驗において數多く行はれてゐる。

（七）從來かゝる訓練學習の學說として若干主張されてゐる。

頻數の法則…學習は數多く反覆されることによつて成立する。

近接の法則…最も近接した行動は再び繰返へされる傾向をもつことによつて成立する。

（三）

效果の法則…成功すればその行動を強め、不成功なれば行動を弱めることによつて成立する。

併し此等は實驗者の操作的方法から類推せるものであるが、尙これ等に妥當しない多くの實驗結果が示されつゝある。動物の行動の內的過程よりすれば、

構造の法則が說かれる。即ち學習は右の諸法則に含まれる機械的聯合によつて成立するものでなく、新しい構造の生產過程であると云ふ。こゝに實的な行動の飛躍性が問題とされるのである。

（八）人に敎ふるに行を以てし、言を以てせず。（乃木希典）

（九）「今メトロノームの音を聞かせる。見給へ今メトロノームの鳴り出してから九秒で既に唾液は分泌を始めた。四五秒、唾液は一一滴、斯くて諸君は見た、餌とは何の關係もない一つの刺戟が唾液腺の活動を起さしめるのだ。」パブロフ條件反射學）

（一〇）無條件反射が、生來反射、種族反射、直通反射と呼ばれるに對し、條件反射は、獲得反射、固體反射、切り換反射とも呼ばれ得る。

（十一）かゝる條件反射の形成の必要條件となるものは、

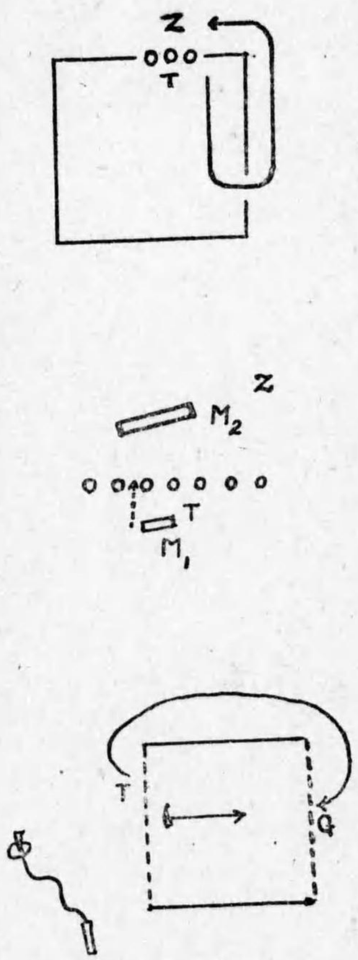
一、外からの刺戟と或一つの無條件刺戟が一緒に與へられると云ふことにある。

二、條件刺戟は無條件刺戟が與へられる前に少しでも先立つて與へられねばならない。若し條件刺戟が無條件戟刺に遲れて與へられるすれば反射は形成せしめられない。

三、被驗動物の一般健康の狀態が問題になる。

四、條件刺戟となすべき動因の性質と無條件反射として選んだものの性質に關する點である。條件刺戟として選はれる動因が非常に强すぎるか或は異常のものである時は條件反射の形成は非常に困難になるか、極端の場合は不可能である。例へば侵害刺戟（强い電流、皮膚を傷けること、皮膚を燒灼することなど）も尙食餌反應の條件として形成せしめることが出來る。併し、侵害が甚だ强い時は不可能となる。「生か死か反射」或は「存在か死滅か反射」の如きは食餌反射より强い防禦反射が現はす爲に食餌反射の條件となることは出來ない。

（十二）知性（Intellect）は智能（Intelligence）と次の點で區別される。



ケーレルの類人猿の實驗例
T……動物
Z……目的物
M……道具

前者は問題を解決し洞察する用意性を指し、後者は問題を解決する能力を云ふ。(ステルン)

(十三) 例へば犬を格子のある箱に入れて、その外部に食物とその傍に鍵のついた棒とを置くと、犬はその食物を得んとして、吠えたり呻つたり格子をかきまわしたりするだけであつて、その棒の利用は全然わからないのである。然るに人間に於ては容易にその棒を利用して食物を引寄せて目的を達する事が出來る。(二歳一ヶ月でこのことは可能である)。但しかゝる知性は人間には勿論著しいのであるが今日の實驗の研究の結果、類人猿に於ても低い程度のものが見られるといふのである。(前頁の圖形參照)。

人間に於ては一一ヶ月頃に紐のついた目的物に對しては紐を引寄せる行動をなす、又二歳になると棒で目的物を引寄せる事が可能になる。

(一四) 類人猿が洞察的行爲を示し得るとはいへ、人間に比して比べものにならない程低く、文化的發達の初歩にも達しないことについてケーレルは次の如き意味を述べてゐる。彼等は言語を缺いでゐると共に、精神的生活時間が極めて局限されてゐること、即ち表象が局限されてゐることにあるとおもはれると。

第五講　環境について

十八　環境は、精神生活に不可缺の條件である。精神生活は、常に環境に於て、環境に向つて、環境に順應して、進展するものである。個體と環境は相卽不離の全一的組織をなすものである。ステルンは、精神生活を內界と外界の火花であると言つてゐる。

一般に環境を論ずる場合は、環境を個體との關係から抽象して、環境がそれ自身存在するが如き形態に於て考へられてゐる。併し、現實には環境は個體との關係に於て、初めて具體的な行動的環境として意味をもつに至るのである。故に心理學的に考察するときは、環境とは、その個體に何らかの影響を與へるもの、行爲に何らかの聯關あるもの、行爲に對して何らかの意味をもつものとして考へられねばならない。環境は單にそのものとして在るのでなく、吾人との關係に於て有意味となつて現象するものである。吾人のあらゆる行動は個體と環境の函數であるとして規定される。かゝる意味の環境を**行動的環境**と名づける(一)。

かくて、各個人は各々それ獨自の行動的環境をもつと考へられる。又兒童に於ける行動的環境と、

成人のそれとは又各々その內容於於て、廣狹に於て、意味に於て相異るものである。又同一の個人に於ても行動の展開と共に、行動的環境は意味を異にしてゆくものであつて、力動的な經過をなすものである。又今日の如くニュース、新聞、ラジオ等の迅速なる報知は、吾人の現實經驗を超越した極めて廣汎なる世界を環境として開展せしめるのである。かくて環境との交互作用による經驗は、行動的環境の內容を形成してゆくが故に、行動的環境は單に現在的處與であるのみでなく、その個人と環境との從來の諸經驗、習慣に規定されてゐるものである。行動的環境はかくて、個人の生活史を擔つてゐるもの、卽ち歷史的なものでもあると言はねばならぬ。

十九　次に環境と個人の交互作用についての具體的內容を吟味しよう。こゝに若干の型が見出される。

環境の個人への影響、或は個人の環境への反應は意識的であることもあれば、又無意識的であることもある。先づ無意識的の影響について、

(イ) 第一に肉體的影響が擧げられる。光線、氣壓、乾濕、ガス、溫度、藥物等が、生理的變化をもたらして、肉體へ影響を與へる。これは間接的に又吾人の行動に影響を與へる。或は有機感覺・身體感覺の意識を伴ふこともある。これを又、緊度的影響とも言ふ。

氣候・風土の影響と云ふものは、多くかゝる仕方に於て吾人を刺戟する(二)。或は又生活地區の空氣、日光、飲料水、或は社會的施設としての衞生設備の良否、等もかゝる環境の影響として吾人を規定して來る。

(ロ) 環境の影響が識閾下に於て與へられた場合である。意識はされぬが何かの影響を與へる場合、或は素地性として與へられてゐる場合である。吾々の生活は何等かの雰圍氣のうちにあるので、それが素地性となり、或は習慣となつてゐる爲に意識されぬが、その精神生活に背景として聯關するのである。例へば敬虔な家庭のうちに育つ場合、不識の中に敬虔的な雰圍氣に同化して了ふのである。或は風土の景觀、明暗等の知覺的影響も素地となつて行動を規定する。

かゝる仕方の影響も、吾人の精神生活の進展には極めて重要なる役割を演じてゐるのである。風習・傳統・精神的雰圍氣の如き影響がそれである。

(ハ) 精神分析學派の云ふ無意識であつて、無意識界への欲望の壓迫、それによる意識界への刺戟、緊張、此等の力動的の作用が人間の行動を規定する。例へば環境との交互作用による經驗、印象が復合體（コンプレックス）として無意識に潛在すれば、その復合體と聯關せる環境は行動を特殊の方向へ決定して來る。フロイドは精神生活の形成に、幼兒の經驗と云ふことを重要視するのであるが、その考へ方からすると、成人に於ける環境は、幼兒時代に於ける環境の意味が含まれてゐると云ふことが出來る。

以上の環境は、日常は氣付かれないから、個人にとつて、直接に問題にされぬが、併し、大氣を吾人が呼吸する樣に、大切な役割を演じてゐるものである。

二〇　次に環境は意識的な影響として作用する。これは自我が環境に對して、如何なる定位をとるか、それに如何に働きかけるかと云ふことが意識されてくる場合である。この場合の環境は、自我にとつて存在の價値或は行爲の意味として現はれるのである。この場合の環境の作用を、**環境體驗**として特質づけることが出來る。殊に、文化的環境、社會的環境の如きは、主として環境的體驗を通して、與へられるのである。この體驗にも若干の類型を區別することが出來る。

一、**衝動的體驗**――本能的傾向を刺戟することによつて、衝動的に情緒的昂奮を生起し、行動が發動する場合である、所謂官能的、感覺的な刺戟に充てる環境は、かゝる衝動的體驗を以つて、その個人の生活を規定する。

かゝる衝動的體驗の基底をなすものは一つは環境的刺戟が個人の生存發展の本能的傾向を抑壓制限する場合であり、他はあまりにその滿足が容易なる場合である。前者は生活に不調和、分裂の傾向を與へるものであり、後者は衝動の飽和をもたらし、無氣力の生活を招き、誘惑に負け易い傾向を與へるものである。

二、**理解的體驗**――これは自我と他我との相互關係についての體驗である。勿論この相互關係は、無意識的に行はれることもあるし、又、この關係の意識が衝動體驗として發動することもあるが、こゝで云ふのは、社會的關係が可能にされ、秩序が維持されてゆく際の體驗である。かゝる體驗を與へるものは社會的環境である（勿論、客觀的精神としての文化的環境も含まれる）。

人が社會を環境として受ける影響は、測り知ることが出來ない程、豐富であり、多樣であり、又決定的である。こゝに自我、汝、及び我々なる意識が生じ、これにつれて、同情、反感、優越、劣等、自負、謙遜等の感情が强化されて來る。

三、**價値體驗**――最も高い環境體驗であつて、環境による自我の中心的な態度決定を與へるものである。宇宙について、人間について、自我についての諸體驗、或は原理、理念、當爲の意識である。かゝる體驗を與へる環境は單なる物質的のものではなく、精神の客觀的表現たる文化の世界である。卽ち科學、藝術、宗教、倫理の世界であり、そこに眞、善、美、聖の如き價値が生まれる。文化的世界に住むことは、價値體驗を通して、かゝる文化の生産者たる精神にまで高められることである。文化を通して吾々は所與の世界を超越して、廣大なる精神の世界へ這入ることが出來る。良き、高き文化的環境に在ると云ふことは、精神の發展にとり極めて重要であつて、そこに教養ある精神生活が生れて來るのである。

二一　個人は誰でも、或特定の環境をもつものである。何故に、他の環境を持たなかつたかと云ふことは、人間としての運命である。過去をかへり見る時、環境はどうすることも出來ぬ力を以つて、吾人に嚴然とのぞんでゐるのである(三)。併し、將來を見る時、人間には、尙その所與の環境を、異つた環境へと變革する意志とその可能性が與へられてゐるのである。又かゝる自覺的決意及び行爲は過去の環境の意味も變革し得る。勿論、全然環境から逃れ去ることは出來ない。唯そこに形態の異なる環境のうちに這入ることである。卽ち人間の價値意識にとつて、より價値ある環境をもつことである。これは人間の自己意識の自覺的要求として與へられると同時に、人間の教育意識にとり極めて切實の問題となる。兒童、青少年により良き環境を與へると云ふことは、精神生活の指導育成に必要であるからである。

二二　人がそれに於て生長し、絕えず接觸して、その精神生活に根源的の影響をうける環境は家庭である。家庭は社會の一單位であると同時に個人にとつては、環境の基礎的單位である。人はその精神生活に、家庭を背景に擔つてゐると言つても過言ではない。從つて、家庭のもつ物質的或は精神的影響は、そこに生ひ立つ兒童に對し決定的の力を有するものである(四)。精神的影響としては家庭のもつ精神的雰圍氣、所謂家風、職業、兩親その他の敎養、その兒童に對する態度、躾方等が擧げられる。又兄弟姉妹の數、出生の順位、經濟的狀態等が兒童の特殊の家庭意識を形成して、影響してくる。就中、兩親と兒童との關係がその重心をなすのである。

家庭は聖人君子を生む基本的環境である(五)と同時に又、不良兒、要保護少年をそだてる溫床にもなるのである。家庭を價値目的に沿ふて統制、整理すると云ふことが精神發達の爲に必要事である。

兒童は成長するにつれ、家庭を出て、廣く社會、文化環境へ接觸して來る。青春期ではそれが甚だ著しく、未知の好奇に充ちた社會への交涉は、精神的動搖或はそれへの情熱的態度を惹起せしめる。かくてあらゆる社會的な經驗、體驗を通し、一個の社會人として、社會文化の環境に順應してゆくのである。

二三　環境は一時に强烈なる影響を與へるものとして現はれる場合もある。顯著な價値體驗の如きはそうである。併し、環境は一般には持續的に、或は度々個人と接觸、交涉することによつて、影響をもつものとして現はれるのである。卽ち環境と個人とからなる習慣的組織を形成することによつて環境はその個人にとり極めて固有の環境として出現するのである。家庭、學校、鄕土はその顯著なるものである。殊に絕えず接觸する人々、卽ち兩親、友人、敎師、先輩、或は書物を介しての聖賢の態

度、風貌、意識、思想は決定的の影響力をもつものである。

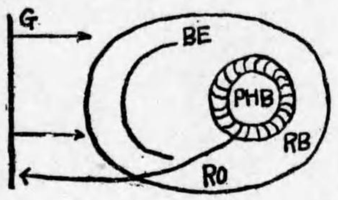
二四　精神生活の規定的因子として環境と素質が考へられる。素質の展開に對して環境が條件的に規定してゆくところに現實の精神生活がある。或論者は環境の萬能を唱へ、或は素質決定を主張する。前者が教育の樂天論になると共に、後者は決定論に傾く。但し此等は環境、素質を抽象して、その一面を强調したのであつて、片面的であるのを免がれない。蓋し、この問題は「**環境も素質も**」として相卽不離の關係に於て把握されねばならない。

併し、このうちに於ても、環境的因子の優位なる意識過程と、素質的因子の優位なる意識過程を見出すことは出來る。大體から言つて、智能の機能は比較的に素質的規定をもつが、その經驗の內容（例へば語彙の寡多）は環境的規定を多くもつ、氣質は素質的に、性格は環境的に、多く規定されると考へられる。

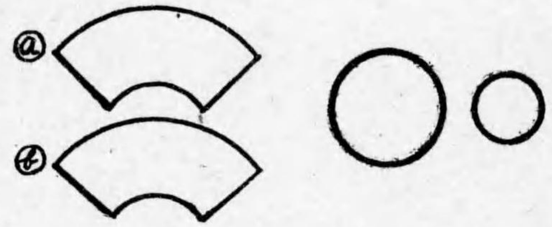
此等は勿論比較的なものであるが、此等の優位關係を區別することは、教育指導の上から、大切な點である。此等の實證的な決定の爲に、多くの研究が遂行されつゝあるのである。

（一）（イ）行動的環境の背後に地理的環境或は物質的環境が考へられる。併しこれは、行動的環境を生產するもの、行動的環境を機能的に規定するものであり、又、方法論的には、異つた條件の下に於て把握される環境である。田舍は或個人にとり閑寂なる自然の懷と感ぜられるが、他にとつては單調、且無活動の退嬰した世界として映つる。地理的環境としては相等しいが行動的環境としては相異る。

（ロ）コフカは次の如き圖形をあげてゐる。



G……地理的環境
BE……行動的環境
RB……現實的行動
PHB…現象的行動
RO……現實世界



（ハ）行動的環境についての實驗、レヴェッが行つた雛を使つての動物實驗がある。

一、小さい方をついばむやうに練習せしめた。大小の位置を變へて訓練する。

二、かゝる訓練を終へた雛は、二つの何れをついばむか、即ちヂヤストローの錯覺を使用して臨界實驗をした。

a.b.は地理的に相等しいが、行動的には等しくない。即ちaの方が小さく見える。上の訓練を經た雛はaをついばむといふ結果を得た。（コフカの引用より）上圖參照。

（二）各民族の有する精神生活、文化の形態の相違がかゝる風土的環境の相違からも說明される所以である。

（三）「人間は世界に投げ入れられてゐる。それは人間の有限性としての根本規定である。即ちIn-der-Welt-sein（世界內存在）である。」（ハイデェゲル）

（四）**學校**とはこの意味で、最も統制され整理された環境として青少年に與へられる社會的、文化的環境であるのである。デューイーによれば學校には次の三つの機能が考へられる。

第一に單純化された環境を與へると云ふことである。多樣複雜なる社會狀相及び文化を選擇し秩序立て、以つて靑少年の精神發達に効果あらしめんとするのである。

第二は無價値の環境は出來るだけ排除し、價値ある純化された環境を與へることである。

第三は社會環境の各要素の均衡を保たしめ、個人をしてその生れた社會環境の特殊性を離脫して、一層廣い環境と生きた關係に入らしめるといふことである。

かくて學校は、吾人の社會的、文化的環境から、單純に秩序化され選擇され、又、より調和ある世界へ這入らしめる適當なる環境として、社會が設けるところの理想的環境である。

(五)　人を本當に作り上げるには平素の家庭が最も大事である。(東郷平八郎)

補遺

最近心理學の理論に於て場といふことが重要な概念として主張される。これは行動の力動的形態を說明する爲の基本的な概念構成である。從來、アリストテレス的考へ方によつて、個人の能力、本性といふものを基本的の構成として來たが、今やガリレオ的考へ方によつて、行動は對象と個人の相互の關係的な規定に於て把握されねばならぬとされる。かゝる關係的な規定を問題にするとき、場の概念が必然的に要求されてくる。他方幾何學的空間、物理學的空間がこれに相應して考へられてゐるのであつて、それ等の概念構成を藉りて心理學の現象を精確に說明し表現せんと試みてゐる。即ちトポロギー的心理學、ベクター心理學の如きである(レヴィン)。かくて理論の方面からも環境の概念は亦極めて重要な問題として考へられて來てゐる。

欠

樞、言語中樞等が見出されてゐる。又今日の研究によれば精神作用への影響は一定部位の損傷よりも、その部位の量の大小に多く依存すると云ふ結果も見出されてゐる。(ラシュレー) 但し、一定部位の損傷が、他の部位或は皮質下中樞と如何なる作用聯關をなすやは、今尙未知に屬する。所謂骨相學の云ふ精神機能の個々の定位は最早科學的に全く廢棄されてゐる。

欠

第八講　意識について

三二　意識とは、現在に於て何等かの對象を志向し、それに對し何等かの定位を持つてゐる自我の態度である。意識が無いとはかゝる態度の欠如であり、意識を持つとは、かゝる態度の把持である。意識をもつことは、自我と環境との關係を決定し統制し行くことを可能にするのであるから、精神生活上必要である。人間に於ては、その精神生活の大部分はかゝる意識的生活である。

意識の對象として現象するものが**意識內容**と呼ばれる。之に對して、かゝる對象を志向する作用は**意識作用**（狹義に於ける）と呼ばれる。吾々が今聞いてゐる音樂、見てゐる色彩、或は腦裡に想起されてゐる諸現象は、すべて意識內容であり、聞く、見る、想起することは意識作用である。勿論兩者は不可分の全體統一的現象である(一)。

意識內容は多種多樣であつて、意識の流るまゝにその樣相を異にしてゆくのである。併しかゝる多樣性にも係らず、其れは單に雜然と分裂せるものではなく、構造的統一を示すのである。**多樣の統一**と云ふことが重要なる特質となる。かゝる構造性の特性として**圖形と素地**の關係を擧げることが出來

る。すなはち與へられた多樣の意識內容の若干は、爾餘の素地（背景）の上に現はれるので、兩者は緊密な機能關係を示すのである(二)。卽ち同じものでも圖形として現はれる場合と、素地として現はれる場合とは意識內容としての意味が大いに異つて來るのである。又圖形は單獨に効果を持つものでなく、素地によつて初めて意味があり、又素地の變化は、圖形にも影響を與へるのである。

圖形たる意識內容は一般に明瞭で、安定的で、印象性に富んでゐるし、素地たる意識內容は漠然として不明瞭で、不安定で、從つて印象性も貧弱である。併し、素地は尙圖形を成り立たしめる重要の作用を有するものであると云ふことを忘れてはならない(三)。

圖形と素地は同一の知覺の領域のみならず、又樣相を異にした領域の間にも生ずるものである。例へば音樂會に行つた時に音が主として圖形であり、部屋の光線、陰影、溫度感覺、或は音樂會に臨む氣持、期待、それから生ずる想像的表象等は素地となつて働いて來る。素地は漠然としてはゐるが、尙環境全體の雰圍氣、感じと云ふものをなしてゐるのである。

又同じ知覺領域に於ても、素地には段階が考へられる、圖形に直接聯關する所の**前景素地**と、それ等の全體的背景をなす**背景素地**とを區別することが出來る。

圖形と素地は常に固定してゐるものではなく、移動變化するのである。例へばルビンの圖形或は註

(四)に於ける圖形に於て、白地と黑地が交替する(四)。又吾人が本を讀む時、文字が圖形であり、机の上の色々な事物は素地となつつており、又風の音、電車の響、蟲の音等も素地となつてゐる、然るにふと蟲の音にきゝ入る時には蟲の音が圖形になり、今まで圖形であつたものが素地となる。かくて「顯在的體驗は非顯在的體驗の「庭」に取り圍まれてゐる」し、「體驗の流れは決して純粹に顯在性のみからは成り立ち得ないものである」(フッセル)と云ふことが出來る。

尙注意すべきは客觀的刺戟が存在する事が圖形となる必然的の條件ではないと云ふことである。例へは時計の音が急に止まるときに、靜けさを感ずるが、その靜けさは圖形である。又音樂に於ける休止時間、或は演劇の間(マ)も充分圖形として充實せる印象を與へ得るのである(五)。

三三　さて、意識は構造的聯關をなし全體性をなすものであるが、圖形としてあらはれしものの性質からして意識の分類がなされるのである。從來知と意、或は知、情、意の如き分け方があるが(六)、やゝもすると、各の能力があつて、此等の意識作用を支配してゐるかの如く考へられる。かゝる考へ方は現代廢棄されてゐる。

先づ圖形としてあらはれる**意識の局面**から意識が考察される(意識の局面的把握)。

一、先づ、對象に關する意識として、性格づけられる意識がある。何ものかに對することによつて、意識としての特質をあらはす意識面である。卽ち感覺、知覺、記憶、想像或は思考の如き作用にはかゝる意識の性格が見出される。かゝる意識面を普通**對象意識**として類別する。これは從來の分類に於ける知或は認識の方面に相當する。

二、次に自我の直接態の意識である。卽ち自我の變化狀態の直接意識である。これは所謂、感情、情緒、氣分として呼ばれる意識面である。勿論對象に關してゐるのは勿論であるが、併し、自我の直接態の意識が圖形として感ぜられる處に、この意識面が類別される。快不快、よろこび、かなしみ、いかり、おそれ等は然りである。

三、妨害物に抵抗し、誘惑を抑制し乍ら、ある目的に何つて活動せんとする努力の意識面が見出される。この能働的、活動的の意識が意志と呼ばれる意識面をなす。

此等の諸意識は圖形として强調される意識面であつて、結局一つの意識の表現に過ぎない。

三四　併し乍ら意識は次に**層的構造**をもつものとして把握される(意識の層的把握)。卽ち意識を深さの方向に於て理解せんとするのである。こゝに意識の下部構造と上部構造が大別されるが、上部構

造は下部構造を基底としてそれの上に展開する構造である。下部構造には一般に生物的意識が配される。即ち感覺的、情緒的、衝動的意識である。上部構造は思考、意志、情操の如きもの、從つて自己意識、人生觀、世界觀の如き思想がおかれる。後者は前者の上に基いてゐるので、時々兩者は交渉對立葛藤をなすのであるが、兩者は基底づけるものと基底づけられるものとの關係にあるのである。

前者は生命的な、源本的な、現實的なそして力動的な意識層であり、後者は精神的な、抽象的な、普遍的な、觀想的な意識層である。

三五　次に意識は環境との交互作用によつて**力動的な過程**で進展してゆくものであるが、そこに形成される心的領域と組織とに有機化及び分化の段階が求められるのである。こゝに意識は分節した心的領域群の分化の度合と構造の型に於て把握される（意識の位相的把握）。

精神發達の低い段階の場合或は異常狀態の場合は、かゝる心的領域群の分布が粗であり、且それ等心的領域間の境界線は稀薄である。從つて意識も流動性、變化性に富む。發達せる段階に於て心的領域も分化し、且境界線も明確であつて又調和的である。勿論此等は個人の內部狀態の比較的恒常性を示すのであるが、又外的狀勢との相關に於て、變化移動しゆくものである。

三六　さて此等の諸意識が明瞭に統一的構造をなして現はれるのは**注意**と呼ばれる狀態に於てである。即ち注意と云ふのは、流れ行く意識過程から浮び出る顯著な意識狀態で意識の構造持質を明瞭に示すものである。圖形と素地とが明瞭に把握される狀態である。注意の狀態にある時は、緊張の感を生じ、又圖形に對して自我の一義的の關係を決定し得るのである。尙、注意が集中すればする程圖形の範圍が狹くなるが、同時に精密になると云ふ關係が見出されてゐる(七)。

注意は又、一つの機能として、かゝる意識態度を誘起せしめる作用とも解せられる。「注意せよ」「注意を怠るな」と云ふが如きは、かゝる機能としての注意であつて、換言すれば一つの內部意志動作であり、不要の刺戟を抑制し、目的の刺戟を絕えず圖形として喚起持續せんとする作用である。**受働的注意**とは自然にかゝる作用が生ずる場合であり、**能働的注意**は有意的にかゝる作用を喚起せしめる場合で、緊張を生じ、努力の感を伴ふのである。この態度は吾人の精神生活に於て對象に對し自我の決定的態度を明かならしめる點で重要である。この能働的注意が習慣化して、努力の感もなく、自然に生起せしめられる樣になる場合、之を**第二次受働注意**と呼んでゐる。

注意には**集中的注意**と**分配的注意**が分けられる。前者は一定の意識內容に集中することであり、後者は種々なる意識內容に注意し乍ら、尙調和的態度を維持することである。前者は一心不亂になるこ

とであり、後者は氣を萬遍なく配ることである。何れも環境に對する吾人の順應的態度を可能にするところの大切な態度である。

從來、聖者、賢人が一時に多くのことをなしとげた偉大なる業蹟は、かゝる集中的、分配的注意が極めて敏速に、統一調和的に行はれたことによるものである(八)。

注意が常に移動的で、その圖形たる意識內容が次から次へと變化し行き、少しもまとまりのない場合**注意の散亂**と名づける。これは環境に對する順應的態度をとる所以ではない(九)。

熱中、熱心は、對象の一定內容に對する極めて深い決定的な態度を云ふが、他面からすれば、對象以外の刺戟に對しては隔離してゐる狀態であるから、又**放心**とも考へられる。學者の放心の如きである。かくて精神生活も亦これに應じた特殊の形態をとるのである。**三昧に耽ける**如きは、對象についてよりも、むしろ對象に向ふ行動それ自身への統一調和せる意識であると呼ぶことが出來る。

三七　茫然、恍惚、現つの如き現象は圖形と素地が漠然として來て、それに對する自我のはつきりした態度も喪失してゐる狀態であつて、意識の減退を示すものである。又吾々が非常に疲れてゐるとか、眠氣を催してゐるとかの場合は對象は實に漠然として未分化、斷片的に意識に上るにすぎない。

この樣に意識には段階があり、又意識に上り得る限界と云ふものが考へられるのである。この限界を名づけて**識閾**と云ふ。日常の覺醒せる意識の狀態では若干の段階があるとは云へ、對象は圖形と素地の關係をなして現はれるもので、識閾は高いのである。然るに、睡眠に陷る時や、氣を失ふ場合は外界は意識に上つて來ない。又吾人が烈しい打擊を受けたり、極度の情緒興奮に陷る時も亦甚だしい識閾の低下を來すのである。此等の狀態は、對象に對しての順應した反應を不可能にする。指南力喪失の現象の如きは、周圍の情況、自己の現存する場所、時間等について明確な意識をもち得ざる異常狀態であつて、その個人の環境は甚だしく未分化、分散的の構造を以つて現はれてゐるのである。かく識閾の低下せる狀態を**意識の溷濁**と云ふ。

三八　精神生活を織りなす吾々の諸行動はすべて意識的であるとは限らない。呼吸運動の如き、反射行動、習慣の如きは無意識のうちに行はれてゐる。又想起しようとすれば想起されるが、併し現在は意識してゐない表象群を持つてゐることも吾人の經驗の知るところである。その外、素質、傾向性の如きも無意識のまゝに吾々の現實的經驗を規定してゐると考へられる(一〇)。かゝる考察から無意識の存在が考へられるのである。云はば**無意識**と云ふのは、吾々の行動を吾々の知らないうちに、常に

一定の方向へ形成していく一種の「隱れたる手」であるとも云ふことが出來るのである。無意識を過評價する人は之を氷山に例へる。その八分の七は海水中に沈んでゐる部分で無意識に相當するから、意識はその八分の一の、海上に出てゐる部分に過ぎないと云ふのである。

反射、習慣、傾向性に含まれる無意識性は、吾人の行動を環境に速やかに巧みに順應せしめ、精力の經驗をなさしめる點で大いに必要である。

併し、一方、記憶の方面より問題にされるので、之を想起、意識することが出來なくとも、尙吾人の精神生活に影響をもつ如き無意識の存在である。精神分析學派の特に主張する基本命題であるのである。

前意識——先づ前意識が區別される、前意識は現在無意識的ではあるが、努力により、或は機會により意識され得るものである。かゝる意識の存在は、吾人が日常經驗を以て察知するところのものである。

無意識——無意識は、到底意識されぬものであるが、而も意識を根底に於て規定してゐるものである。かゝる無意識の存在は特殊の方法、例へば催眠術を施こすことによつて知る事が出來る。或は夢、幻像、自働書記の現象、不合理の恐怖心、强迫觀念、奇行、ヒステリー發作の如きを通して察知されるのである。無意識は、自我が如何に沈潛して自己を探究しても到達し得ぬ境界であるが故に、自我に對し、無人稱的にエス（Es）とも稱せられる。殊に、無意識は自我の統制下にある意識に對して結抗的關係をなしてゐると云ふ處に重心がおかれる。精神分析學派は、かゝる無意識界は、充たされざる願望、欲求の世界と考へ、それに對する意識界の拮抗、壓迫の過程に、種々なる精神生活の諸現象を說明せんとするのである。

精神分析學派はかゝる無意識の基本機制として次の如き諸作用を擧げてゐる。

一、個體はその本能的傾向と環境との順應によつて、順調なる進展をとるのであるが、併し現實の生活は極めて葛藤の連續であると見られる。こゝに精神の傾向として、かゝる葛藤の機制が見出される。

即ち、或行動を行はんとするに際して、その動機、願望に於て、相反的傾向が含まれる。これをアムビテンデンツ（相反的傾向）と云ふ。人が異常狀態に陷る時に顯著にこの現象があらはれて來る。この二つの傾向が平衡を保つてゐる時に常態がある。かゝる心的機制によつて著しい精神生活の復雜な形態が織りなされる。

二、補償作用　これは生理作用としても認められるもので、或器官の損傷、破壞が生ずると、他の器官がその作用を償ひ補つてゆくのである。精神生活に於ては殊にこの補償作用が働いて來る。或感覺の缺如、缺陷は他の感覺に於て補償されるのである。併しこの作用は實に意欲の世界に於て强烈に顯現する。壓迫、强制された願望意欲は何等かの形態に於て補償されて發現せんとする。その補償形態に精神生活の特異な姿が生ずるのである。

アードレルは、劣等性感情の補償作用の過程に、精神生活の本態を看取せんとしてゐる。

この補償作用は精神生活に力動的性質を與へるものであるが、若干の諸機制がこゝから展開する。

イ、壓迫機制　不快な印象、或は現實に於て達せられぬ願望は無意識界、或は意識の周邊へ壓迫される、併しこれは消失したのでなくて、尙影響を與へてゐるものである。

ロ、移轉機制　或對象への觀念感情が、それと關係ある、或は無關係の對象へ移轉する現象である。

ハ、代償形成の機制　或對象が、或本來の對象の代用物として、意欲の代償をなす現象である。かゝる代用物、或はその觀念は象徴と呼ばれる。

ルビンの圖形

ニ、同一視の機制　象徴（自然物、大人、親、英雄、主人公等）と自己を同一視する現象である。

ホ、合理化の機制　色々の理由を擧げ、矛盾のなき樣に考へ、自分の行爲が合理的である樣に、他人のみならず自己に納得せしめんとする現象である。

さて、此等は精神分析學に於て見出されて來た諸機制であるが、いはゞ此等は場神生活の底層を流れる精神機制であると考へられる。

（一）ブレンターノは對象の**內在的志向性**を以つて意識作用の特質と考へたのである。

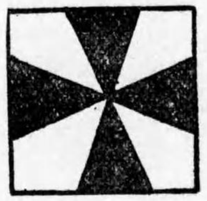
（二）「斯くて物の知覺の各々は一つの背景直觀……の庭を有つてゐる。之もやはりひとつの『意識體驗』約言すれば『意識』即ち隨伴的に觀られたる『對象的背景』の裡に實際存してゐるすべてのものに『就いての』意識である。」（フッセル）

（三）この兩者の關係は對象の微妙な現はれ方を取扱ふ領域では特に問題視されるのである。藝術家はこの兩者の全體的効果について留意を怠らぬものである。一例として利久の朝顏の話及び茶庭の掃除の話を見よ（茶の本、岡倉覺三著　岩波文庫八七—八八、五八—五九）

（五）茶道に於て釜の音に六種を區別し、その一つに無聲（無音）をあげてゐることは、音がだんだんたゝなくなつて無音そのものが圖形として意識されることによるであらう（遠州流）。

又戰鬪に於て銃砲の音が、止んでゐる時は却つてその靜寂さが、無氣味に迫つて來ると云ふ。

（四）



（六）古くは意識は知と意の二つに分られてゐた。即ち認識と意欲の二分法が採られて來た。十八世紀になつてテーテンスが感情を類別して認識、感情、意欲としたことから三分法が確立され一般に使用されるに至つた。現代に於ては論者によつて多少の相違があるとはいへ、大體この三分法を是認し採用してゐる。尙ブレンターノが表象、判斷、情意と分けたのは獨自の區分として注目に價する。

（七）かゝる注意に於ける圖形の範圍を時間的に制限して測定せんとする試みが實驗心理學上なされてゐる。即ち瞬間露出器によつて、瞬間に・（$\frac{1}{50}$〜$\frac{1}{10}$ sec.）數個の文字を呈示して被驗者に認識せしめるのである。

（八）嘗つて私が見た腦の五重奏の如きも結局、練習の極、分配的注意及び行動が調和的に行はれることである。

（九）注意の分散性はよく教育相談に上ることがある、肉體的機構の異常にも基くのであるが、又自我の環境に對する態度の惑亂、不正順應に依ることもある。

（十）千葉博士は固有意識なるものを主張される。即ち外的の刺戟はないのに拘らず、ある知覺的體驗を得るのである。これは視、聽、味、嗅、觸の諸領域に於て、感ぜられるのであつて、これは固有感覺と呼ばれる。從つて嚴密な意味では、所謂無感覺と云ふことはあり得ないのである。又表象も思考も繰返へされることによつて固有化し、それによつて、無意識性をもつことになる。

黒田博士は體驗を識と覺の二方面に區別される。識は普通に云ふ意識であるが、覺は意識と質的に相違した體驗で無意識であり乍ら、而も自證されるものであるとされる。

第九講　習慣について

三九　「吾々の精神生活を顧るとき、殆んど習慣でないものはない。日常の坐臥行儀作法から感じ方考へ方に至るまで、習慣的形態を示すものである。吾人の精神生活は習慣によつて統制され秩序化されてゐると云つてもいゝのである」ヂェームスの如きは習慣を物理的世界迄も互るものとして、宇宙の一般法則とし、極めて習慣を高く評價してゐる。

「個人と環境との交互作用によつて行動或は意識が發展し、やがて、それが比較的にまとまつた、恒常的形態を形成し、同一の環境或は類縁する環境に於ける行動、意識を同じ方向に規定して、その個人の精神生活の自然の傾向持性を示すやうになるのである(一)。即ち習慣は環境に於ける比較的に規定せられた行動、意識の聯關である。」吾人の精神生活はかくて、**習慣の組織**をなすものなりと言ふことが出來る。

動物に於ても尙習慣は見られる　第四講に於て述べた如く、動物に訓練の過程が見られ、或は條件反射が形成せしめられる如きは、習慣形態を示すものに外ならない。人間は、かゝる可塑性を多分に

有すると同時に、習慣を反省意識し、それを破壞し、再習慣化をなすと云ふ點で、他と區別される特質を有する。こゝに又人間存在の優越的意義が見出されるのである(二)。

四〇　習慣はその構造からして、三つの類型に分けられる。

(一)　行動系列としての習慣　これは、行動の反覆、練習の結果、形成された行動の發展的形態であつて、特に、技術、技巧の習熟形態を云ふのである。これによつて、行動が滑かに、而も環境に順應して進展し、環境の要求課題に巧に、又精力を經濟して、反應してゆくことが出來るのである。此等の行動過程に於ては殆んど無意識であつて、唯最初に目的表象を構へることで充分であるのである。

途中で、その行動過程を意識しようとすれば、却つて、行動の阻害が生ずる。それは意識しようとする態度が、一つのまとまつた習慣的行動の體制を紊すからである。音樂の演奏に於ても、うまくやらうとか、間違はない樣にしようとか、効果はどうであらうかとか、意識すると却つて間違ひを生じ易い。無心に彈くと云ふことに、行動の滑らかな習慣的進行があるのである。

教育上の問題として一定の目的に適合する行動の習慣の修練が重要視されるのである。

四一　(二)　一定環境に於ける一定行動形態としての習慣これは或特定の環境、特定の狀況に於て、或は一定の刺戟に應じて、比較的固定せる一定の行動が隨起する時に、その行動、態度は習慣と呼ばれる(三)。早寢、早起の如きは、起床、就寢の一つの習慣形態である。個人の持つ種々なる癖も、又、職業上そこに從事する人に生ずる行動、態度の特異性も、かゝる意味の習慣である。かゝる習慣形態は、その個人が環境に於て示す恆常なる行動であるから、直接その個人の生活像を示すことになり、性格の特性となつて來るのである。即ち、習慣が獲得された自然、第二の天性と稱せられて來る所以である(四)。

目的的に新しい習慣を形成するには次の如き若干の格率がある。

イ、出來るだけ强固な、決定的初志の覺悟を以つて始める。

ロ、新しき習慣が形成され、それが根を置くまで例外を許してはならない。

ハ、多くの習慣を同時に形成しようとせず、一つ一つ完成してゆく。

ニ、習慣の形成の機會を出來るだけとらへ反覆する樣に心掛ける。

ホ、絶えず最初の動機を再生し發奮の情を新にする。

新しき習慣の形成は、他方舊い習慣の破壞を伴ふのであるが、尙、破壞を主なる目的とする場合には、その習慣と相應する環境を努めて避けること、自分の行動、意識をかゝる習慣に規定されぬ方向

へ努めて向けること等が、以上の格率に付して考へられるのである。「勇者の如くたたかへよ。習慣は習慣によつて打克たれる」(イミターショ・クリステイ)。

かゝる習慣の形成は年齢によつて、その速度や强さ等に相違がある。子供に於ては可塑性が非常に大であるから習慣は速やかに形成され、第二の天性の如き性質を得て來るのである(五)。この點は教育上大いに注意を要することである。

二十歳頃以後は新習慣の形成は困難になり、漸次職業的な習慣を成立せしめてゆくのである。

四二　(三)　心構へとしての習慣これは經驗の結果、一定對象に對する心的傾向が形成されることを云ふ。吾々は幼時から、種々なる經驗をもつから吾々は環境の諸對象に對して何らかの心的傾向を形成してゐるのである。これによつて環境への順應が可能になる。この心的傾向は各個人の見方、感じ方、或は考へ方として發展する。これによつて事物に對する欲情、好惡、嗜好、恐怖心等が說明される。コンプレックスの形成の如きも、かゝる習慣の形態である。

かゝる習慣の形成はその個人の內面的世界の構造を特質づけてゆくところのものである。

興味——興味は、快適な感情を與へる如き對象への心的傾向であつて、從來の快適な經驗から形成されるものである。興味ある對象はそれだけ對象への精力の集中を可能にする。

趣味——趣味も亦或對象への心的傾向を示すが、それは、主として審美的な態度に係はるものである。そして對象の構造について普遍的な判定をする力も含んでゐるのである。カントは「趣味とは普遍妥當に選擇すべき美的(直感的)判斷力の能力である」と定義してゐる(人間學)。だから吾々が趣味をもつことは、それだけ對象世界への擴大あり、內面的世界の展開であるのである。

情操——情操は、或對象に對して一定の情緒的構へをなし、それと深い緊密なる聯關を形成せる態度を云ふのである。情操は一般に人間精神の價値領域にかかわるもので、眞、善、美、聖の如き價値を對象とする。そこに生成された情操は各々論理的情操、倫理的情操、美的情操、宗教的情操、等と呼ばれる。此等は決して一朝にして生ずるものでなく、絕えず環境との接觸によつて生成する心の態度の習慣である。

情操の方向に、興味や趣味の對象が決定されると共に、興味や趣味によつて、情操が深まつてゆくと云ふ風に、交互的作用が認められる。

此等の習慣が、次第に發展して强固になり、その個人の精神生活の重要な部分となるとき、その個人の品性、性格、或は教養を擔つて來るのである(六)。

教育的には、かゝる習慣の良き對象を選擇し、指導することが大切である。

四三　習慣が精神生活にとつて、重要であり、効果あることは言をまたない。それは、精力を浪費することなく、環境にうまく順應し、以つて精神生活を順調に進展せしめるのである(七)。同時に、習慣は單に個人的のものばかりでなく、社會的共同であることによつて、社會の秩序を保守維持することに大いに役立つてゐるのである(八)。

併し、習慣も缺點を有たぬものではない。惡習慣はその破壞の爲には、二倍或は三倍の精力を要する。或は全然破壞されぬまゝに痕跡を殘すと云ふこともあり得る。技巧の習慣に於て惡い癖が成人してからも、尙影響すると云ふ如きことがある。

習慣は生活を秩序化し、統制するが、併し、一方からするとそれは束縛をもつことにもなる。吾々が或習慣から逃がれ樣として習慣を反省する時、そこに**習慣の束縛性**、桎梏性を感ずるのである(九)。

次に習慣は、無意識性、無反省性をもつが故に、それは、精力の經濟効果をもつものであるが、又その故に、機械的、表面的と云ふ性質を得て來る。殊に、一定の規範、價値に對する習慣形態に於ては、自然にそれに對する緊張が失はれ、それへの意識が脫落して來て、初めに於ては、價値に對する心的態度は生活に於て大いに意義があつたのであるが、次第にその意義を喪失して來るのである。吾々は、習慣に流されない樣、心構へを絕えず新しくしてゆくことが必要である(十)。

(一)「習慣は恰も自然の如し」(アリストテレス)。

(二)「……我等が習慣の範型を發見し得るは唯意識に於てのみである。唯意識に於てのみ習慣についてもはやそれの外に現はれる法則を確認するのみならずそれの『如何に』と『何故』とを知ること即ちその生成を洞察しその原因を理解することを期待し得るのである」。(ラヴェッソン)

(三)　これに關して興味ある話がある。ある退職兵士が自分の食事を家へもつてかへつてゐた時に、常習犯たるいたづら兒が急に「氣をつけ」と叫んだ。すると兵士の手は直ちに下方に眞直に伸された。そうして自分の羊肉と馬鈴薯は溝の中へ落ちて了つたのである。この場合この兵士の敎練の習慣が作用したのである。

(四)　かゝる習慣の形態には良き習慣、惡い習慣が分けられる。習慣の良否は、そこに生ずる行動が社會に、道德原理に、如何に關係するかについての價値判斷によつて決定されるのである。心理學的に見て、次の樣な一般的傾向がある。

イ、良い習慣と言はれるものは、比較的にその形成が困難であり、他方、比較的に、破壞され易い。

ロ、惡い習慣と言はれるものは、その形成が比較的容易で、破壞が困難である。何となれば良い習慣は價値を志向するが故に本能的傾向の任意的欲求を抑制、禁止し、それに伴ふ不快感、努力の緊迫感をもつこと、及び一般に、良習慣は惡習慣を破壞し、再習慣化をなすのであるが故であり、又、他方惡習慣は本能的傾向による任意的欲求への從屬の結果であつて、衝動的な滿足を容易に充たすが故である。

かゝる習慣が人間の存在にとつて極めて重要の位置をもつことは、それが精神の力動的發展の基底として働いて來るからである。プース大將夫人は敎育の秘訣として「惡魔(惡習慣の意)の先を越えて敎へるだけです」と答へた。「恐るべき種類の死がある。これは惡しき習慣と呼ばれる」(アウグスティヌス)。これ等は習慣の人間學的意味を明らかに示すものである。

(五)「子曰性相近也習相遠也」(論語陽貨十七)

（六）「良き動機にすぐさま從はんとする習慣はパラダイスに至る最も近い道である」（ヒルティ）。
（七）「習慣は知的能率の條件である。習慣は二つの仕方で知性に作用する」（デューイー）。
（八）「習慣は社會の巨大なる制動輪であり、その最も貴重なる保守的代表者である。これのみが法令の範圍内に於て吾人を確保し、金持の子供を貧民の子供に對する羨望的暴動から救ふものである。これのみが困難にして且嫌惡すべき人生の歩みをば、その中に踏み入るべく育てられて來た人々によつて荒されぬように防ぐところのものである」（ヂェームス）。
（九）「まつたく、この習慣こそは、強い爪をかくせる女教師とも云ふべきである。それは少しづつそつと我等の内にその權力の根を植ゑつける。けれども始めこそそんなに優しく慎ましやかだが、一度時の力をかりてその權力を植ゑつけてしまふと、やがて恐ろしい暴君の樣な顏をあらはす」（モンテーニュ隨想錄）。
（十）「湯之盤銘曰苟日新日日新又日新」。

第十講　仕事の心理について（付遊戯と休養）

四四　精神生活の過程の大部分を占め、又重要の意義をもつものは仕事である。仕事は日常生活時間の主要部分を占め、生活の秩序、進展を可能ならしめるものである。仕事は、生活目的に緊密に聯關せる身體的精神的活動である。同時に、仕事はその成果が社會に何等かの聯關をもつものであつて、仕事をするとは、社會人として、社會に働きかけるところの心身の活動であると云ふことが出來る。この點、遊戯或は娯樂と大いに異る活動である。かくして、仕事には秩序性と目的性が明かであつて、時には、强制とか義務とかの意識を伴ふのである。

仕事の種類は種々樣々であるが、それが社會的形態としてあらはれたのが職業である。職業は、仕事がなされ行く社會的類型である。社會生活が複雜になり分化するにつれ、分業的になり、職業は益々分化し多樣になつて行くのである。職業はかくて精神生活の大なる規定者となるものである。何となれば職業的形態によつて精神生活の内容、目的、秩序と云こものが規定されてゆくからである。これは又人間の内面的生活にも大なる意義をもつて來るのである(一)。如何なる職業を選び、これに從

事するかは人生に於ける決定的の重要事である。即ち、自己の生活目的に適當した仕事に、又自己の素質、能力に妥當した仕事に從事すること、適材適所にあると云ふことは、その個人の幸福のみならず、社會の健全なる發展の爲にも亦必要なことである(二)。

四五　仕事をして最も効果あらしめんとする方法は、吾々の大いに關心事するところである。特に今日の工業的勞働の如き、生産そのものを目的とする(これに從事する人間の心理をあまり顧みない)時、**能率の問題**が生ずる。この點に關して從來、作業の心理學的研究からして若干のそれに參與する因子が見出されてゐる。即ち、クレペリン一派の研究によつて、五つの精神的因子が見出されてゐのである。

(イ)　**意志緊張**　これは作業を初める時にあらはれる初頭努力、作業の終り頃にあらはれる終末努力、或は作業の中間に動搖的にあらはれる努力等を指すのである。これは、作業をさせてその仕事の量の多少を測つて見た結果、作業曲線にて實證的に見出されたものである。即ち、初めと終りでは特に作業曲線が上昇するのである。

(ロ)　**興奮**　これは作業を續けてゆくうちに、生理的に或は精神的に、これに關與してゐる個々の機能の興奮性の增進を來たすことである。作業が滑らに進行し、その結果曲線が上昇するのである。

(ハ)　**慣れ**　これは前者よりやゝ持續的のもので、作業に關係のある若干の機能がその作業に最も好都合な關係に結びつくことから起る現象である。

(ニ)　**練習**　これは更に永續的の効果で連日作業を行ふてゆく結果、所謂、行動の發展をなす現象である。(第四講參照)。

(ホ)　**疲勞**　以上の諸因子は大體、作業の增進的効果をもつものであるが、これは作業の減退の因子となる。少し長らく作業をつづけると作業曲線が漸次低下して來るのである。これは主として生理的疲勞に起因するものである。この疲勞は睡眠或は休息によつて回復される。併し時には疲勞效果と云つて、疲勞の爲に却つて努力を生じ、一時的に作業增進を來たすこともある。又、障害效果と云つて障害の爲に努力を生じ增進をもたらすこともあるのである。

さて此等の諸因子が、積極的に或は消極的に働き合つて作業の曲線が生じて來るのである。

尙此等の外に、精神的因子が加はる。愉快な、爽快な氣分で仕事をする場合と、嫌々ながら、不愉快に、暗い氣分で仕事をする場合では、その能率は大いに異る。その他、生活目的に對する緊張の程

度、或は競爭、或は本能的欲求に支配される精神的諸態度によつて、仕事の能率は左右される。その他、精神の一定狀態卽ち注意の散亂、雜念の湧出、病的精神抑制、悲嘆抑鬱の氣分、等は作業低下の因子となる。又生理的疲勞の外に、心的緊張の消失、或は飽滿としての心的飽和、卽ち倦怠も亦精神的因子として作業低下の因子となるのである。

かくて、作業の實驗心理學的に見出された諸因子を適當に配分、統制すると云ふことが、作業增進（能率をあげる）の方法となるのである。

四六　日常生活に於ける諸種の仕事は實驗に供せられた作業の如き簡單のものではない。產業勞働、事務の如き作業的形態のものもあれば、藝術、政治、敎育、治療、或は社會事業の如く、一定の目的に統制され乍ら、個々の活動は自由な形態をもつものもある。所謂、筋肉勞働から精神勞働になるにつれて、仕事も多樣になつて來る。併し、何れにしても、生活目的に統制された心身の活動であり、その效果が何等かの社會的關聯をもつのであるから、仕事をよりよくする心術が極めて大切となる。この爲に以上の實驗心理學の成果を顧慮しつつ、次の如き仕事をする心術の格率が出て來る。

（イ）思ひ切つて着手せよ、兎に角仕事を初めることである。それは意志緊張、興奮、慣れ、の因子を伴ふて、仕事が進捗し初めるものである。「一度ペンか耨かを手にとつて最初の一線を或は一擊を下すならば既に事柄は非常に容易になるのである」（ヒルティ）。着手する前に準備のみをし、或は躊躇逡巡するのは、徒らに精力を費して仕事に順應することが出來なくなるものである。

又、仕事に着手し、進行するところに自づと感興と云ふものが生じてくる。それは仕事の進展に積極的な因子として働いて行くのである。

（ロ）元氣な愉快な氣分で仕事に從事すると云ふことである。仕事をつづけてゆくうちに、生理的疲勞、或は心的飽和が生じたならば、それを中止して休息に入るか、或は仕事の轉換をすることが必要である。卽ち、愉快な氣分を保持、繼續するには仕事と休息の配分を適當にすべきで、過度の仕事による疲憊、過度の休息による怠惰を避けなければならぬ。こゝに秩序ある規則正しい生活が要求されるのである。

愉快な氣分で仕事に從事することは益々仕事に氣乘り、慣れを生じ、興味を覺え、それは更に愉快な氣分を釀成する。そしてこのことは、仕事の進捗能率に好都合であるばかりではない。又生活感情としての幸福感を與へて來るのである。嬉々として、仕事をやつてゆくと云ふことは幸福な生活である。

併し、復雜な人生に於ては、强制によつて、或は義務によつて、或は惰性によつて仕事が遂行されることも多いのである。これには仕事の活動から喜びを得ることなく、むしろそれよりの解放を願ふて來るのである。かくて、休息を、仕事のない狀態を樂園であるかの如く表象して來る。併し、單なる休息、卽ち仕事のない休息の如きは決して快適の感情を與へるものでない。休息は働くことの必然的結果としてあるもの、眞の休息は活動の中にのみあること、これが精神生活の通則である(三)。仕事が着々と進捗して、所與の課題が成就されることに、休息の樂しみが與へられる。これに反し單なる休息、怠惰は倦怠、苦痛をさへ與へて來るものである。

愉快に仕事に向つて行く態度は、その仕事のもつ生活の目的、動機と云ふものに規定される。これ等は非常に複合してゐるのであるが、大體二つの動機を區別することが出來る。一つは本能に直接に關聯する欲望によるもの、卽ち生活の維持、名譽、虛榮、野心、貪欲の如きものである。他は原理、理念に對する、或は隣人、同胞、國家、社會に對する愛、義務の感情によるものである。心理上、前者は暫定的であつて、その仕事の結果が仕事への態度を決定する。而るに後者は持續性に富み、その結果の如何にあまり拘泥しない。不成功に陷つても、動機を放擲することは少く、成功によつて眞の快味を與へられるとは云へ、その飽滿と倦怠へ陷る危險はないのである。

從つて、愉快な氣分で、持續的に、元氣で、規則的に仕事に從事するのは、後者の動機によるものが多いのである。

(八) 尙、仕事をして進捗せしめる大切な力は習慣である。勿論一方には、不規則、怠惰、浪費、逸樂、等の習慣の形成は、仕事に對して非常に妨害となるものであるが、一方、勤勉、節制、誠實、規則正しさ等は仕事への偉大なる推進力である。仕事が生活の中に織り込まれた極めて持續的な人間活動である限り、かゝる習慣の規定性は想像以上大きなものである。仕事によつて習慣を養成し、勤勉、勤勞の德を體得すると云ふことは、人生の困難を克服する力を與へ、精神生活を充實發展せしむる所以である。

四七　遊戯　は一面仕事と同じく、心身の活動であり、そのうちに表現もあり、社會的關係もあり、亦一定の規則や規範に規定されることもあるが、遊戯の遊戯たるところは、活動の自由性であつて、直接それが生活目的と聯關せず、從つて、强制とか義務とかの感情を伴ふことがないことである。勿論前述した如く、愉快に元氣に仕事に從事するのは、遊戯と似てゐるのであるが、尙仕事には生活目的への聯關があり、それへの緊張が存在するのである。從つて仕事は、本氣で、統制的である。而る

に遊戯はその結果が社會に關係すると云ふよりも、自己目的的であり、運動の解放の喜び、機能のよろこびであるのである。

兒童の生活には遊戯が非常に重要な部分を占め、又精神發達に大なる役割を演じてゐるのである。實際、兒童は嬉々として遊戯のうちに生活を營んでゐると云つてよい。遊戯は何が故に與へられるか、その存在理由は如何と云ふ點に關して、從來十指に餘る論說がある(四)。

遊戯は自由な躍動した活動であり、愉快な氣分を伴つた運動で、それによつて對象と主觀の融合した狀態が釀される。だから、かゝる遊戯形態を通して、精神生活の進展に有益なる對象、內容を學習せしめてゆくこと、或は對象への興味、感興を誘起せしめて、それへの積極的の態度をとらしめることは、準備說を待つまでもなく、教育上からみて、非常に大切なことである。一面遊戯はやゝもすれば、それに耽けることによつて、怠惰、逸樂の習慣を養ひ、仕事嫌ひにすることがないでもない。併し、又、遊戯のもつ快適にして沒頭的な態度を、仕事に從事する時の態度に移すと云ふことは必要なことである。シルレルは「人は遊戯してゐる時完全である」と言つてゐる。

四八　遊戯の種類は種々雜多であるが、主としてその訴へる精神作用からして、感覺器官に主に訴へるもの、運動器官を活動せしむるもの、及び想像、思考、感情、意志を働かしむるものに分けられる。遊戯は個人的の場合もあるが、社會的になつて大いに發展するものである。內容も、成人社會の再現的模倣、想像的模倣をとるものが多い(所謂、模倣遊戯)。尙進むとそれが戯曲的遊戯へ發展する。

遊戯は年齡の進むに從つて種類を異にして來る。簡單から複雜へと發展すると同時に、精神生活に於ける意味が異つて來る。兒童に於ては、遊戯は生活と密接に聯關してゐる。六才以前に於ては遊戯と仕事との區別は存在しない。六、七才位から遊戯と仕事の區別が生じて來るのである。段々年齡の進むにつれて、遊戯は生活の一分節的な領域を占め、特殊の意味を生活に對してとることになる。青春期、或は成年期になると遊戯の意味は大いに變り、生活にとつて從屬的の位置をとるに至り、又、遊戯的形態も、勝負事、賭、道樂、娛樂、或は趣味と云ふ風に變化して來るのである。勝負事は比較的後年にまで多くの人の興味と關心を引き、それを追求せしめる(五)。趣味は遊戯的傾向の淳化せられた形態として見ることが出來る。

四九　仕事と遊戯は段々年齡の進むにつれて分化して、生活に對し一定の位置を占めて來るのである。前述した樣に仕事は、生活目的と直接に聯關し、現實的に社會と關係し、義務、或は責任の意識を伴

ふもので、生活に對し本氣である。これに對し遊戯は、機能のよろこびとして、自由で氣儘である。興味ある現象は、この本氣と氣儘とが互に緊張して綜合してあらはれて來ることである。これを本氣的遊戯(Ernstspiel)と名づけてゐる。青春期に於てはこの現象が非常に多くて、最大の特徴をなしてゐるものと云つてよいのである(六)。

所與の意識としてはどこまでも本氣であり直面目であるが、その全體の活動には遊戯的のところがあるのである。例へば、社會的事情を考へ、戀愛事件をもち、或は文學、科學、藝術の創造、發見に身を盡くさんとする時、それは決して子供らしい遊戯ではないと云ふことを考へてゐる。併し、此等の活動の現實的意味はその樣に本氣にとられた直接の目的にあるのではなく、その遊戯的形態にあるのである。

併し、この點に於て青少年に血氣に逸る態度が出ると共に、又、純粹に仕事を遂行してゆく偉大なる推進力があると言はねばならぬ。

五〇　仕事も遊戯も、長い連續的活動のあとでは、次第に活動が減退して來るのである。卽ち前述せる如く、疲勞が生ずるのである。これは生理的には、疲勞物質と云ふ一種の毒素が發生して筋肉を痲痺せしめること、及び筋肉活動のエネルギーを消耗せしめることによると云はれる。

身體的に云へば、疲勞が生ずると運動は遲く鈍く、且拙劣になり、從つて能率は非常に減退する。これが尙續くと疲憊狀態になり、禁止の狀態に陷つて了ふ。

心理的に云へば、注意の集中度が減じ、散亂度が增し、意志緊張が弛緩し、不快な氣分を釀成し、感受性は鈍くなり、倦怠の感を生じ、それから逃がれたい衝動を覺えるに至る(七)。

かくて一定限度を越えた疲勞は、仕事や遊戯を活潑に進捗せしめる所以ではない。疲勞は一定の方法によつて回復されねばならないのである。

短期疲勞は一般に休息によつて回復される。これは身體の活動の靜止、或は輕い、性質の違つた運動による。精神的には緊張の解消、氣分の轉換、として與へられる。休息は機能的には疲勞回復の作用をもつが、主觀的には、安易な、快適な心の狀態として經驗される。オアシスなる感情の經驗は緊張せる仕事の遂行によつてのみ與へられるものである。

五一　長期の疲勞の回復は單に休息のみでは不充分で、睡眠によらねばならない。睡眠は生物學的に休息以上の意味をもつてゐるもので、疲勞の回復は勿論であるが、又、疲勞に對して生物體を防禦

する作用である。即ち、本能的のものであるとも考へられるのである。睡眠は、生涯の約1/3或は1/4程の大部分を占めるものであり、睡眠の障碍は堪へられぬ苦痛であり、それは直ちに仕事を妨害し、生活感情を傷けるものである。睡眠は人生にとり非常に大切な機能である。

睡眠は不可思議の現象である。睡眠に於て、意識の喪失、自我の轉換をなし乍ら、又覺醒時に於て前日の自我に復歸すること、睡眠中に於ける夢の諸經驗、かくて明暗の各々相異する世界の交替循環、此等は睡眠をして、古來より人類をして關心せしめた所以である。

睡眠には深さ、淺さの區別がつけられる。主觀的には「ぐつすり眠つた」とか「うつらうつらしてゐた」と云ふ風に經驗される。熟眠と云ふことが、主觀的には安易の休息感を與へ、覺醒後に爽快な氣分をもたらすので、熟眠は快適な生活の一要目をなして來るのである(八)。

睡眠の深さは客觀的には外界の刺戟の量に對する反應によつて測定される(九)。これによれば、睡眠に二つの類型が見出されたのであるが、それは仕事とも聯關してゐるのである。

イ、朝作業型　睡眠に陷ると間もなく深い眠が來て、その後淺い眠が一定時間續いて醒める型である。この人は朝起きた時非常に爽快な感じをもち、朝、仕事をするとうまくゆく型である。

ロ、夕作業型　初め淺い眠がつづいて、後に深い眠が來て、更に一定時間淺い眠を經過して醒める型である。この人は朝は仲々仕事がうまくゆかないが、夕方になると意識が明瞭になつて、仕事がうまく運ぶ型である。

次に睡眠の時間は色々の條件で規定されるが、就中年齢によつて相違するのである(十)。その他季節、體質及び生活條件、環境によつても規定される。

睡眠は生活中に周期的に織り込まれ、且生活にとり重要の機能をもつものであるが故に、睡眠を統制すると云ふこと、睡眠のよき習慣をもつと云ふことは非常に大切な事柄である(十一)。

五二　休息や睡眠は疲勞を醫し、元氣を回復せしめ、以て活氣と新鮮な氣分で仕事にかかつてゆくことを可能ならしめるものであるが、同時に、休息、睡眠それ自體が精神生活の重要な部面をなしてゐるのである。

尙此等と共に、休養としての意味をもつものとして、仕事とは聯關のない若干の遊戯、スポーツ、或は娯樂、趣味がとられるのである。此等は休息より、やゝ積極的に心身の自發的自由の活動によつて、特に精神の慰安をもたらし、仕事のもつ單調、强制、規範から解放せしめ、生活感情を新鮮ならしめるのである。適度の此等の方法の採用は、精神生活の進展に必要なことである。即ち**リクリエシ**

ヨンが大切である。

更に以上の休養的過程の外に、もつと積極的に、精神生活に參與し、仕事を進展せしめる過程がある。即ち心身の鍛練、修養である。これは仕事のうちに生ずる場合もあらうが、又仕事と並行して、特殊の生活過程としてとられる場合もある。かゝる過程は最も有目的であり、意識的であり、明確な自己意識の向上の線に沿ふてゐるものである。これは、仕事並びに生活全體への反省、自覺に依るが故に、仕事及び生活の過程の統制ある形態を可能にしてゆくものである。仕事もこゝで新しく意味づけられ、それに對する深い感興も誘發され、かくて生活の行程が積極的に、確實に、愉快に進むのである。

さて、仕事、遊戯、休養、修養の複合せる諸過程が、吾人の具體的の生活形態を織りなしてゆくのであるが、生に對して如何なる態度、心構へをするかと云ふことが、基本的にそれ等を規定してゆくのである。

(一) 職業は、それに從ふ個人のその職業に對する自覺、意義づけによつて、二つに大別される。一つは生活資料の獲得の爲の職業であり、他は天職或は召命としての價値實現に奉仕するものとしての職業である。

(二) こゝに應用心理學として、職業心理學、職業指導、適性檢査の如き問題が發展するのである。今後とも社會施設、社會教育と聯關して、實踐的問題となるのである。

(三) 「飽滿嫌惡の情の混入をいさゝかも帶びないところの最も大きい感官享樂は健康の狀態にあつては勞働の休息である」(カント)。

(四) イ、勢力過剩說　これは餘分の勢力が發露して遊戯となると說くものである。從つて遊戯は面白く、又疲れること少い。吾人の美的活動もかゝる形態をとるものであると云ふのである。

ロ、準備說　遊戯は兒童が將來成人して社會生活を營むに必要な活動の準備をなすものである。遊戯のうちに、社會生活に必要なる心身の活動が練磨されるのである。

ハ、反覆說　遊戯は人類の過去の生活の反覆である。即ち祖先の行つた活動を、人生の初期に於ける兒童期に於て反覆するものであると云ふ。

ニ、休養說　遊戯は疲勞を回復し、慰安を與へ、休養する意味を有するもので、神經の抵抗の最小の道をとる活動形態である。

ホ、競爭衝動說　競爭的衝動が根源にあるので、それが表現となつて遊戯となると云ふのである。

ヘ、生物學說　成長發育につれて遊戯はあらはれて來るもので、結局身體の發達を充分ならしめる爲に生ずる活動であると云ふのである。

その他、若干の學說があるが、何れも一つを以つて遊戯を說明し盡すことは出來ない。それだけ遊戯は生活にとつて含蓄的であると言へるのである。

遊戯が如何なる目的と意味をもつにしても(私は以上の綜合した目的をもつと考へるのであるが)、遊戯が兒童の生活に缺けたならば、精神發達に障碍を來たして來るのである。遊戯を知らなかつた兒童は、成人になつても、生活的に、性格的に缺陷をもつと言はれるのである。

(五) 此等は生活の緊張から吾人を解放し、一時的にしても慰安を與へるものである。併しパスカルは此等が有する氣晴らしの性質について、人間學的意味を洞見した。「慘めな狀態にある我々を慰めてくれる唯一のものは氣晴らしである。しかし乍ら、これは我々の慘めさの最大なるものに外ならない。なぜなら、これこそ我々が自己を省みるのを殊更に妨げ、我々を知らす

識らず滅亡させるものだからである。これがなければ我々は倦怠に陷つたであらうし、この倦怠は我々を驅つて、そこから逃れ出づべき更に堅實なる方法を求めさせたであらう。だが、氣晴らしは我々を樂しませ、知らず識らず死に至らしめるのである。」（パスカル冥想錄一七一）

（六）「そういふとりゐのない事が若い人にはしば〳〵極めて重大に思はれる。全體から見ればどうでもいゝ事だ、たゞもう僅かつかの間、樂しむためにしば〳〵くだらぬ事をせねばならない。」（ゲーテとの對話、一八二三、一二、二一）

（七）疲勞の實驗的研究としてはモツソーのエルゴグラフを使用する。身體の一部分（例へば指）を作働せしめ、その運動形態によつて疲勞の過程を記錄する。

（八）睡眠と睡眠意識は嚴密にいへば區別されねばならぬ。神經質に於ては眠れなかつたと云ふ意識をもつにも係はらず、實は眠つてゐるのである。

（九）マイケルソンは、球を板上に落し、その睡眠が喚び醒される時の音の強さ（高さ×球の重さ）で、その時の睡眠の深さを測つた。彼は就眠後十五分間毎に、六時間に亙る實驗をしたのである。勿論一度喚び醒されるときの晩は實驗出來ぬから、この實驗は數ケ月の日子を費したのである。

（十）
滿六歲—七歲……一〇時間三〇分——一一時間三〇分
滿八歲—九歲……一〇時間　——一一時間
滿十歲—一一歲……九時間三〇分——一〇時間三〇分
滿十二歲　……九時間　——一〇時間
滿十三歲　……八時間三〇分　—　九時間三〇分
一般の成人に於ては六時間—八時間の間にある。

（十一）睡眠について、種々の學說がある。その主なるものに六つを求めることが出來る。

イ、生理學說　腦に於ける血液の缺乏、血壓の低下が、睡眠を生ずると云ふのである。又睡眠は腦下垂體の分泌過多によるとする說もある（不眠症狀は、かくて腦下垂體の分泌の減退に基く）。

ロ、組織學說　睡眠は、神經細胞に於ける樹枝狀突起が自發的に短縮して、神經細胞間の聯絡が中斷される時に生ずると云ふ。

ハ、生化學說　活動の結果、毒素が生じ、それが刺戟となつて意識の朦朧を來たし、睡眠をやがて生じて來る。即ち神經の自家中毒である。

ニ、心理學說　これは睡眠を以つて、意識の休止狀態と考へ、外界の刺戟がない時には、意識の活動が減退し、睡眠を惹起すると云ふのである。動物實驗の結果も外界の刺戟をとり去る時、一般に意識の減退を生じて睡眠を生ずることを報告してゐる。

ホ、生物學說　これは前述せる如く、睡眠を生物の本能と見るもので、それは單に疲勞によつて生ずる結果と云ふよりも、生物が個體の維持發展の爲、個體を保護せんとする防禦の反應であると云ふのである。

ヘ、精神分析學說　これは睡眠を以つて一つの現實世界よりの逃避の機制であるとし、原始的な、幼兒時代への退行であると考へる。

さて以上の諸說があるが、睡眠についての最後的解決は今後にまつべきものと思はれる。

第二篇　精神生活の分節的構造

第十一講　知覺について（一）

五三　自己の環境として現はれるまゝの種々様々の姿が知覺の世界と呼ばれる。花は紅に柳は緑なる現象の世界である。この世界こそ吾人の經驗の基體として經驗を豐富ならしめるものであると共に記憶、想像、思考を展開せしめる根源であるのである。

知覺は外界に接して生ずるそのまゝの直接の意識であるが、それは鏡が外界を映ずる様に吾人の心に映ずるのではない。又逆に主觀が知覺に於て外界を生産する如きものでもない。知覺は外界の狀態にも主觀の内面的狀態にも依存するものであり、内外の諸條件の聯關から規定されて現象する意識世界である(一)。

その諸條件を考察するに、先づ（イ）外界のもつ刺戟の條件が擧げられる。外界は吾人の感官を觸發すべき刺戟に充ちてゐるものであり、その刺戟の布置構造如何が條件となる。（ロ）主觀の條件として、比較的恒常なるものに感覺器官並びに神經組織の一定構造が擧げられる。此等生理組織の障害はもはや普通の知覺世界を展開せしめることが出來ない。（ハ）次に可變的條件として、心構へ、注意或

は疲勞が求められる。圖形のあらはれ方は此等の心理的條件によつて規定されて來る。(二)尙知覺には過去の經驗の規定が織りこまれてゐる。砂糖の知覺には甘さが與へられ、文字の形象の知覺には意味或は親和の感じが融和してゐる。かくて知覺は此等の諸條件の函數として成立すると考へられる。

併し、知覺も意識全體からすれば一つの分節された過程であつて、その全體意識の方向に規定されてゐるものである。いかなる對象が知覺され、保持され、注意されるかは主觀の全體構造の動向に沿ふてゐる。

五四　知覺過程の中で最も單純でそれ以上に分析出來ない意識を**感覺**と名づける。赤い色、la の音、甘い味、花の香ひ等である。そして此等の感覺が知覺の世界に多樣なニュアンスを與へるのであるから、此等の諸感覺が集まつて知覺世界を構成すると考へられ易い(二)。併し此等感覺も亦複雜な知覺を素地としてゐる圖形であつて、全體的な意識過程から規定されてゐるのである。故に同一の刺戟に對して常に一定の感覺が生ずるものではないのであつて、意識の全體的な流れに沿ふて移動變化するものである(三)。

外界は大小の刺戟群に充ちてゐると考へられるが、どの程度まで直接に知覺し、或は辨別し得るであらうか。こゝに知覺世界に一定の限界があり、又、兩者の間に二、三の法則的關係が見出されるのである。

(イ)　先づ識閾が低下してゐる場合は刺戟が强大であつても、刺戟は不明瞭斷片的に知覺されるに過ぎない。外界は混沌模糊たる世界として現はれる。

(ロ)　高い識閾にあり、環境もよい條件であるとしても、尙、感覺の生ずるには刺戟の强度に二つの限界が見出される(四)。

a.　あまりに微量の刺戟は感覺されることが出來ない。感覺をもつには一定量の刺戟が必要なのである。この最少の刺戟量を**刺戟閾**と云ふ。この刺戟閾は個人によつて相違するので、その價は所謂感覺力の鋭鈍を示すのである。視力、聽力の測定は刺戟閾の測定である。感覺力の鋭いことは刺戟に對して廣く、深く關係し、それに向つて明確なる定位をとり、反應しうるのであるから、精神の發展に好條件である。故に感覺力の教育が問題になる。但しこの測定に當つては心構へ、疲勞、注意或は環境の狀況等が影響するから、全體條件を洞察しておく必要がある。

b.　あまりに强大なる刺戟は感覺されない。その感覺されうる極限の刺戟量を**刺戟頂**と云ふ。

かくて直接知覺世界として出現するのは外界の一定領域に限定されてゐる。そして爾餘の領域は、器械の使用や間接的操作によつて、認知してゆかねばならぬのである。(紫外線、超音波等)

(八) 所與の感覺からそれが變化したと云ふ意識(辨別の意識)を得るには、極微量の刺戟の增減では不可能であつて、若干量の增減を必要とする。こゝに刺戟の變化に對する吾人の辨別の限界が見出される。かく辨別に必要なる增減の刺戟量を**辨別閾**と名づける。今一定の刺戟量Rに對してEなる感覺を生じてゐる。今Eが變化したと云ふ時に要した刺戟の變化量を▷Rとする。▷Rは絶對辨別閾であり、$\frac{\triangle R}{R}$は相對辨別閾である。ウエベルは$\frac{\triangle R}{R}$は恒常價をとると主張した。これを**ウエベルの法則**と呼んでゐる($\frac{\triangle R}{R}=C$)(五)。

辨別閾の測定も亦感覺力の鋭鈍を決定する。それが鋭い程、精密な行動的環境をもつことが出來る。かくて環境に對する妥當なる反應、用意をとることを可能ならしめ、對象の探究、それについての知識の發展を容易にしてゆくものである。鋭鈍が素質的に考へられる場合、智能の一指標となる。

五五 刺戟が感覺される場合に、若干の時間的規定が見出される。

イ、**感覺の漸旺と漸消**

a. 刺戟が感覺として生ずるには一定時間が必要である。又、感覺を生じてそれが本來の感覺となる迄にも若干の時間の經過が必要である。これを**感覺の漸旺**と言つてゐる(六)。

d. 刺戟が消失しても尙感覺は或瞬間殘留する。これを**感覺の漸消**と云ふ。初めは比較的同一の强さであるが、次に急に減退消失する。從つて刺戟を次々に、前感覺の殘留してゐる間に與へると、その感覺は連續してあらはれる(七)。

ロ、**交替反展の現象** 一定の刺戟が與へられてゐる場合、暫くそれに對し續けてゐると、その感覺或は圖形としての知覺が交替してあらはれることがある。例へば、聞えるか聞えないかの音をきくとき、或場合は聞え、或場合は亦聞えないといふ週期的な知覺現象が生ずる。

又六面體の圖を見るとき、此圖形は週期的に反展して見えるのである。そして各々の場合各部分は意味を異にしてあらはれる(又シュレデルの階段の圖を見よ)(八)。

ハ、**順應の現象** 一定の刺戟が與へられてゐる場合、時間の經過によつて感覺は次第に弱くなり、或は消失してくるのである。倒へば或る匂ひを嗅いでゐる場合、暫くするとその匂ひの感じが減少するのである。又着物、眼鏡、指環などの皮膚の觸覺も殆んど消失してしまつてゐるのであ

る。又明い部屋から暗い部屋に入る時、初めは殆ど何も見えぬのに、暫くすると暗さに馴れて事物が見えてくるのである。之等はすべて順應の現象である。

我々の日常生活に於ては何かの順應の狀態にあるものであると考へられる。例へば特に顯著な例として魚屋がもはや魚の臭を意識せず、藥屋がその藥の香に氣付かぬといふ如きはそれである。又我々は常にそこに居る環境の光り（明るさ）に順應してゐるのであつて、各々特殊なる行動的環境が出來てゐるのである。卽ち吾々は一定の順應水準にあると云ふことが出來る(九)。

二、殘像の現象　一定の刺戟に順應した感覺は、現在刺戟の消失の後に於いても比較的長く殘存することがある。これは殘象の現象と呼ばれる。

視覺に於いて特に顯著であり、一定の色を暫く見て、その色を取去ると、その色の反對色の殘像が生ずる（陰性殘像）。同色の殘像（陽性殘像）も生ずることがある。

聽覺、觸覺、運動感覺に於いてもこの現象が見出される。

殘像の時間や明瞭度は個人の素質、或は實驗條件によつて相違する。

さて、以上の如く知覺の諸現象が、刺戟の量的規定や、時間的規定を有つと云ふことは、此等が主觀的規定を大いにもつものであると云ふことである。認識論的立場からいへば、吾人の知覺は刺戟に對して假現的、或は錯覺的性格をもつものと言へるであらう。卽ち人間の認識能力の限定であり、不完全さを示すものとも考へられるのである。併し、かゝる主觀的規定に於てこそ獨自にしてニュアンスに富んだ、生き生きした現實の現象的世界が展開するのである。

五六　知覺內容は多樣な形態をもつて現象するが、知覺作用或は知覺を司る感官に應じて若干の種類に分けられる。從來、五官として擧げられてゐるもの、卽ち、**視覺**、**聽覺**、**味覺**、**嗅覺**、及び**皮膚感覺**はそうである。此等はその刺戟が身體の外部にあり、外部の世界の感受にあづかるが故に外部感覺とも云はれる。尙この外に、身體內の刺戟或は身體の狀態を感受する感覺、卽ち**有機感覺**、**身體感覺**、**平衡感覺**、及び**運動感覺**を擧げることが出來るのである。

此等の諸感覺は各、特殊なる受容器官をもち、それに分布せる求心性神經系統及び中樞に於ける部位をもつものである。感覺は生理組織と極めて平行するものであつて、或組織の損傷は、他の組織からの補償があるにしても、尙、本來の感覺を生起することは出來ない。この故に先天的の、或は後天的の生理組織の損傷、缺陷は、主觀的に知覺內容の限定、歪曲をもたらして來る。從つて、盲、聾、その他種々なる感覺の脫逸の如きは、特殊なる現象的世界、行動的環境をつくつて來るのである。

一方、各感覺のもつ受容裝置は、それに妥當なる刺戟をもつてゐる。例へば視覺に於てはエーテルの振動、聽覺に於ては空氣の振動、味覺では一定の化學的性質をもつ液體、嗅覺では一定の化學的性質を有する氣體の如きである。皮膚感覺は系統發生的に考へると原始的のものであつて、從つて機械刺戟、電氣刺戟、化學的刺戟、溫度刺戟、何れも刺戟として感受しうるのである。

尙、同一の刺戟も感覺器官の相違によつて異つた感覺として生起する。例へば、眼球を强く壓する時に光を感ずるが、皮膚に於ては强い壓覺として生ずる。これは各神經が特殊のエネルギーを有するによる（**特殊神經エネルギー說**）として說明されてゐる（J.ミュレル）。

系統發生的に見る時、皮膚感覺は最も原始感覺であり、視覺及び聽覺は最も發達した感覺であり、爾餘の感覺はその中間段階に位するものである。このことは生物進化の過程としても證明されるが、又感覺器官の構造、刺戟の性質、或は感覺の特殊性質からも言はれることである。

刺戟が身體に近接するか、或は遠在的であるか、或は身體のうちにあるかと云ふことは、感覺の精神生活に對する關係に於て大いに意義をもつものである。有機感覺や運動感覺は身體の狀態、或は運動を感受するものであつて、對象の認識と云ふよりも、自我の一定の狀態、態度の感覺である。故に感情と分つべからざる緊密の融合をなしてゐる。前者は快、不快の情調を帶び、本能的意欲と結びついてゐるし、後者は緊張感、抵抗感、或は力の感情と緊密に融合してゐる。

外部感覺のうちで、皮膚感覺、味覺或は嗅覺に於ては、その刺戟は、その器官に近いか、或はそれに接觸するかしてゐる。これに對して、視覺、聽覺は刺戟が比較的遠くにあつても可能である。この故に前者を**近官**といひ、後者を**遠官**と名づけてゐる。刺戟が遠在しても、尙これを感覺しうることは、その刺戟に對する一層精密な知覺、刺戟の複合としての多樣な知覺、及びそれ等に對する妥當な反應態度を可能にするものである。併し乍ら、近官に於ては刺戟が直接身體に何等かの現實性を以て影響するので、刺戟の物質感、現在感は、遠官より强烈であるのである。從つてそれ等は對象の普遍的關係の認識よりも、對象を獲得し、或はそれを拒否せんとする衝動的意欲と緊密に聯關するものである。これに對して遠官は、對象の普遍的關係、空間、時間に於て現象する秩序、形式を知覺せしめる。この故に、遠官は對象の認識、文化の享受を可能ならしめるものであつて、爾餘の感覺に對して**高等感覺**と稱せられる。

五七　各感覺は夫々質と量を異にした感覺樣相をもつものであるが、以上分類した感覺は非常に性質を異にしたもので、一つを以て他へ歸屬せしむることは出來ない。これを**樣相**の差と言つてゐる（へ

ルムホルツ)。光、音、味、香、觸はこの樣相の差として、各器官が獨得の世界を展開するところのものである。

併し、時には此等が互に聯關して現象することもあるのである。卽ち、音をきいて色彩を感じたり(**色聽現象**—Color hearing)、一定の觸覺、或は有機感覺に色彩を感じたりするのである。此の現象を**共感覺**と言つてゐる。此れ程明確な關係が起らないでも、感覺と感覺の間に何等かの共通したものが感ぜられると云ふことはあるのである。色に寒溫があり、音に太さ細さ、明度があることは經驗される。故に樣相の差と云ふものも比較的の意味であつて、絕對的のものではない(十)。

次に、或知覺をもつ場合、その素地として他の感覺が、不完全乍ら參與してゐると云ふ場合がある。これを**再生感覺**或は**第二次感覺**と云ふ。例へば、彫刻を見るとき、觸覺が浮んで來る如き、或は水を見て、冷たさを感ずる如きである。

具體的に云へば、或一定の對象に對して一つの感覺、知覺が作用してゐるのではなく、他の諸感覺もその素地として參與してゐるのである。故に、樣相の差をもち乍らも、尙圖形と素地の聯關に於て互に交渉してゐると見ねばならない。このことは藝術の鑑賞に於て問題となつて來る。

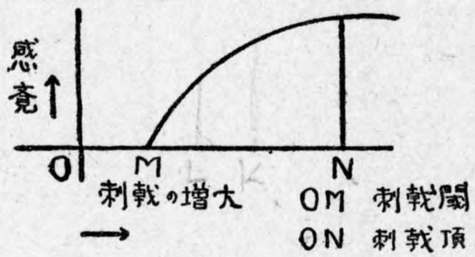
Fechner's law

(一) こゝに認識の可能性、普遍妥當性或はそれを可能にする先驗的形式、範疇等の考察が認識論の問題として展開される。

(二) かゝる感覺を意識の要素であると考へ、かゝる要素の結合によつて複雜な意識界を說明せんとした立場は思想史に見出される。(構成心理學的立場)。

(三) 一定の刺戟に對してどんな場合もそれに應ずる一定の感覺が生ずると云ふ考想を**恒常假定**と云ふ。これも結局感覺を要素として意識を構成せんとする立場の考想であつて、現代廢棄されつゝある假定である。

(四)



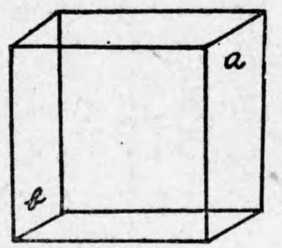
(五) 例へば 20gr. を手にのせるとする、+0.1g—+0.2g—重くなつたと感ぜぬ、+1g—少し重くなつたと感ずる。$\Delta R = 1g.\ R = 20g\ \frac{\Delta R}{R} = \frac{1}{20} = C.$ 40gr とすれば 2g を必要とする。10g なら 0.5g で辨別される。「壓覺」$C = \frac{1}{20}$,「光」$C = \frac{1}{100}$,「音」$C = \frac{1}{3}$,フエヒネルは之を發展させた。$\Delta E = C\log R$ (E = Empfindung)。刺戟が倍になつても感覺は倍にならない。感覺が倍になるためには刺戟は數倍となるを要す。刺戟は幾何級數的、感覺は算術級數的に增加すると云ふのである。

(六) 例へば無色光覺に於て 60σ—120σ, 色感に於て 300σ—350σ である(ヴント)($\sigma = \frac{1}{1000}$秒)。

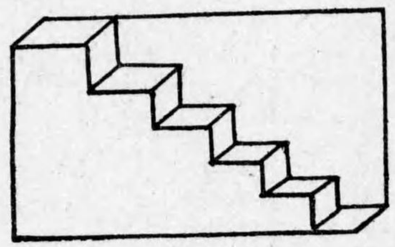
(七) 例、視覺……(47σ), 壓覺……(27.7σ), 聽覺……(16σ). 暗闇に線香の火をまわすと、それは連續的の輪として見えるのも、映畫に於ける連續的の運動が見えるのも、この理によるのである。

(八)

(一)



(二)



シュレデルの階段

(九) 例、

視覺 {明順應 (Helladaptation) 暗→明
暗順應 (Dunkeladaptation) 明→暗}

プルキンエの現象——暗順應に於て、青の系統の色彩が鮮かに見えると云ふ現象である。

今若し順應狀態にある刺戟を意識するためには、

a. 心構へを新しくする事、注意の狀態を惹起する事

b. 刺戟の量を增加する事

c. 一時異つた環境に入る事等が必要である。

(一〇) 今日、**通知覺現象**と言つて、諸感覺の共通性格を見出してゐる。そしてそこに感覺の統一性が豫想されてゐる。

第十二講　知覺について (二)

五八 (一) **有機感覺**……これは吾人の有機體の一定の狀態の感覺で、各器官に分布せる神經の興奮による。その器官の種類によつて註(一)における如き種類が見出される(一)。

此等の感覺は有機體が生命の維持に順調である時はあまり感ぜられず、變調である時に强烈に生じて來る。故に吾人が精神的不安、或は病氣に陷る時に烈しく吾人をおそひ來るものはこの感覺群である。これは感情と融合した未分化の感覺であつて、本能的欲求と緊密に結びついたものである。いはば、生物的であり官能的である。

(二) **身體感覺**……これはその感覺の定位が身體の何れにあるや不明なる感覺である。元氣がある、だるい、疲勞の感等がこれに屬する。これも感情や氣分と極めて融合してゐるので、**感情感覺**とも稱せられる。

(三) **平衡感覺**……これは身體の位置狀態を司る感覺で、內耳の三半器官、及び前庭より生ずる。吾人が正常の身體の位置狀態を保持する爲にはこの感覺の參與が必要である。故に外部的空間水準が

缺如し、或は歪曲する時には、この感覺が重要な役割をなして來る（山頂に立つた時、飛行機に乘つた時、水中を泳ぐ時、エレベーターに乘つた時など）。

五九　（四）**運動感覺**……身體の位置、及び運動を司る感覺であつて、主として筋肉、關節、腱に於ける神經興奮によるものである(二)。

この運動感覺は意志の實行器官の感覺として非常に重要である。吾人の複雜なる行動の習慣統制も亦この感覺の司るところである。特に言語發音の如きは、社會生活にとつて極めて重要な作用である。若しこの感覺の變調を來たす時は、順調なる生活過程を營むことは出來なくなる。運動の器用さの如きもこの感覺の鋭敏に依る。又この感覺が練習によつて上達することは既述した通りである（第四講）。

六〇　（五）**皮膚感覺**……皮膚は身體の殆んど大部分を包み、內部器官を保護すると共に、外部からの有毒物の浸入を防いでゐる。この感覺は殆んどあらゆる刺戟から誘起され、以て外界に對する反應を可能にしてゐる。この感覺の種類は次の如く分類されてゐる(三)。

イ、**壓覺、觸覺**……複合せる刺戟に對する壓覺が觸覺である。觸覺は單にそれが壓として或は接觸の感覺としてばかりでなく、刺戟の空間的形態、秩序をも知覺せしめるのである。かくて觸覺は認識の感覺ともなることが出來る。盲人に於ては觸覺がその認識世界の大部分を占めてゐる。

觸覺は、對象との關係で種々現はれ方を異にし、それが觸世界の諸相を規定してゐるのである。註(四)の樣な現はれ方が見出される(四)。

觸覺には視覺、運動感覺が融合してその觸覺を精密にする（能働觸）。觸覺には又、粗滑、軟硬、丸味と尖り、乾濕等の性質があつて、觸世界の多樣なるニュアンスを與へてゐる。

尙、觸覺の特殊の感覺として「**くすぐつたい感覺**」がある。これは弱い壓覺とその運動感から生ずる。これには又、快と不快の混合した感情が融合してゐる。尙、注意すべきは、このくすぐつたい感覺は人と人との社會的關係の狀況によつても影響される（心間心現學的現象）。

尙、物體の振動についての感覺、卽ち振動體を皮膚に接觸させた時に生ずる感覺がある。之を**顫動感覺**と云つてゐる。盲人はかかる顫動感覺によつて、丁度正常人が空氣の振動を聽覺に於て知覺する樣に、對象の辨別、認識をすることが出來る。

ロ、**溫度感覺**（溫覺と冷覺）……皮膚は常に大氣の溫度に順應してゐるが、その變化に應じて暑さ、

暖さ、涼しさを感ずる。そして發汗、收縮なる機制によつて外氣に適應せんとする。極端の暑さ、寒さを避けて適度の溫度感覺を求めるのは本能的衝動であつて、快、不快と極めて密接に融合してゐる。こゝは日常生活に於ける吾人の色々の動作を規定してくるのである。

固體或は液體に接觸して感ずる溫度感覺は局所性をもち、又對象認識にも與かることが出來る。尙この外に冷かでもない溫かでもない中性的感覺がある。常態に於て刺戟が 28°—29°C の溫度の場合に生ずる(五)。

溫度感覺は一般に云つて對象についてよりも、むしろ自己の身體の狀態感覺卽ち體感性をもつものであり、有機感覺、身體感覺と直接なる關係がある(六)。

八、痛覺……あらゆる刺戟でも生ずるし、又何れの感覺もその刺戟の强度が極度になると痛覺へと轉化するのである。一般に不快調をおびるもので、その刺戟を拒否し或はそれより遠去からんとする極めて强い衝動と聯關してゐる。有機體にとり危險の信號の如き役割をもつものであり、行動をして回避的、背向的たらしめる性格を有するのである。質的差別として刺痛、鈍痛、疼痛の如き種類があり、又各强度の相違も見出される。尙痛覺には普通順應性がないといわれてゐる。痛覺は皮膚面のみならず、又身體內部に於ても多く感知される。

以上の諸感覺は一般に官能的感覺として意識の下部構造に位し、本能的衝動につながるものである。此等は勿論刺戟構造如何に依存してゐるのであるが、又上部構造によつても支配されうるのである。所謂精神的心構へによつて、その感覺性衝動を抑制し、回避することが可能である。修養や訓練等の精神的技術が此處に要求せられる(七)。

六一　(六)　**味覺**……これは舌面と軟口蓋に於て化學的刺戟によつて生ずる感覺である。分析の結果、その主要なる味覺質として四つ、卽ち甘さ、鹹さ、酸ぱさ、苦さが見出された(八)。東洋ではこの四つの外に辛さを加へて五味を擧げてゐる。但しこの辛さは味に豐富なるニュアンスを與へるものである。尙この外に、味覺質から省かれた。併し、この辛さは味に豐富なるニュアンスを與へるものがあるが(九)、基本的の味覺質ではないとされる。澁さ、アルカリ性の味、金屬性の味の如きものがあるが(九)、基本的の味覺質ではないとされる。

味覺の銳鈍は舌面の部位によつて異るのである。卽ち、

舌先—甘さ舌緣—酸ぱさ舌根—苦さ比較的全面—鹹さ

さて、吾々が日常、味として知覺してゐるものは此等の四つの味覺質に限定されない。この外に嗅覺、溫度感覺、觸覺、粗滑硬軟等が圖形的に或は素地的に參與してゐるのである。尙この外に有機感

覺の狀態、視覺、聽覺、運動感覺、更に吾人の經驗（嗜好）が加つて來るのである。尙味の具體的の特性は、味はゝれてゆく進行の過程に出て來るのである。例へば、淡味の如きも、かかる味の力動過程から生じ來たる獨得の味であると考へられる。又、後味がいいとか惡いとか云ふのもこの過程の後影響として生ずるのである。

味覺は有機感覺（特に消化器官の感覺）と聯關して、本能的欲求と緊密に結びついてゐる（口腹の欲）。從つて、快、不快の感情と融合して、對象に對して嗜好を決定して來るのである。

味はふと云ふことは、對象に直接に接してそれを我がうちに攝取すると云ふ主觀の態度があるから、それが對象の一般的認識の方面に移されて「味がある」とか「味得する」とか云ふ言葉が用ひられて來るのである。

尙、味覺は顏面表情と緊密なる聯關のあることが注意される。（甘い顏、苦い顏、などの表情）。又味覺に關する言語音聲が、味はふ時の舌の位置によつて規定されてゐると云ふことも說かれてゐる。

（七）**嗅覺**……これは嗅神部に於ける化學的刺戟によつて生ずる感覺である。この感覺の性質は多種多樣で、分類は甚だ困難である。主として香を與へる物質によつてその性質を言表してゐる。而るに分折の結果は次の六つの基本的の香が求められた。花の香、藥味の香、樹脂の香、果實の香、焦げ臭ひ香、腐敗の臭である。この關係は嗅覺プリズムとして配置された（ヘニング）（十）。

嗅覺は非常に順應性に富んでゐるので、暫らくすると感知されなくなるのである。これも特定の嗅覺刺戟に對してであつて、他の刺戟はこれによつて影響は受けないのである。この順應性の著しいことは對象の認識にとつて好條件ではない。嗅覺は、吾人にとつては對象認識の圖形性よりも、むしろ素地性となるものである。他方、嗅覺は感情（快、不快）と融合するもので、香に對しては、好惡、及びそれに對する衝動的反應が生ずる。但し動物に於てはこの嗅覺は鋭敏、精密であつて、對象認識或は探索の感覺となりうるものである（十一）。

嗅覺には又、中和、混合、對比の現象がある。卽ち二種類以上の香を混合してそれを嗅いで見ると、a.互に打ち消し合つて弱められる。b.混合して新しい香を生ずる。c.各々が別々に知覺される場合がある。

從來東洋殊に我國では香道と稱し、香を聞き（聞香）辨別する一種の遊びが行はれてゐたのである。

六二　（八）**聽覺**……この感覺に於て現象する音の世界は、大體に噪音の系統と、調音の系統に分けられる。前者はまとまりのない雜然たる不安定の音である。吾人の日常的環境はかかる噪音系統が

優位を占めてゐる。少くとも素地性を以つて音の世界を充たしてゐるのである。特に都會に於て自動車の警笛、電車の軋り、工場の響等が喧噪たる噪音的世界を構成してゐるのである。

後者は統一ある安定した音であつて、特定の器具や樂器が與へる音である。所謂音樂の世界はかかる調音によつて構成された世界である。

吾々の社會生活における相互の交渉が主として言語を通して行はれてる以上、吾々の音の世界に於ては特に音聲が重要なる部分を占めてゐるのである。從つて、吾人の音の世界は音響（自然物或は器械の與へる音）及び音聲（吾人の發聲器官によつて生ずる音）の二つの系統にも分けられるのである。音聲に於て、母音は調音的であり、子音は噪音的である。故に此等の結合による吾人の音聲は調音と噪音の中間形態である。歌では調音の方が優位を占めて來る。

調音は、物理的には振動數の秩序ある關係をもつものであるが、心理的にはこれに若干の性質を分析することが出來る。此等の關係は音鐘で示される。

噪音は物理的に振動數の不規則なものであつて、調音の如き性質を明瞭にもつものではない。併し乍ら、ほぼ高さ、强さ、太さ、清濁の如き屬性は見出されるのである(十二)。

噪音は一般は不快な感情を伴ふ。いらだたしさ、不安定、亂雜した感じを與へるもので、それが或限度を越えて圖形性を以つて現象する時、吾々はそれより逃れ或は拒否せんとするのである。此れに對し調音は一般に快の感情を伴ひ、その調和組織された音樂は美的感情を與へて來るのである。併し乍ら、噪音も週期ある連續をなし、全體としてリズムを構成する時調音性を帶びて來る。又、對象に對する心構へ、或はそれのあらはれる素地と圖形の關係からして、噪音も亦美的感情を擔ふこともありうるのである。濤々たる波の響、せんせんそうそうたる小川の奏音、颯々たる松籟、或は機械の響、エンヂンの爆音も亦美的感情を誘發しうるのである。尙こゝでトーキーに於ける噪音の効果も考へ得られる(噪音交響樂)。

調音の複合からして三つの基本的形態が見出される。卽ち、メロディー、ハルモニー及びリズムである。メロディーは調音の高低ある時間的進行形態であつて、歌はかかるメロディー的形態である。メロディーは意識のうつりゆきに最も相應した形態である。

ハルモニーは數個の調音の同時的な復合から生ずる音形態である。ハルモニーの心的特性は全體の零圍氣、氣分と云ふものの意識に相應せる音形態である(十三)。

リズムは調音の强弱、及び長短の秩序的關係から生ずる音形態である。客觀的に强さの等しい連續音を聞いた場合も、現象的にはそこにリズムを知覺して來るのである。時計の音、下駄のひびき、汽

車の軋りも、リズムがつけられて聞かれるのである。リズムは言語の表現にも關係するのであり、殊に詩歌に於ては大いにその形式を決定してくるのである。長短によるリズムは殊に我が和歌に於て見出される。それは綴音の數を基礎としてゐるもので、最も多くあらはれるのは、五七、七五、七七等である。リズムは主として意識の進行、運動に相應する音形態である(十四)。

音には又色々のあらはれ方の相違があり(十五)、音の世界の多樣さを示してゐる。

六三　(九)　視覺……視覺の世界は知覺界を代表する程、最も優位の現象界を占めるものであつて、爾餘の知覺は視覺と一緒になることによつて、その機能を增してゐる。

視覺の世界は、最も空間的な配置を以つて諸對象を現象せしめ、以つて自我のそれらに對する定位を可能ならしむるものである。最も精密にして、廣汎なる行動的空間、生活環境は視覺に於て顯現する。又、他の知覺より精確に對象の姿を知覺し、又それを對象として客觀視しうると云ふ特性は、視覺が所謂事物の認識の基本的世界を可能ならしむる所以となるものである。

視覺は先づ、光覺と色彩感覺の二つの系統に分けられる。前者は、明暗の感覺で眼もくらむ程のあかるさから、漆黑の暗黑に至るまで、約 6,000—7,000 の辨別閾の微差を以つて展開されるのである。光の知覺は光度としての色彩の一つの屬性として、或は物體に定位する光としてあらはれることもあるが、本來は、諸對象が現象する空間の明るさの知覺として與へられるものである。故に明るさに於て事物、色彩を知覺するのであるから、一般に明るさは、素地性を以つてあらはれる。かくて明るさの變化に應じて對象のあらはれ方も變化して來るのである(十六)。明るい時は對象は分節した構造をもち、明確な輪隔をもつてあらはれ、各々は夫々際立つて來る。而るに、明るさが減じてゆくにつれ、次第に對象は模糊となり同質的な霞に包まれる樣になつて來る。暗黑になれば、もはや對象の知覺をなすことは出來ず、暗黑そのものが、吾人の周圍を充たす物質的な圖形として知覺されて來るのである。

明暗は又、感情殊に氣分と聯關する。明るさは一般に爽快、晴朗感を伴ひ、暗さは陰鬱な感じに相應する。あまりに極端の明るさは刺戟過度で不快を伴ひ、焦燥、興奮を與へる。此れに對して暗黑は自己の存在の定位のない、不安、恐怖、不氣味さを、或は又、靜寂、深さの感じを隨伴して來るのである。

最も快適で、事物の認識に好條件の明るさを求めることは、吾人の生活に於て必要であつて、ここに照明、採光の應用心理學的問題がある。

色彩の感覺は色調、飽和度、光度の系統をなして、多樣なる微差を以つてあらはれる。色調は色の種類であり、赤、橙、黃、綠、青、紺、紫で、これは心理的には、紅を經て赤へ還歸する（色彩圓を

つくる)。飽和度は色の鮮明性の程度であり、純粹の色は飽和せる色である。併しこれは又主觀的にも規定されるので、順應によつて飽和度は減ずる。光度は色の明るさで、白つぽさ、黑つぽさを云ふのである。此等が綜合して各々個性ある多彩の色が現象して來るのである(此等の關係は色彩八面體で圖式的に示される)(十七)。尙又、色彩は一定の空間的配置を以つて現象して來るので、その多彩性は更に倍加して來るのである(十八)。

尙、色には前進性と後退性の性質がある。卽ち赤、黃、白の如きは前進し、青、綠、黑の如きは後退する。「青は壁を穿つ」と云ふ言葉が繪畫の方で言はれてゐる。

色彩は感情と緊密な關係をもつてゐる。青が沈靜を、赤が興奮を、從つて色彩に、積極的とか消極的とか云ふ感情價が附せられるのである。その外、冷い色、暖い色、甘い色、澁い色、鈍い色、或は色の好惡等、色彩は多方面に他の意識領域と聯關してゐる。

色彩は吾人の視覺的現象の世界に豐富にして多彩なる內容を與へるものであり、花は紅、柳は綠として千紫萬紅の趣を添へるものである。繪畫藝術の基體をなしてゐる。

視覺の世界に於ては若干の**恒常現象**が見出される。卽ち一定の制限內に於ては對象を變化なく、恒常なものとして知覺することを云ふのである。換言すれば、刺戟、又はそれに應ずる生理的刺戟像は變化するにも拘らず、視覺像としてはもとのままの像として現象するのである。このことは、色について、形について、大きさについて觀察されるのである。かくて寫眞の眼とは異つた世界を展開せしめるのである(十九)。

この恒常現象には色々の因子が働いてゐる。經驗の影響、心構へ、多樣世界の分節された構造(例へば同質的の空間や、單眼視の世界では恒常性は減退するのである)等が規定されてゐる。そうしてこの恒常視は行動的環境の特性を形成してくるのである。

六四　知覺像は、現象として考へるとまことに現實的であり、眞實のものである。而るに、條件たる刺戟に關して知覺像を考へる時は、それと一致しない、又は歪曲されたものとして現はれてくる場合がある。このうち、刺戟を確定的のものと考へて、それについて非常に歪曲された姿で知覺される現象を**錯覺**(Illusion)と名づけてゐる。錯覺は認識の誤謬である。從つて、他の條件によつて訂正されるものであらねばならない。併し嚴密に考へるならば、吾人の知覺世界は錯覺に充ちてゐると云つても過言ではない。併し、ここでは他の條件で容易に訂正される如き、歪曲された知覺像について問題にするのである。

（イ）錯覺はその感覺の領域に依つて諸種に分れる。即ち錯視、錯聽、錯嗅、錯味、錯觸、運動感覺の錯覺、有機感覺の錯覺である。

錯覺の生ずる條件に大體二つある。

a. 精神錯亂に依るのである。これは一時的に常人が精神動亂をした爲に生ずることもある。又、精神病患者の如き一定の病態（妄想、强迫觀念、感覺異常等）から生ずることもある。認識論的には錯覺であつても、それ等の人々には現實の行動的環境を形成するもので、それに對して特殊の反應を誘起するのである。

b. 生理心理的條件によるもので意識の通常の狀態で生ずる。殊に視覺に於ける色々の幾何學的圖形の錯覺は代表的のものである。即ちヴント、ヘリング、ボーゲンドルフ、ツェルネル、ミュレル・リエルの錯覺圖が有名である。又錯觸として、アリストテレスの錯覺、ツェルマックの錯覺等がある（卷末の圖形參照）。

尙この錯視の說明として、知覺の基本傾向を擧げて種々の學說が主張されてゐる（二十）。

（ロ）知覺はそこに何等かの對象の存在をもつのであるが、その對象の存しないにも係らず、そこに知覺像をうる現象がある。これを幻覺（Hallucination）と言つてゐる。これも、錯覺と同じ樣に認識としては大なる誤謬であるに拘らず、現實の行動的環境をなすものであつて、これに對して反應行動をなすのである。

幻覺にも、幻視、幻聽、幻嗅、幻味、幻觸、運動感覺の幻覺、有機感覺の幻覺の諸種類がある。

幻覺は主として主觀の意識の狀態に依存するもので、生理的には末梢器官、感覺の中樞、及び聯絡中樞の自發的興奮によるものと考へられる。常態意識では稀であつて、精神病の如き病態に於てよく現象するものである。

幻覺の內容は簡單なもの（例へば單なる光、音の如き）から、複雜なもの（例へば形姿、話聲など）多樣である。又その時の主觀の意識狀態に一致してゐる場合もあれば、然らざる場合もあるのである。又幻覺の一現象として自分の思ふことが聞えると云ふ現象がある。これを二重考慮と言つてゐる。

錯覺及び幻覺は、一般に知覺の障害と考へられるが、ここに、知覺に於ける主觀の著しい能動的規定が看得せられるのである。

さて、知覺的現象の世界を幻とか空なりとか觀ずることは、反省された意識に於てである。實踐的にはかかる現象の世界こそ、現實であり、具體的であり、且吾人を規定するものである。實在の世界

はかかる現象の世界からの思念的再構成である。現象の世界を如何に觀ずるかは、かくて世界觀の問題である(二十一)。

(一) 消化器官の感覺——飢餓、滿腹、嘔吐の感じ。
呼吸器官の感覺——スガスガシイ、息のつまつた感じ。
循環器官の感覺——ドキドキする、胸が痛い、顏がほてる(赤面)。
排泄器官の感覺——排便、排尿、發汗、等。

(二) イ、狹義の運動感覺…身體の運動の感覺
ロ、位置感覺……身體が如何なる狀態にあるかとの感覺
ハ、緊張感覺……{努力感覺 / 抵抗感覺 / 重量感覺}

(三) 感覺の種類に應じて特に感ずる點が檢出されてゐる。
壓覺……壓點——二五位(一平方糎)
溫覺……溫點——二位
冷覺……冷點——一二位
痛覺……痛點——一〇〇—二〇〇位

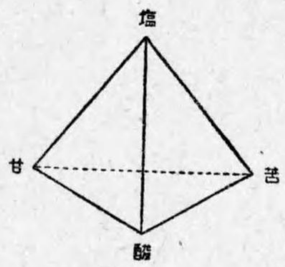
(四) a. 表面觸……物體に觸れた時の感じで、物體感が參與する。
b. 空間顯充觸……液體をかきまぜる時、或は風が皮膚を撫ぜる時の感じで、物體感がない。
c. 空間觸……蒲團の厚さの感じの如く、空間の觸感である。
d. 透觸……或物質を通してのその背後にある觸面の感じで、觸診の場合の如きものである。

(五) 溫度感覺に、二つの興味ある現象がある。今冷點を檢出し、それに29°以下の刺戟を與へると、勿論冷覺を生ずるが、29°以上40°位の刺戟を與へると、溫覺を生ずる。之を**反對感覺**と云ふのである。而るにこの冷點に40°以上の刺戟を與へると冷覺を生ずる場合がある。之を**矛盾冷覺**と云つてゐる。
熱いと云ふ感覺は矛盾冷覺と溫覺との融合から生ずると云はれてゐる。
60°以上の刺戟になれば、何れの點と云はず痛覺を生ずる。

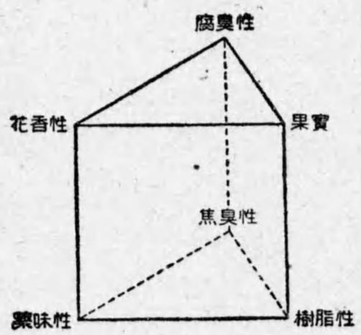
(六) 溫度感覺は順應性に富んでゐるから、露出してゐる皮膚面の溫度感覺は、その時々によつて、若干の變化があるのである。
快適な感情を生ずる溫度感覺に相應する大氣の溫度刺戟の範圍を**快感帶**と云ふ。外氣に對する溫度感覺は、單に外氣の溫度のみならず、濕度及び氣流が大いに關係する。此等の要素を綜合して等感溫度と云ふ。快感帶はこの等感溫度で冬季は20°を中心に17°—22°、夏季は23°を中心に18°—26°である。

(七) 心頭滅却すれば、火なほ涼し。

(八) 味覺四面體



(十) 嗅覺プリズム



（九）澁さは舌面が澁の爲に生ずる收斂の感じである。
アルカリ性の味はOHイオンの感じと苦さである。
金屬性の味は甘さ、觸覺、臭等の融和せるものである。

（一一）嗅覺には空間的の現はれ方の樣相がある。即ち、
a. 對象的の香……これは或對象に關係づけられて知覺される香である。眼前のコーヒーの香の如きは然りで、吾々では視覺と融合してゐる。動物ではかゝる對象的な香がその生活場面に大なる影響をもつてゐる。
b. 不定位の香……これは單に與へられたところの、定位不明の香で、いはば漠然たる香である。吾人が閉目すれば比較的かかる性質を帶びて來るのである。これは又、香の雰圍氣をなすものである。

（十二）調子…（高さ c, d, e…は高さの段階として考へられる。調性 c と c′ は似てゐると云ふ性質（八度性）。）
一般に調子は**關係音聽**として繼起する音群の關係判斷で與へられる。而るに最近**絶對音聽**として、音群或は調性を絶對的音高に於て辨別することが注意されてゐる。

強さ…（物理的には振幅の大小に依存する。併し、心理現象的にはその時の圖形と素地との關係で規定される。）
太さ……低音は太く、高音は細い。
清濁……主觀的であつて、物理的には振動數と振幅に還元される。
母音性…（音にはそれ〴〵母音的性質がある。c^0……M, c^1……U, c^2……O, c^3……A, c^4……E, c^5……I）
音色…（所謂、樂器の相違による音質の相違である。絃樂器、木管樂器、金屬管樂器、打樂器等による相違である。交響樂は音響の增大、和音の複雜をもつのみならず、又、各樂器の音色の交錯によつて多彩なるニュアンスに富める世界を展開するものである。音色は物理的には基音と倍音との關係によるものとされる。）

（十三）音樂的には、完全協和音（八度、五度、四度）、不完全協和音（三度、六度）、不協和（二度、七度、其の他）が言はれてゐる。長三和絃（c,e,g）或は短三和絃（c,e♭,g）も亦かかる和音の上に立つものである。蓋し、協和音は古來より變化して來たもので、古くは八度であつたが今は三度の上に構成されてゐる。
宗教音樂に於てはかゝる和音を優位に取入れてゐる。多聲音樂も亦かかる和音に重心を求めた音樂である。

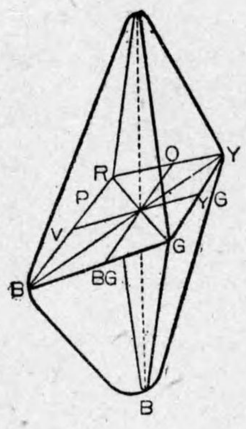
（十四）音樂的には拍子として$\frac{2}{4}$、$\frac{3}{4}$、$\frac{6}{4}$、$\frac{6}{8}$、$\frac{3}{8}$、等多くのリズムが求められる。一般に一小節の第一符に最强聲がつけられる。尙、强弱には色々の組合せがあり、强弱格、弱强格、强弱々格、弱々强格、又弱强弱格等があつて、同時に感情的にも色々のニュアンスを與へてゐる。音聲に於てもこのリズムは大いに働いて來るのである。

（十五）イ、**對象音**　音が一定の物體との關係に於て現象する。即ち音が物體に定位してあらはれるのである。噪音はそれを發する物體との關係に於て現はれる事多く、對象音的であるのである。音は物體の認識の一屬性となり得るのである。ラヂオに於ける擬音効果が問題になる所以である。
ロ、**空間音**　音の定位が不明瞭で空間が音として感ぜられる如き場合である。音樂會の部屋全體が鳴り響く時、或は眼を閉ぢて音樂を聞く如き場合のあらはれ方である。調音や樂音は一般にかかるあらはれ方をする。噪音でも、例へば地下鐵の如きはこれである。又、かゝる音の現れ方は、主觀の心構へにも規定される。
ハ、**融和音**　音と自己との關係がつけられず、音の中に自己が溶けこんでしまつた時の音のあらはれ方である。云はば音と一體となつた場合である。

（十六）實驗的に、同一速度の回轉を明暗の異つた場所で見ると、その回轉は速度を異にして見える。（暗い時は速度は速く知覺される）。

（十八）イ、**平面色**……如何なるものがその色を現はしてゐるかとの意識がなく、單に平面的な色の廣がりとして現はれる場合である。小孔を通して眺めた時の對象の色の如きものである（小孔を通して對象の色を見る時は大抵かかる平面色的色を見るからこれを「色彩諸印象の完全なる還元」と言つてゐる（カッツ）。映畫のもつ色彩は平面色的である。
ロ、**表面色**……一定の物體のもつ色として、その物體に定位して現はれる色である。吾人の日常生活に於て現象し來る色

（十七）色彩八面體



その外、透視色例へば（ゼラチン紙の様なものを通して見る對象の色）、輝く色、反射の色などの現はれ方がある。

（十九）イ、**色の恒常性**……壁の色は、朝夕に於て、或は窓側と反對側とでは、刺戟としては隨分變化してゐるにも拘らず、同質的の色として知覺されるのである。この色は表面色であつて、吾人の經驗がここに作用してゐるものと考へられる。

ロ、**形の恒常性**……對象の位置、或は主體の位置により、網膜像は異るに拘らず形の恒常が維持される。例へば、圓をやや傾斜すれば網膜像は歪んで楕圓をなすが、尙圓として知覺されるのである。吾々の行動的環境に充ちてゐる物體はこの恒常性によつて安定感を與へるのである。これも亦吾人の經驗が作用してゐるものと考へられる。

ハ、**大きさの恒常性**……對象が吾人より遠去かれば小さく見えるのであるが、併しその距離に反比例するものでなく、その大きさを保持するのである。例へば、1m の距離で人の姿を見れば、2m の距離では、網膜像には $\frac{1}{2}$ の大きさとして映すのであるが、主觀的には決して $\frac{1}{2}$ の大きさとして知覺されず、もとの大きさを保持するのである。窓枠を通して、廣い對象の世界が映じて來るが、その對象を窓枠より小さいとは知覺しないのである。眼前の小指は月を蔽ふのではあるが、尙月を大きいものとして知覺する、時には遠くにあるものを過大視すると云ふ超恒常の現象が生ることもあるのである。

（二十）動眼感覺說、散亂線說、對比說、透視圖說、直角座標說、倚向說等が行はれてゐる。

（二十一）色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界……（般若心經）

第十三講　空間・時間及び運動の意識について

六五　時間や空間は哲學上極めて樞要な問題であつて、認識の成立、存在の樣相の根源として提出される。例へば時間、空間は直觀の先驗的形式として把握される（カント）。

こゝでは主觀に現象する時間、空間卽ち時間、空間の意識を問題にするのである。かゝる主體的時間、空間は、認識の根據としての時空や、客觀的な物理的時空とは異つて、全體意識を背景とし、それに浮びながら移動變化ゆく現實的な意識であり、自己の存在感や生命感と極めて緊密に關係してゐるものである。行動的、生命的の時間空間として直接吾人にかかわりくるものである。

空間の知覺は擴がり・距り、深さ（奧行）、方向、形等の意識として與へられ、そして此等が秩序ある空間構造を現象せしめてゐるのである。このうちでも形が圖形性を持ち易く、その他の擴りや方向の知覺の如きは一般に素地として働いてゐるのである。

この知覺を最も顯著に精密にあらはし得るのは視覺、觸覺である。此の外に聽覺、嗅覺、或は運動感覺も與かるのであるが多くは視覺と協同してゐる。

嗅覺に於ては漠然乍らも方向や對象の定位の感が與へられる。聽覺に於てはそれよりはつきりと精密になるが、尙經驗や記憶の影響に規定されるものが多い。音の方向を決定する因子については實驗研究が進められてゐる(一)。尙音の遠近については、大きい音は近く、かすかな音は遠方に定位されると云ふ因子が參與して來る。盲人に於てはかかる聽空間が常人に比してよく分節した構造をもつてゐるものである。例へば足音の反響、定位等が、直ちにその場の空間を知覺せしめるのである。

運動感覺は運動の方向や運動量の感覺として、多く視覺や觸覺と一緒になつて空間のひろがり、距り、方向の知覺に與るものである。

觸覺に於ては皮膚に接する物體或は面のひろがり、へだたり、或は形狀の知覺として、その空間知覺が與へられる。又皮膚は大氣に包まれてゐて、その空氣の壓や冷溫の感覺を辨別して、自己の空間に於ける一定の位置を知覺せしめる。盲人に於てはかゝる機能による空間定位の感が著しいのである(三)。昆虫に於ては觸角なる特別の器官があり、これにより運動空間の知覺を可能にしてゐる。

今觸覺を分析して、皮膚の二點を刺戟するに、それが主觀的に二點のひろがりとして感ずるには一定の距離が必要である。この必要なる最少の距離を**空間閾**と云つてゐる。この距離が少さい程空間知覺が銳敏であるのであつて、それだけ對象の空間的序列の認識を可能にするのである。身體各部によ

つてその閾價は異り、又疲勞時には大となる(二)。觸空間に於ては視空間と異り、非連續の刺戟の方がへだたりの知覺には好都合であつて、盲人の點字はこの特性を利用したものである。

觸世界は皮膚に接する、或はその附近の範圍に限られる狹い空間である。

視覺に於て典型的な空間世界が展開する。それは星晨の無限の彼方から、微視的世界に迄亘るのである。又それは對象についての空間の知覺に限らず、對象と自己との距離知覺、又自己の身體的行動を指向する行動空間の知覺を可能にするのである。それは觸覺よりも微少なる空間閾をもつと共に、又無限に擴大する廣大な空間の知覺を與へ、そのうちに森羅萬象を現象せしめるのである(四)。

生理學的には網膜、神經系統、視覺中樞の視覺神經組織によつてかかる視空間が展開するが、單眼よりも兩眼あることによつて視野は擴大し、精密になり、更に眼球運動や頸部、身體の運動に於て、極めて廣いあらゆる方向の空間世界が知覺されるのである。

深さの知覺（奥行の知覺）をもつことは視空間の特性である。これによつて空間の立體的にして含蓄ある世界が展開されるのである。單眼に於てもすでに平面の知覺は可能であり、又刺戟の布置如何によつては、深さの知覺が與へられる。併し、深さの知覺は兩眼視に於て最も明瞭に與へられて來るのである。この深さの知覺の條件としては、先づ生理的條件としてレンズの調節、兩眼の輻輳、視差があげられる(五)。

次に、深さの知覺の心理的條件として、次の諸因子が擧げられる。

(イ)對象の大さ　(ロ)對象の明瞭さ　(ハ)對象の色　(ニ)介在物の多少　(ホ)注意等。單眼の人は自己の經驗に於て、不完全な深さの知覺を補つてゐるものである。その精密度は、正常眼の人の兩眼視と、故意になした單眼視との中間値をとる。

次に、上下、前後、左右の方向の知覺について見るに、それは(イ)對象の配置關係及び、(ロ)主觀の身體の位置に依存するのである。前者は所謂客觀的定位であつて、方向知覺に**空間水準**なるものが生じ、これを碇泊點として方向が決定されるのである。

後者は、自己中心的定位であつて、身體の位置特に頭の位置が決定的條件になるのである。例へば暗室中、光の垂直線を頭を 90° に傾けて見ると、垂直線はその反對の方向に傾いて見えるのである(アウベルトの現象)。身體の位置のみならず、身體を包む一定空間（例へばケーブルカーの車室或は飛行機内）が水準となつて外界の方向を規定するのである。

尙視知覺に於て展開される空間はユークリット幾何學的空間ではなくて、上下、左右の方向に應じ

て、各その異つた性質をもつところの空間である。**空間の異方性**（anisotropy）と呼ばれる。

六六　視空間は單に同質的なひろがりやへだたりとして與へられるばかりでなく、多くは種々なる對象の空間的配置構造と共にあらはれるのである。前述せる素地と圖形のあらはれ方は視覺に於ては極めて根源的な空間關係の知覺である。對象は圖形として、よりよき形態でまとめられて顯現しようとする傾向が見出されるのである。對象は雜然たる現象としてでなく統一聯關した現象として出現せんとするのであつて、空間知覺はまとめられ秩序化されてゐるのである。かゝる傾向を**優秀形態の法則**(Prägnanz Gesetz) と呼んでゐる。この法則には次の如き若干の要因が見出される(七)。

（イ）近接の要因……距離の小さいものは群化、一對形成をなし易い。

（ロ）類同の要因……類同のものは群化、一對形成をなし易い。

（ハ）完結の要因……閉ぢられてゐるものは安定してゐて互に統體を形成し易く、從つて圖形性をもち易い。

（ニ）簡潔化の要因……諸對象は簡潔化の方向、即ち一樣化、リズム化、統一化、連續の方向で知覺され易い。所謂優秀形態へ、安定的形態への傾向が支配する。故にこの要因は以上の諸要因を含む基本要因である。

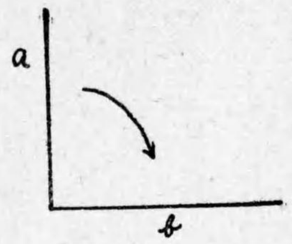
六七　視覺の世界で、最も活潑に變化あらしめ、力動的な姿を與へるものは運動視の現象である。現實の視覺世界で、對象が靜止的であることは少ないので、圖形として、或は素地としての運動の知覺が極めて多いのである。運動が知覺されるには、圖形となる刺戟がその場に於て移動すると云ふことを一般的の條件とするのである。かかる刺戟の移動變化が運動として知覺される限度を**運動閾**と云つてゐる。これにも下閾と上閾とがある。吾々は時計の針の動き、身長の成育を現實的に知覺することは出來ぬ。又、非常に速い物體の運動も知覺されない。若しそれが週期的であると物體は恰も靜止せる如く見える。運動知覺の下閾は一秒につき 1—2 分の角速度である。

對象は動くものの方が、靜止的のものより、圖形となり易い、即ち他より識別され易いのである。動くと云ふことは、その場の均衡を破つて、絶えず異質性を示すからである。動物の擬死はその逆効果を狙つたものである（但し素地が運動的である場合は靜止の方が圖形となる）。

運動の知覺には相對性がある。即ち刺戟としては動いてゐるものを動くとして知覺せず、それに對して靜止せるものを却つて動いてゐると知覺するのである。例へば、月が動いて雲に入る如き、川の

流れに見入る時、自分が川上の方へと動いて行くのを感ずる如きである。一般に素地は靜止として知覺され、圖形がそれに對比して動くものとして知覺される傾向がある。從つて、大抵、場の全體に對して小さいものの方が運動知覺の對象となり易い。又この現象には可なり吾人の經驗が作用してゐる。**共應運動**と呼ばれるものはかかる運動知覺の相對性の現象である。時には或物體の動くにつれて他の物體が相應して運動する如く知覺される現象もある。次に刺戟は靜止してゐるに拘らず、長く見つめてゐると、動く樣に知覺されることがある。例へば暗い所で光點を見つめてゐると、急に動き出して來ることがある。かかる現象を**自動運動**と稱する（星の凝視も亦かかる運動視を與へる）。

對象が實際運動してゐる時に、知覺される運動は現實運動である。吾々の運動視は多くはかかる運動である。然るに實際は運動してゐないで單に刺戟の繼起的出現であるに拘らず、現象的には現實運動と少しも變らぬ運動知覺を生ずる場合があるのである。



かかる現象を**鞦韆運動**、或は**假象運動**（Scheinbewegung）と言ふ。映畫に於ける運動、スカイサインに於ける文字の移動はかかる運動現象である。今、垂直線aを露出し、次に一瞬の後水平線bを露出する時、aはbへと動いたと知覺される。これは**ファイ現象**（φ Phaenomen）と名づけられた（ウエルトハイメル）。

この現象には、色々の實驗條件からして若干の運動が見出され、又法則的關係が探究されてゐる(八)。この運動の現象は、運動知覺が感覺要素の結合（例へば、網膜の局所的興奮及び眼球運動感覺の結合）から成るのではなくて、むしろ初めから與へられる統一的體制的知覺であると云ふことを證明するものである。從つて、これは心理學の思想の發展史に理論的にも大きな影響を與へた現象である(九)。

この假象運動は、視覺に於てのみならず、聽覺に於ても亦觸覺に於ても見出される。

次に此等の運動視は、現實運動、假象運動、何れに於ても、後影響をもつものである。今、川の流れを暫く**注視し**て、次に眼を他の對象へ轉ずる時、その對象が逆の方向へ動くのを見るのである。列車が止つて、外の景色が反對の方向へ動くのも同樣である。又中心へ卷き込まれる如き過卷の囘轉を暫く見る時、それが止ると、逆に全體が擴大する樣に見えるのである。此の現象を、**運動殘像**或は**後運動**と稱してゐる。又運動知覺は、運動する空間、距離及び時間の知覺も與へるものである。運動知覺は速度の遲速としてあらはれるが、空間知覺及び時間知覺はその速度知覺の函數として相互的關係をもつものである（**タウ効果**の現象）(十)。

六八　諸知覺に際して、時間についての意識も亦與へられる。かかる時間は自我の意識した時間で

主觀的時間と呼ばれるものである。

對象の知覺に卽して時間意識が與へられる場合を特に時間知覺と云ふ。卽ち、音の持續についての時間の長短の意識、或は運動の知覺に際しての運動時間の意識の如きである。時間そのものが對象的に知覺されるのではなく、むしろ對象を知覺する自我の知覺作用の意識であると考へられる。故に時間知覺は反省的であり、判斷的、評價的であるのである。時間知覺が內感的のものであると稱せられる所以があるのである。

時間を知覺するに、あまりに短いと知覺することは出來ない、二つの刺戟が餘り短い時間で繼起すると、同時であると知覺する、次に間隔時間が長くなると繼時であると知覺する、この同時時期から繼時時期へ移る最初の間隔時間を**時間閾**と云つてゐる。又時間知覺の相對的辨別閾は約 $\frac{1}{20}$ — $\frac{1}{30}$ 位である。

實驗の結果によれば $\frac{1}{4}$ 秒位は大抵短いと云ふ印象を與へ、2 秒位になると長いとの印象を與へる樣である。

時間の長短の知覺に當つては、主觀的時間單位なるものが出來、それによつて評價するのである。この單位は主に吾人の身體の週期的運動、卽ち步行、呼吸、鼓動の週期時間が採られるのである。殊に步行運動は、半拍子が約 0.5 秒でこれが普通單位となつてゐる。1 秒から 0.5 秒位のところが、一番單位としてとられるのに好都合の時間である。

時間知覺に際して主として依存する感覺の領域からして、次の三つが分けられてゐる。

(イ) 感覺運動時間……步行・呼吸・鼓動等の諸感覺が中心となつて、時間を評價する。

(ロ) 筋肉時間……筋肉の疲勞感・努力感等が中心となつて時間を評價する。

(ハ) 內臟時間……有機感覺が中心となつて時間を評價する。例へば空腹の感が時間の經過を知らしめる。

(イ)が主として、私の云ふ時間知覺に働くので、(ロ)と(ハ)は次の時間意識に大いに關係する。日常生活に於ては朝、晝、夕、晩の意識が外界の變化や或は吾人の行動的習慣と聯關してゐるから大體それを手がかりにして時間を測定することが多い。併し一旦異つた世界へ這ると、筋肉時間や內臟時間が主になつて來る。

六九　次に、對象の知覺に則しての時間意識のみならず、かかる特定の對象はなくて、むしろその狀況に於ける自我の行動或は狀態の經過の意識として、或は經過に於ける定位の意識として時間の意

識が與へられることがある。これを狹義の時間意識として、時間知覺と區別する。時間知覺が一般に小さい時間に關係するのに、これは比較的長い時間に關係する。此の場合は時間知覺より更に、自我の心構へに規定されるのであつて、この時間の長短の意識は直ちにその個人の精神生活の態度と聯關するものである。

時間意識は、(イ)長短の意識、(ロ)現在、未來、過去の意識として現はれる。

(イ) 仕事に精を出してゐる、興味を惹かれてそれに熱中してゐると云ふ如き場合は、時間は短く意識される。此に對して、退屈してゐるとき或は期待してゐる時など、時間の經過に氣が向けられると、長く意識される(十一)。だから時間の經過に苦しまない爲には、對象、仕事に熱中して時間に注意しないことである。然るに過去を顧るときには充實した時間は長く、空虛、無爲の時間は短く感ぜられて逆の關係になる。

識閾が非常に低下してゐる時、或は感情興奮に陷つてゐる時は、時間意識は混濁する(醉、怒、睡眠に於ける如く)。

次に過去の時間と未來の時間とは長短が甚だ相違して意識される。一般に過去は短く、未來は長いのである「光陰矢の如し」とは主として過去の時間意識から言はれるのである。又、年齢の相違によつても時間の意識は相異する。

(ロ) 時間意識は過去、現在、未來の意識として統一され、以つて行動的環境に於ける自己の時間的位置を決定して來る。この時間はもはや客觀的時間には見出されないものである。この意識は自我が自己の存在に對する態度から生れるものであるからである。この點でこの意識は內省的であり、自覺的であり、自己意識的であるのである。

「今」と云ふ意識は、自我が自我の過程的の意識或は行動を統一した最も自我に近接した體驗についての反省的意識である。仕事に熱中してゐる時、或は他へ放心してゐる時は「今」と云ふ意識は出て來ない。過去の意識は、自我より遠去かつた既知の體驗について生ずる反省意識であり、未來は自我より遠いが自らに迫り來るところの未知の體驗についての反省意識である(十二)。然し乍ら、過去も未來も亦、現在意識に於て意識されるのであつて、「今」の意識に兩者とも含まれてゐると考へられる所以である(十三)。この現在、過去、未來の意識は特に意志に於ける自我の態度決定の意識に大いに關係するものである。「今」は客觀的には絕えず經過するものではあらうが、心理的に一定の持續をもつものであつて、**心的現在**と稱してゐる。自我の態度決定に於て「今」の意識は「常に此處に」生れて來るものであり、それが自我の全生活の流れへの洞察を含んで來る時、「今」は暫定的であり乍らも而も

永遠的なりと云ふ意識を生じて來る。かくて「永遠の今」とは、自我の根本的な自我の意識として生まれるのである。

（一）イ、時間説……兩耳に對する時間の相違による。
ロ、强度説……兩耳に達する音の强度が相違する。
ハ、位相説……兩耳に達する音波の位相が相違する。

（二）舌の尖端……1.1mm
唇の赤色部……4.4
手の背面……30.8
背の中央……66.0
踵……22.0
檢觸器（Asthesiometer）にて測定する。

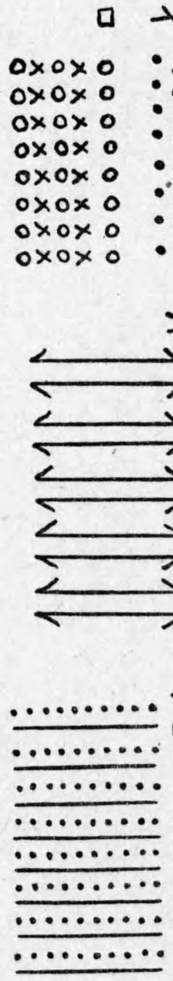
（三）私が接したある盲人は次のやうな經驗を語つてゐた。道を歩いてゐる時、電柱や自轉車等があると自づと耳朶の附近にある感覺が生じて、それ等事物のあることを認識する。

（四）眼の網膜は一定の擴がりをもつてゐるが、空間閾はその部分で異る。中央小窩附近の黄斑部に於て最も鋭敏で、外圍になるに從つて減退してゐる。又色彩に對する感受性も異り、赤、綠は青、黄に比して、その範圍が狹いのである。視野計（Perimeter）にて測定する。

（五）イ、レンズの調節……但しこれは二米突内外の距離に限られる。
ロ、兩眼の輻輳……對象を黄斑部に於て見ん爲に兩眼が輻輳する。但しこの限界は15m—20mの範圍とされてゐる。兩眼には相應點があつてこれに當る時物體は一つに見える。若し非相應點におちる時には對象は二重に見える（二重像の現象）。
ハ、視差……兩眼に於ける映像の相違點である。この視差を統一せんとするところに深さが置換へられて來ると考へられる。立體鏡はこの原理を應用して立體知覺を生ぜしむるものである。尚、立體鏡によつて、實體鏡的光輝、視野鬪爭等の興味ある現象が見出される。

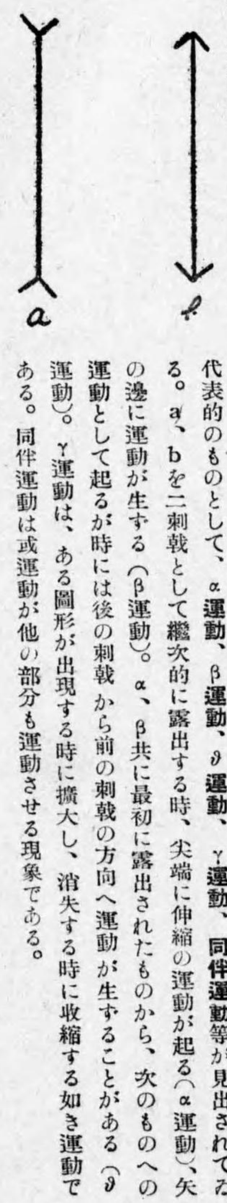
（六）先天的に盲目として生れ乍ら手術によつて開眼した時、形を一々記述することは不可能であつたが、圖形と素地の知覺は可能であつたと云ふ報告がある。このことは空間知覺についての先天説及び經驗説に對して示唆を與へるものである。

（七）



尙、近接及び類同の要因は、現象的近接、現象的類同として規定的に作用すると云ふことが最近の實驗的研究から證明されて來てゐる。

（八）この假象運動は實驗的に色々の條件で規定されることが證明された。例へば、二つの刺戟の間隔時間（φ）、露出時間（e）、其他刺戟の大さ、强さ、刺戟布置、場の性質或は被驗者の心構へ等である。
今各刺戟の露出時間を5—22σとし、他の條件を一定して、間隔時間（p）を變化させて見るに、三つの時期が見出された。
イ、同時時期……20—30σであつて二刺戟は同時であると知覺される。
ロ、繼起時期……200—300σであり二刺戟は繼起的にあらはれる。
ハ、最適時期……この中間の間隔時間では、運動が知覺される。



代表的のものとして、α運動、β運動、θ運動、γ運動、同伴運動等が見出されてゐる。a、bを二刺戟として繼次的に露出する時、尖端に伸縮の運動が起る（α運動）、矢の邊に運動が生ずる（β運動）。α、β共に最初に露出されたものから、次のものへの運動として起るが時には後の刺戟から前の刺戟の方向へ運動が生ずることがある（θ運動）。γ運動は、ある圖形が出現する時に擴大し、消失する時に收縮する如き運動である。同伴運動は或運動が他の部分も運動させる現象である。

（九）この様な運動視の現象説明に對して生理的假説が展開されつゝある、即ち流脈變通性の原理（ケーレル）である。神經の刺戟傳達は一つの流脈柱（Str-säule）をなしてゐるもので、一つの刺戟はその神經系全體の條件で決定されるものであると云ふ。この流脈柱の力動的の交互作用に、この運動視の諸現象を説明せんとするものである。

（十）今客觀的には等距離（S_1S_2）の空間を、P_1及びP_2の時間で運動する知覺をうる時、$P_1=P_2$であれば$S_1=S_2$であるが、$P_1>P_2$なれば$S_1>S_2$として現はれ、$P_1<P_2$であれば$S_1<S_2$として現はれる。時間が短かければ距離知覺は短縮するのである。これをタウ効果（Tau Effect）と言つてゐる。從つて、$S_1>S_2$の場合は、$P_1>P_2$とすることによつて、現象的に$S_1=S_2$の知覺を生ぜしむることが出來るのである。

（十一）怠惰之冬日何其長也　勉强之夏日何其短也　長短在我不在日　有待之一年何其久也　不待之一年何其速也　久速在心不在年（言志耋錄）

（十二）過去や未來の意識は體驗印象の充實性、切迫性の度合によつて時間の長短を結果するのである。この故未來は體驗可能として常に充實せる時間であるのである。「我が心よ、汝に於て私は時間を測るのである。……諸時間を測るときに印象を測るのである」（アウグスティヌス）

（十三）こゝにアウグスティヌスの「過去の事の現在、現在の事の現在、未來の事の現在」の思想が考へ併される。「心は一、期待し、二、知覺し、三、記憶する、しかし心によつて期待されるものは心が知覺するものを經て、心が記憶するものに移り行くのである。未來が未だ存しないことは何人も否定しない。しかしそれにも拘らず心には既に未來の事の期待が存在する。過去がもはや存在しないことは何人も否定しない。しかしそれにも拘らず心には尙過去の事の記憶が存在する。現在は一瞬間に過ぎ去るが故に延長を有しないと云ふことは何人も否定しない。しかし知覺は持續し、それによつて消滅せるものも存續する。」

道元にも尙かゝる思想ありといはれる「今時は、人々の而今なり、今我念過去未來現在、いく千萬なりとも今時なり、而今なり、……」。

第十四講　表象について

七〇　吾々はかつて經驗したことを腦裡に想起してそれについて語つたり、或は反省したり、批判したりすることが出來る。時には未だ經驗しない事柄や世界を想像して、それに耽り感動することも出來る。この様に吾々は現在處與（環境、刺戟）の經驗に限定されず、過去や未來や非現實的な世界をも所有し經驗することが出來るのである。かゝる經驗を可能にする心理的形象が**表象**（Vorstellung）と呼ばれる過程である。人間に於てはかかる表象の世界が豐かであつて、現實を超越せしめると共に現實を內容に於て豐富ならしめるものであつて、精神生活、文化の發展の基底をなすものであると考へられる。

表象が過去の經驗に相應し、過去の體驗の內容を形成する時、その表象は特に**記憶表象**（Gedächtnis-vorstellung）と呼ばれる。記憶が可能で完成されるには、かゝる記憶表象を所有し、それを再生することが出來る場合である。かゝる表象をもつが故に、過去を所有し、過去に連續するのである（一）。かかる表象は常に固定した獨立した記憶の單位であるのではない。その時と場合の全體意識の圖形

として素地との關係であらはれるのであつて、移動的變化的性質を帶びるのである。次の樣な性質が見出される。

イ、表象は時間の經過と共に、直觀的性質を喪失してゆく傾向がある、表象は漠然となつて來る。

ロ、表象は顯著な部分のみが强調され曲型化されてゆく傾向がある、或は全體的形象の一部分が選擇され、それが象徵的意味を有して來る。

ハ、表象はそれが想起される時の氣持や、現在に對するその表象の意識の變化等によつて、表象は變容されて現はれる。

ニ、印象が强烈なる情緒をおびる時、その表象は比較的に他の意識とは獨立した單體として時間の經過にも係らず保持されることがある。

かくて吾人の過去の記憶は單に寫眞の燒付の如きものでなく、生きた過程をなすものであるのである。

次に表象が、未だ經驗せざる世界に相應する時、**想像表象**（Phantasie-vorstellung）と呼ばれる。併し想像表象は全然吾人の經驗しない形象ではなく、その部分部分は尙吾人の經驗世界から取られてゐるものであり、それを素材としてそこに新しい綜合、創造をなせるものである。かゝる表象は一般に現實感が薄いが、一方情緒性に富んでゐる。

七一　表象は明瞭さ、强さ、生き生きしさ等については一般的に知覺像より弱いのである。私が今眼前に見てゐるばらの花の知覺と、眼をとぢ心に想起せるばらの表象とは前者が、その感覺性、細部性、明瞭性について勝つてゐることを知る。併しこれは絕對的のものではない。表象でも、知覺にも等しき程の印象性を以つてあらはれる場合もあるのである。「眼にちらつく」、「耳についてゐる」如き表現がそれである。又夢像は表象であるが、これは又極めて明瞭な場合もある（一般に夢は灰色であると考へられてゐるが、時により、人により、色彩夢があるのである）。

知覺と表象の中間形態と考へられる現象に、**直觀像現象**（Anschauungsbild）がある。これは或る印象がすでに對象が現象せぬにも係らず文字通りの意味で見られ、聞かれる現象で、實際の知覺と相等しい直觀性をもつて再生されるのである。かくて知覺像、直觀像、表象像と一つの段階的層をなしてゐるものと見ることが出來る(二)。

かくして表象にも明瞭さの段階を區別することが出來るのである。非常に明瞭であつて恰も實物に接する如き程度から、普通の程度を經て、漠然とぼんやりしゐる程度まで、若干の段階をもうけること

とが出來る。

0. 心像なし、1. 頗る不明、2. 不明、3. 可なり明か、4. 明か、5. 頗る明か、6. 知覺の如く明か。

表象は一般に形象であつて、その明瞭であればある程、表象に聯關する經驗を確保するのである。併し、又形象を帶びなくても、尙一定の經驗を所有することが可能である場合がある。所謂無形象的表象とも稱せらるべきものによつて、對象との關聯が確かに與へられることがある。この表象が思考に於て意味、指向性、意識性として展開するものである。又この表象は表現せんとすれば形象的表象として叙述することも可能である。又形象的に表現は出來ないが、何かの對象を指向しそれに關係してゐる如き場合もある。卽ち、一般に情念（慾望、喜悅、恐怖、悲哀等）の表象の如きものがそれである。

七二　表象はどこにあるか、その定位は限定することは出來ないが、いはば主觀的空間に定位すると云ひうる。これに對して知覺像は客觀的空間に定位すると云ふことが出來る。後者は對象を手がかりとして、計測されることも出來る（但し全々それに規定されるものではない）。これに對し主觀的空間は大小、距離、上下、方向等の量的計測をなすことが出來ない。卽ち觀念的世界と云つていい。かかる世界に於ける表象の定位は不安定であり、移動的であるのであるが、一方それは自由で、無規定であるとも云ふことが出來る。私は或表象を心のうちに、又心の外に、超現實世界の上に定位せしめることが出來る。表象はかくて內在的とも亦超越的とも云ふことが出來る。又現實の世界に表象を定位せしめることもある。現實的定位となづけられるこの定位は、現實の自己を中心とした定位であつて、方向、距離の定位が比較的明瞭である。

自我が表象に際していかなる關係、位置をもつかについて、次の四つの場合を擧げることが出來る。

イ、自我がその表象された現實の場所にある。

ロ、自我がその現實の場所のどこかに移されてゐる。

ハ、表象像を體驗する自我がどこにあるかを規定し得ぬ。

ニ、表象像に對する自我の立場が意識されぬ。

かくて表象の世界に包み込まれることもあれば、又表象を現實の自己の一體驗として所有することも出來る。

七三　表象はそれと關係する知覺の性質から若干の種類に分けられる。このうちでも視覺と聽覺が

表象を展開せしめるに相應せる知覺領域である。卽ちこれ等は對象の性質のみならず時間、空間の知覺を可能にし、最も精密に對象認識に與かるからである。卽ち視覺表象、聽覺表象であつて、表象に於て姿を見、音をきくのである(三)。これに對して嗅覺、味覺、觸覺等は主觀的狀態を誘起するから表象としての發展は僅かである。嗅覺表象、味覺表象、觸覺表象はあるにしても、漠然たるものであり、又は視覺表象に規定されてゐるものである。尙この外に**運動表象**をあげることが出來る。但しこの運動表象は直ちに現實の運動感覺となつて發動する。純粹の表象としての運動表象は動きの感じ、緊張の感じであつて、對象的にもたれるものである。內語はその代表的なものである。但し運動表象は多くの視覺表象、或は聽覺表象と融合してあらはれる。汽車の進行の表象は前者である。音樂のリズム、メロディーの表象の如きは後者である。かくして吾々の觀念の世界は主として視覺表象、聽覺表象及び運動表象によつて織りなされてゐると云ふことができる。

又、表象の內容からして、文字や音聲の表象と、その文字や音聲が意味する現實の事物についての表象とに分けることも出來る。前者は**言語表象**であり、後者は**事物表象**である。吾々の世界は事物と共に言語的經驗に充ちてゐるが故にかゝる區別が生ずるのである。

七四　さて人によつては、その觀念的世界に於て一定の表象群が優勢を占めるのであつて、從つて又その人は記憶に一定の型を示して來る場合がある。この型を**表象型**（Vorstellungstypen）と名づける。前項の表象の種類によつて、視覺型、聽覺型、運動型が擧げられる。

一、**視覺型**は、想起する場合視覺印象による表象が優位であり、而もそれを明瞭に、細部に亙つて表象し、進んで、それによつて思考判斷も行ふ如き型である。この人は又比較的自由にその視覺表象を變化し、移動し、撰擇することが出來る。

二、**聽覺型**は、聽覺表象が優勢で、而もそれを明瞭に想起しうる。例へば回想に於ても、人々との話し聲が表象となつて來る。

三、**運動型**は、運動表象が優勢であるが、前述の如く他の表象と融合するものである。故に視覺運動型、或は聽覺運動型が求められる。

但しこれ等の型の純粹型は稀であつて、多少は他の表象の混合のあることはまぬかれぬ。卽ち視覺型でも時には聽覺象表をもつのである。これは又對象の性質及び印象時の狀態などに依存する。又習慣によつて一定の型が生じ得る。

多くの人は混合型であるが、多少は主要なる表象によつてその型を示すものである。これは素質に

よるものと習慣によるものとに分けて考察することが出來る(四)。

七五　視覺表象のうちで、常に圖形的配列をなして現はれるものがある。特に、數字、年月日、七曜、年代、位階などが一定の位置に配列され固定した圖形をなして表象されるのである。これを數型と名づけてゐる(五)。この現象を有する人は「誰でもこれはもつてゐる、普通のものである」と思つてゐる。これは一定の素質によるものであり、その內容は子供時代の經驗によるものと思はれる。

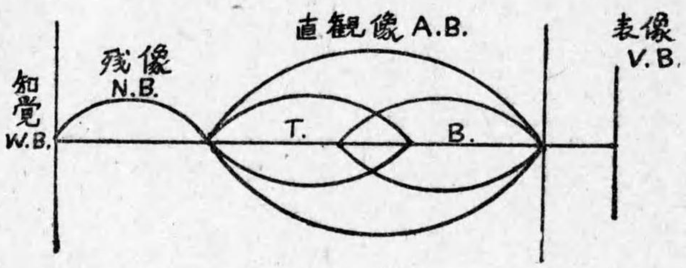
この樣に固定的な圖形であらはれなくても、表象が場所の關係に於て想起される場合、その記憶をなづけて、位相記憶(Topisches Gedächtnis)と云ふ。例へば試驗に於ける記憶に於て、表象が書物の頁やその頁の一定の位置に應じてあらはれる如きである。

又、數字、文字、年月日、週日に一定の色が結びついて表象される場合がある。この現象を色彩聯合(Colour-association)と名づけてゐる(六)。

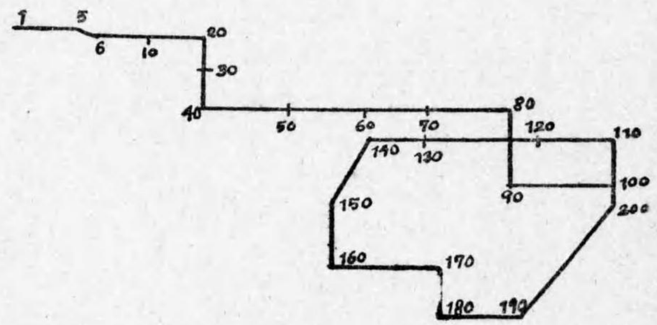
(一)「記憶の原野と宏大な宮殿に到る。そこには種々異つた感覺的に知覺された諸物の無數の心象(imagines)と云ふ寶がある。そこには又、我々が思惟するものゝ、感覺的に知覺されたものを增し、減らし、或は他の仕方で變じた限りの、總ては貯藏されてゐる。加之尙他は多くのものが未だ忘却によつて呑み込まれ埋められない限り、收められ、貯へられてゐる。そこに入つて私の欲するものを出せと命じるなら、二三のものは即座に現はれ、他のものはやつと探し出されて、いはば遠くにある藏からのやうに運び出される。又他のものは群をなして急ぎあらはれ、少しも求めもせず探しもしないのに、差出がましくも眞中に進み出て「私ですか」といはんばかりである。私はそれを心の手で私の想起の面前から追ひ拂ふ。かくして終に私の求めるものが姿をあらはし、隱れた所から明るみに出て來る。尙他のものはもつと容易に、整然と丁度私が要求するやうに現はれる。そして先のものは後のものに席を讓り、後退りして、私の求めるときに新たに現はれ出るやうに再び收められる。このやうなこと總てが、私が何かを記憶によつて語るときに起るのである。」(アウグスティヌス)

(二)　直觀像は發生的にみると最も原始的のもの、未分化、統一的、渾然たる意識過程であつて、これから一方に知覺、他方へ表象が分化發展したものであると云はれる。直觀像は二つの型にわけられ、

(二)



(五) Y. K. 氏の數型



知覺に近いものをT型、表象に近いものをB型と云ふ。右上圖參照。

かかる直觀像をもつことはすべての人に可能ではなく、一定の素質者及び一定の年代（現代の研究では一一歳――一五歳）の兒童に多く見られるものである。かかる素質者を**アイデティケル**と呼んでゐる。かくすれば私は完全に演ぜられたる其等の曲をば心耳を以つて聽くことが出來る。それで私は特に好んで嘗つて偉大なる藝術家の演奏を聽いたことのある作品をかうして聽くのである。」（ケーベル博士隨筆集）

（三）「今ではピアノ曲をも、ただ讀むに止めるを常としてゐる。

（四）各自次の諸表象を想起して、各自の表象型を吟味すべし。

一、視　覺

イ、色（赤いばら、青空、綠の原）ロ、光度（白い瀨戸物の光澤、小刀の刃の光）ハ、形（ビルディング、池）この外に、これ等色、形、光を同時に表象しうるか、表象を自由に變容移動することが出來るか、二つの表象を比較し或は運動する表象をもちうるか、又は十分間同じ表象をうかべうるか等を調ぶべし。

二、聽　覺

イ、一般の音表象を浮べうるか（サイレン、ベル、蜂のうなり、其他樂器の音、大鼓、喇叭、ヴァイオリン等）。

ロ、音表象の音の强さ、高さ、音色、太さを區別しうるや。例へば、ピヤノの音に於て）。

三、運　動

イ、次の運動表象を浮べうるか（エレベーターの降昇、ぶらんこの動搖、走る自分の速さ、リズム）。

ロ、この表象は直ちに實際の運動感覺と融合するか。

尙、これ等の表象が混合する時、何れが優位なるかを內省せよ。

（六）H氏の色彩聯合

一、（白）　二、（薄墨色）　三、（薄紅）　四、（二より少し黑し）　五、（土色）　六、（水色）　七、（白）　八、（火の色）　九、（黑）　一〇（白）　〇、（薄黑）　一〇〇、（青いネオン燈の色）

第十五講　記憶について

七六　見たり、聞いたりした知覺的印象や、自らの試みや、行爲の結果による情意的な經驗は、單に受働的で、その場限りの暫定的のものではなく、吾人の精神生活のうちに集積され、更に後續する諸印象、經驗を規定してゆくものである。若しかかる作用がなかつたならば、吾々の精神生活は單に現在的、瞬間的となり、從つて進步發展を望むことは出來ないのである。かかる印象、經驗の保存的作用を**記憶**と名づけるのである。

かく記憶の對象となる印象、經驗の一つの特質は自我との聯關、それの體制下にあることである。これによつて印象、經驗が、爾餘の諸經驗と組織づけられ、多くの性質のニュアンスを生じて來るのである。かく組織づけられない場合は、薄弱な印象經驗として記憶の埒外におかれるのである。卽ち單なる過程であり、單なる活動であるものは、自我にとり散漫で皮相的であつて、精神生活にあまり意味を持たない。これに對して、環境と自我が聯關し組織づけられる處に、その後の一定環境に對する自我の態度が決定されてゆくのであつて、其處に印象、經驗の記憶としての意味が出る。ここで

「吾々は何事かを學ぶ」と云ふことが出來るのである。

次に、印象、經驗は神經組織に痕跡を印すものである。かくて、次の印象、經驗に影響を與へ、又現在の印象、經驗は過去の印象、經驗によつて規定されてゐると考へられる。併し、この場合注意すべきは、かかる痕跡を、丁度捺印の如く、孤立し、固定したものであると考へてはならぬことである。かかる痕跡は神經組織全體の體制のうちに規定されて痕跡組織をなすと共に、又消長變化發展するものであるのである(一)。從つて、次に來る印象が與へられる時間的間隔の長短、或は各印象が與へられる環境、零圍氣（卽ち素地）如何によつて前印象が後印象を決定する仕方が異るのである。ここに記憶の體制と云ふことが重要になる(二)。

七七　記憶はその仕方から三つに區別することが出來る。

イ、運動的記憶――習慣的に一定の行動系列が形成されることである。前にものべた如く行動の發展としての練習、熟練の如きは運動的記憶である。又機械的記憶、丸暗記の如きも言語發音の運動的記憶である。かかる記憶は動物に於ても見出されるものであり、行動の變容、發展に必要である(第四講參照)。

ロ、感官的記憶――ある印象がその感性的印象のまゝに保持され、再現されることである。殘像や直觀像をもつことはかかる記憶形態である。かかる感官的記憶の精神生活に於ける意味は、再生される印象が元の印象と等しく生々とし、直接的であるから、過去と現在の聯關が極めて融和をなすことである。

ハ、表象的記憶――記憶表象をもつことによつて成立する記憶である。一般に記憶現象と呼ばれるものはかゝる表象的記憶についてである。表象によつて直ちに過去が現在の意識に聯關づけられる過程である。以下この記憶について分析考察をすすめる。

七八　表象的記憶には三つの主要なる側面が見出される。卽ち記銘、把持、再生である。

A　記銘――印象をうることである。記憶の成立のためには先行條件として、印象が先づなければならぬ。この場合も、再生を豫想しないで印象を受ける場合と、再生を豫想して印象をうける場合に分けられる。日常の諸經驗の印象は大抵前者であるが、學習や試驗勉强の如きは後者である。後者は再生の豫想があるから、記銘の態度もやや前者と異なり、印象の撰擇、他の印象との聯關などが併せ生ずる。從つてこの記銘の仕方からして、記憶に三つの種類を區別しうるのであ

る。

機械的記憶――これは印象の反覆によつて記銘の度を増すことにあるのであつて、印象の理解はなく、他の印象との觀念的聯關はつけられず、從つて想起の場合も運動性再生をなすものである。所謂丸暗記であつて知識としては皮相的である。兒童はかゝる記憶形態に勝れてゐる。

ロ、聯合的記憶――印象はその性質として他の心的內容と常に構造的聯關をなすものであることは前述した。然るに或印象が特殊である時、比較的孤立して他との聯關がつきにくいことがある。從つて、ここに有意的にそれにある聯關をつけようとする。各自は自己流に一定のかかる記銘の仕方をしてゐるのであるが、進んで技巧的に一つの術が見出されてゐるのである。卽ち所謂技巧的記憶であつて、**記憶術**と呼ばれる。これには大體二つの方法が區別される。

(a) 場面の表象に、記憶せんとする印象を配置して行くのである。この場面の表象はその個人にとつては圖式的な固定した基礎表象として豫めつくられておらねばならぬ。この基礎表象としては、自己の生活環境の一定場面（部屋、通路、家屋、手掌）などが用ひられてゐる。卽ち位相記憶の仕方をとるものである。

(b) 記憶せんとする印象に、よく知られた意味のある言葉或は知識を聯關せしめる。年號、日附、電話番號、數式などが意味ある文句で言表されて記憶される如きものである(三)。但し注意すべきは、普通の人がこの方法を知つて直ちに記憶が增進すると云ふわけではないことである。基礎表象を固く作り、それに配置したり、又意味を聯關せしめて行つたりする作用が精神作用として大きな作用であつて、それのためには修練が必要であるのである。又この方法による記憶は比較的孤立した印象（數字）には好都合であるが、意味充實の日常經驗の諸々の印象や言葉には効果薄いものである。むしろかかる聯合によつて、意味のニュアンスが害せられるのである。

ハ、理論的記憶――これは印象の本質的意味を理解すること、自己の知識のうちに組入れることによつて記銘することである。內容が意味があり、概念的のものであればある程、かゝる記憶が要求される。學科の學習はかゝる記憶の態度を主方向とするものであり、知識の發展の基礎役割をなすものである。

七九　B、把持作用――一旦記銘された印象はそれが再生されるには把持されてゐるわけである。把持されておればこそ、必要に應じて、或は偶然にその印象を想起しうるのである。把持の時間を極

めて短かく、記銘印象を直ちに表象として想起する場合、即ち今、現前の机を見て、すぐに眼をとぢてその机をおもひだす如き場合、これを**直接記憶**と名づける。又數字を若干讀みあげて直ちにそれを反唱させる如きもこれである(四)。把持時間の短いだけ、印象の再生は明瞭で、生き生きしてゐるのである。然るに把持時間がながくなるにつれて、再生の表象は變容したり、明瞭さを缺いだり、或は再生不能になつて來る。即ち、把持過程に於て、表象自身消長、變化、發展するものである。

八〇　C、**再生作用**――これは記銘印象が想起されて再び、現在の體驗の內容としてあらはれることである。即ち再生作用は現實の體驗であり、これにより過去が現實と聯關をもつことになる。過去はこゝでは現在的意識に取り入れられてゐるのである。

表象が如何なる原因で再生するかについてみると、若干の現れ方がある。

イ、偶發性……無原因的に偶然生じた如きものである。「ふとおもひたす」「急におもひつく」と云ふ言葉であらはされる。併しこれには自分自身は氣づかぬが意識の底には聯關した他の表象群が存在してゐたものとおもはれる。或は**固執傾向**によつて(五)、固執されたものが何かの拍子に急に意識にうかび出たものであると考へられる。試驗問題がわからず、いろいろとおもひめぐらしてゐる時、ふとおもひだされる如きも、何かの聯關があつたものである。

ロ、聯合性……ある現實的印象、或はある表象の想起から、それに聯關して表象が再生される場合を云ふ。前述の記憶術による場合の再生の仕方はかかる聯合性によるのである。

かかる印象と表象、表象と表象との聯關を聯想（association）と云ふ。即ち、郷里からの手紙をみて、郷里の有樣を想ひうかべる、又、言語を聞いて、それと聯關ある表象が浮んで來る、或はその言語に對して運動的に他の言語が表現される如きである。

この聯想には法則關係が認められ、聯合律として從來唱へられて來てゐる(六)。即ち、

イ、類　似（櫻――梅、筆――ペン）

ロ、對　比（白い――黑い、夏――冬）

ハ、共　在（机――椅子、家――門）

ニ、接　近（サイレン――授業、切符――乘車）

併しこの關係によつて吾人の觀念世界の表象の秩序、構成を說かうとすることは出來ぬ。この法則は甚だ抽象的であつて、聯想の發展はその場面、心構へにより、時と場合によりて異なつて來るし、そこに複雜なる關係が示されるからである。前述せる如く、表象は構造聯關を示すもの

であるから、そのうちの一つが刺戟されると爾餘のものが再生可能性をもつもので、そのいづれが再生されるかはその場面の意識の全狀態で規定されるのである。勿論その他のものは素地として存するのである。以上の四つの聯合律はこの構造聯關の顯著なる形式であると見ることが出來る。故に聯想の內容は、その個人の印象の特殊性、再生時に於ける意識狀態、心構へ等によりて規定されるものである(七)。

聯想にはそのおこるままにする場合（自由聯想）とそれを有意的に制限する場合（制限聯想）とがある。卽ち聯想は自然にあたへられるままに生ずるものばかりでなく、又自我の能働的作用、又その時の情緒狀態に依存するものである。制限聯想や禁止聯想の如きに於て明かである(八)。

尙再生に際して**遡及禁止**及び**前進禁止**の現象がある。前者は第一の系列を學んですぐに第二の系列を學ぶと第一の系列の再生が不良になると云ふ現象で、過去へ遡つて再生することが困難となる樣な現象を云ふ。前進禁止は第一系列を學んだ爲に第二系列の再生の不良になる現象を指す。

八、論理性……思考の結果豫想されるものが、過去の印象を再生する如き場合である。これは思考や反省の時に於て、或は問題を考へる如き場合に於て顯著である。これは問題を解く場合の論理的要求として表象が再生されることであるから、聯合性のやうに比較的自由であるのでなく、秩序的に規定されたものである。かかる場合の再生の表象は知識の一部としてその構成要素をなすものである。

八一　再生にとつて良き條件は如何と云ふに、

一、繰返へしの程度――繰返へすことによつて印象を强めるのであるが、尙その繰返へしの仕方によつて効果が相違する。卽ち、實驗の結果は一度にたたみ重ねて多數反覆するよりも、同じ回數を幾日にも分つて繰返へした方が好條件であることを示してゐる(九)。

二、緊密な聯想關係がつくこと――卽ち印象の構造聯關が緊密であること。

三、記憶する對象の構造特質、卽ち、對象がすべて同質的な姿で與へられると、再生は困難になり、對象が同質性の對象の中で異質的なものであると、その再生は特に顯著になる。

四、印象の自我への關係が緊密であること――この故に興味あるもの、關心あるものがよく憶えられるのである。從つてその印象が自我にとつて問題的である場合、再生の可能性は强いのである。

これに關して實驗の結果は（十）、印象を不完結に與へると、却つて印象の再生は良いと云ふので

ある。不充分であつた印象や、駄目であつたものの印象は容易に再生されるのである。

五、印象と情緒とが融和してゐること、卽ち印象が、快、不快、恐怖、拒否、怒りの如き本能的傾向とつながつてゐる時である。故に過去の印象、その一部或はその類似のものが與へられる時にかかる情緒興奮を誘起せしめる。コンプレックスの形成の如きはさうである。卽ち、恐怖症、强迫觀念の現象もかかる再生過程をもつものである。又記銘時に於て印象が情緒的に撰擇され、壓縮、推移せしめられることもある。この情緒性記憶は亦個人の素質とも關係がある。

八二　表象として再生することは出來ぬにしても、今與へられた印象が全然新奇のものでなく、嘗つて過去に於て經驗したことありと云ふ意識を生ずる場合がある。卽ち、「見たことがある、聞いたことがある」と云ふ意識である。これを**再認**と云ふ。より進んで「あの時」とか「あの場所」でと云ふ風に時間的、場所的定位を以つて意識される場合もある。これを再認に於ける推時作用、推處作用と云ふ。これによつて現在の印象と過去の印象との聯關が付せられ、現在印象の意識全體への關係が明かにされるのである。再認に止まることもあれば、更に進んで表象を再生して來ることもある。

再認も亦今、右に述べたやうに個人的經驗によるものと、或事物を見てそれは書物であると認める如き類の再認とに分けることが出來る。

又、再認は以上の如き再認の意識過程が顯はにされる場合と、對象を知つてはゐるが、再認の意識過程が發展しない場合（**內在的再認**）とに區別されることが出來る。

再認は、對象と自我との全體的な聯關組織に所與の對象が再聯關づけられると云ふ過程である（十一）。

八三　再生が不能である場合これを**忘却**と云ふ。嚴密に云へば、記憶の半面には忘却があると云ふことが出來る。忘却の意識は問題、要求に對して過去の印象を想起せんとしてそれが不可能である時に生ずる。忘却は從つて現在の狀態に對して過去の經驗の聯關がつけられぬことで、ある緊張が不滿足のまま殘留するのである。忘却の意識にも「全然覺えがない」と云ふ程度から、「ある部分をおもひ出して他の部分はおもひ出せぬ」程度迄色々ある。時には「覺えてゐるが、今おもひ出せぬ」場合もある。忘却した事を意識する忘却の意識は記憶の缺如の意識であり、消極的再認過程であると考へられる。

客觀的にみれば忘却は、再生された表象と過去の印象とを比較して脫落があつたり、不明瞭であつ

たりする現象を指すのである。時間の經過と共に忘却の過程の起ることは日常の經驗の示す通りである。實驗の結果によると忘却は最初急激に進行し時間の經つにつれて徐々になる(十二)(但しこれは實驗條件として無意味綴りの言葉を用ひたのであるが、もしこれが有意味のものであれば種々なる條件が働くから、この樣に最初から急激の減退は示さないであらう。又論理的の記憶であれば、忘却の過程も異る、暗記的なものであれば、ある程度この過程をとる)。

忘却の度合は個人の素質、精神狀態及び年齡によつて異る(十三)。記憶薄弱（健忘）は忘却の過度に進行せる症狀を示すものである。老齡になれば忘却の度は著しく進む。但し最近の印象についてであつて、昔の印象は比較的記憶されてゐて再生せられるのである(進行性健忘)。

印象されたものは時間のたつにつれて忘却されるが、それは忘却されてしもふのであらうか、或はそれは再生が不能と云ふことで現在の意識を支配し、時には偶然の機會で再生されうることもあるのであらうか、ここに兩說が對立する。殊に後者を肯定する學派は無意識なる概念を樹てて來るのである。さうして、忘却は結局、苦を捨て快を求める精神の力學的作用によるもので、忘却は不快なる印象の壓縮であると考へる。これは精神分析學派の考想であるが、感情性の記憶に於てはこのことも可能かと考へられる。併し對象的な事物の印象は時間の經過と共に忘却の裡に減退するものである。

運動性の記憶では、忘れたやうに思つても、何かの調子で再生されることがある。

さて忘却の現象は以上の意味の外に、尙違つた意味の現象がある。**ものわすれ**と云ふ現象である。これは以上のべた忘却とは心理過程は相違するものであつて、ある狀況に於て他の方向へ注意が向いてゐたためにそのことを想ひ出すことなく、後になつて想ひ出して忘れたと云ふ意識を生ずるのである。これは記銘、把持、再生をもつ記憶の過程ではない。むしろ、ある狀況に於ける注意喚起の有無にあるのである。「傘を置き忘れる」「手紙出し忘れる」の如きはさうである。想起すべき目的の表象が、日常の習慣的行動にとつて異質的であり、聯關のない場合はかかる忘却が起こり易い。その表象が孤立的なるが故に全體の組織の中に這入つて來ないのである。精神分析學派はかかる忘却を壓迫作用による無意識化であるとし、これを以つて、精神的態度を分析せんと試みてゐる。

八四　さて記憶作用によつて、過去の諸經驗が現在經驗として再體驗される。かくして自分の過去の生活を現在にもつことが出來るのであつて、吾人の精神生活は廣い領域を占めてくるのである。さうして現在の現實經驗を規定し、方向づけ、又現實經驗の課題、要求に應へしめることが出來るのである。

教育的立場からすれば一定の教材を如何にして記銘させ、確實にして明瞭なる再生を可能ならしめるか、卽ち兒童から云へば如何にして學習するかが問題になる。ここに知識の獲得、發展の基礎があるからである。

さて、學習の法則として、從來、慣熟の法則（課題、教材に順應することによる學習の成立）、頻數の法則（度々の練習、反覆による學習の成立）、効果の法則（滿足による强い學習の成立）等が云はれてゐる。此等の法則は子供の學習指導にとつて、その原理となり得る。その他、聯合の法則、强度の法則、近新の法則なども、實際の指導に方法を與へるものである（第四講參照）。

併し乍ら、窮極に於て、課題や教材がその兒童の精神生活の全體的組織に如何に組織づけられるかと云ふことが大切な點である。それらの印象が、全體の體驗や知識の體系に如何に組み込まれ、副組織を形成し、更に全體の組織を再結構化してゆくかと云ふ處に、學習の本質を見なければならぬのである。

（一）この痕跡の消長について、今多くの實證的研究が施行されつゝあるものである。

（二）今客觀的に相等しい强度の音 S_1S_2 を繼時的に與へる。心理的には、相等しい强さの音として（$S_1=S_2$）として現はれないで、繼時時間が短い時（一・五秒）は $S_1\vee S_2$ として前者の音が强く、繼時時間が長くなると $S_1\wedge S_2$ 卽ち後者の音が强く印象される。更に興味ある現象は音が刺戟として與へられる環境に音の雰圍氣を條件的に構成し、その雰圍氣の音が强い時は $S_1\vee S_2$ となり、もし雰圍氣の音が弱い時は $S_1\wedge S_2$ と云ふ結果となることである。自分には氣付かれなくとも、素地としての知覺印象全體に、比較すべき印象が規定されてゐるのである。

卽ち一つの興奮の痕跡は痕跡體制の水準をつくり、その背景の上に次の興奮が發展すると解せられる。

（三）（イ）12469尺＝一年中白く（富士山の高さ）。$\frac{4}{3}\pi r^3$＝身の上に心配あるの慘狀。$\sqrt{3}=1.732050\,8$（ひとなみにおごれや）、223＝ふじさん。6479＝むしなく etc.

（ロ）短句にまとめて語呂をあはせる。

赤、橙、黄、綠、青、藍、菫＝仇君にあらず

1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

t;d n;v m;w q;r s;sch b;p f;ph;pf h;j g;k;ch;c l;z

（ハ）かくてこの公式によつて數字を文字化して、その文字に意味をつけて記憶する。例へば 1520 年（ラファエルの沒年）についていへば、一は明瞭だから別にする、520＝snz これは sanzio として意味づけられる。

（四）メンタルテストに於てこの方法がしば〳〵用ひられる。例へば四歳兒には三位の數字を復唱せしめる。

（五）表象が一度あらはれると、それは意識內に保存せられる傾向を內在してゐるので、この傾向を**固執傾向**（Perseverationstendenz）といふ（ゲ・エ・ミユレル）。

（六）尙、內聯合（論理的な關係がある場合）と外聯合（外的經驗によるもの）に分けることもある。

- 內聯合
  - 順位（上位、同位、下位）
  - 賓位
  - 因果
- 外聯合
  - 同時、同所
  - 口調
  - 添加
  - 類音
  - 無意味等

（七）コフカは聯合の法測を構造の法則としたのである。その法則として

（イ）a, b, c の現象が一つの全體構造の分節肢としてあると、後でそのうちの一つがあらはれるときその全體構造を補充する傾向がある。

（ロ）a と a′ が外的關係のみならず構造上類似があると、そのうち a があらはれると a′ を再生せしめる傾向がある。

（八）聯想の實驗は刺戟語に對して反應語を求めることによつて行はれる。この場合、反應時間も測定する。制限聯想は列べた刺戟語の上位概念、下位概念を反應せよと條件つけて行ふものである。

例、（ある時の調査による）

〔石鹸に對して、風呂（九人）　泡（六）　洗ふ（五）　シャボン、白い、すべる、顔、油、資生堂、など
〔冬に對して、さむい（一五）　夏（九）　雪（五）　木枯（二）　白い、スキー、氷、ストーブ、山、など

刺戟語から反應語を云ふまでの意識を内省すると、

イ、直接、言語運動として反應語が出る

ロ、意味體驗が介在する

ハ、表象が浮び、それより反應する

（九）ヨーストは次の關係を見出してゐる。

二四回の反覆を八回宛三日にするよりも、四回宛六日に分つ方効果的であり、尚二回宛一二日に分ける方、更に効果がある。

これにより次の法則を導いてゐる。

第一法則　新しい印象と古い印象とを同一反覆で與へる時、古い印象が強く殘る傾向がある。

第二法則　古い印象は新しい印象に比して忘却されること尠い。

（十）尚、記憶の實驗的研究法の主なるものには、學習法、節約法、適中法、再認法等がある。

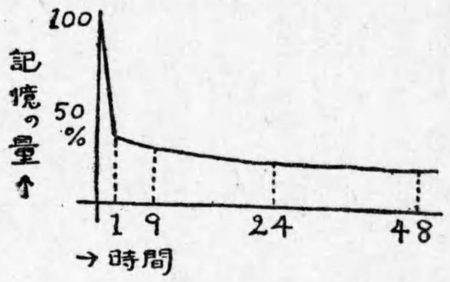
これは今日實驗的研究によつて明かにされたことである。レストルフの研究によれば、同樣な記憶の材料を反覆するよりもこの樣な反覆のない孤立してゐる材料の方がよりよく再生されるのである。これは今日の痕跡理論からすると痕跡の場の凝集、分離として考察される。

（十一）ザイガルニィクは中斷動作と完了動作の記憶の効果を實驗し、記憶の永續的効果は前者に於て勝ることを見出したのである。

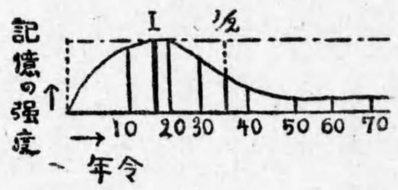
（十二）さてここに若干の再生及び再認についての障碍がある。再生の表象が過去の印象と一致せざる場合、これを記憶の妄覺と云ふ。これに二つあつて、一つは、過去の實際の印象が非常に變容されて再生されたもの（記憶の錯覺）、他は一度も實際印象せざる表象を過去の印象として再生するもの（記憶の幻覺）とである。次に初ての印象を嘗て經驗したとして再認することとあり、これを僞記憶（Paramnese），或は "déjà vu" の現象となづける。又これと反對に度々經驗してゐるにも係らず、現在の印象を初ての印象として感ずる現象もある。これは自我の統一性の異常であつて一種の自我の分裂の徵候である（Depersonalisation）。これらが異常感覺となるもので、事物の實在感がなくなつたり、自分の體が自分のものでない樣に感じたり、世界が新しい珍らしい姿として映つて來たりするのである。

（十四）尚、局部的健忘がある、これは表象のある種類が缺損するのである。これには、精神盲症（Seelenblindheit）なる現象がある。

（十三）忘却曲線



記憶と年令との關係



第十六講　想像について

八五　想像の主なる機能は、未だ吾人の經驗せざることを現在の體驗に聯關せしめ、以つて現實によつて規定された體驗を豐富にし、發展せしむることにあるのである。從つて、想像に於ては、記憶より更に自我の自由なる活動があらはれ、欲望・希望の方向に於て表象像が展開するのである。かくて現實を超越した豐富にして自由なる觀念の世界を所有し得ることが可能になるのである(一)。こゝに精神生活に對し次の如き特性が與へられて來る。

イ、現實の世界への豐富なる內容づけ。

ロ、現實の世界よりの逃避、或は超越。

ハ、隱れたる現實生活の意味の發見、或は新しき世界の創造。

八六　想像はその機能から若干の形態に分つことが出來る。

(一)　**記憶補充としての想像**　再生作用が不充分である場合、新しい表象群の喚起によつてその再生作用を完結して、その再生の意欲を滿足せんとする作用である。從つて再生作用と異つて再認の意識はなく、不確定の感を多く伴ふのである。一般に時間の經過と共に記憶は不完全になつてゆくから、かゝる想像作用が無意識のうちに働いて補充してゐるのである。

(二)　**空想——幻想**　これは情緒的欲求を以つて發展する想像であり、現實の世界では到底實現し得られざるが如き表象の展開である。吾々が空想や幻想をもつと云ふことは、現實の世界を超越或は逃避して、意欲のままなる自由の世界を所有することを意味する。現實が極めて壓迫的、困厄的であれば、人は自らかゝる世界を想像し、意欲の滿足と慰安とを味ふものである(例へば**白晝夢**の如き)。又人は未來といふ未經驗な不安な世界に對しても亦かゝる想像の世界を活潑に展開し、自己の安定を保たんとするのである(二)。

此等の空想や幻想は、嘶、譬喩、諷刺、神話、傳說、或は擬人的說話のうちに表現されてゐる。此等の諸表象は全體として現實のそれとは相違してゐるとはいへ、尙その部分形態は尙現實世界に於ける表象が基體になつてゐるのである。想像によつてそれらが新しい形態に綜合されたのである。

空想や幻想に耽けるとしても尙自我は一方現實と關係を保つてゐるのである。耽けることの度

が過ぎるとその現實感が强大になつて、諸感覺の變化さへ生じて來る(三)（極度の自己暗示）。更に進んで現實と非現實とが融合して、現實の行爲を規定して來れば、**妄想**(四)としての病態的現象が生ずるのである。

八七　(三)　創造的想像

これは想像に於ける最も高い形態のものであつて、この本質とするところのものは、潜んでゐる事物の意味を洞察し表現せんとする機能である。即ち、知覺や、記憶や、反省的な思考によつては把握され得ざる意味を見出すところにある。最も有意味で、理想的なる直觀的形態を自發的に發見することにあるのである。從つてこの想像はもはや表象の新しき結合に依存するものでなく、どこまでも意味の發見にあるのである。その想像された表象は個別的のものであるが、それは常に普遍的、本質的意味を擔ひ、全體との關係を擔ふものである。記憶や知覺に於ては、その記憶されたるもの、知覺されたるものの事實によつてその價値をもつのであり、事實が大切である。然るにこの想像に於ては、事實よりも、それの見出した意味に價値があるのである。かゝる創造的想像に於て、藝術、宗教、科學の諸活動が可能になるのである。

創造的想像は決して氣まぐれな思ひつきの所產でなく、普遍化的活動である。即ち、それは記憶や知覺による印象、表象の個別的狀態のうちに、それの普遍的なる性質をとらへるのである。さうしてそれを具體的、直觀的形態に於て表現し乍ら、事物の本質の洞察を可能ならしめるのである。

かゝる想像を可能にするのは、個人的の興味や欲望ではなく、本質的なもの、普遍的なもの、理想的なものを把握せんとする態度である。想像はかくて存在の象徵的意味の發見といふ機能を擔つてゐるといふことが出來る。こゝに想像が文化にとり極めて重要なる機能である所以が見出される。

かくてこの創造的想像に於て、自我は最も深い、純粹な自由な活動をなし得るものであつて、これにより吾人の精神生活は一層の進展をなすことが出來る。

文學や藝術的活動において、かゝる創造的想像が極めて大なる役割を演じてゐることはいふまでもないが、又科學研究に於いても、その實驗的推理や、假設や法則の樹立に當つては、かゝる想像が大いに働いてゐるのである。

かゝる想像は天才に於いて見る如く、素質的に與へられるが、又それは個人の努力と結びつくことを要する。機會的に靈感としてこの想像が發展することもあるが、その前後に努力的過程が進行することがその完成にあたつて必要である。

八八　精神生活に於ける知識の發展段階として、想像は一つの位置を占めるものである。知覺、記憶は現實存在の個物（時間的、場所的に規定された）に相應するものである。次講に於いて述べる思考は普遍者を問題にするのである。然るに想像は普遍的意味を個物に於て把握し、表現するのであるから、想像は個物より普遍への橋梁をなす段階にあるものと考へることが出來る。かくして、知識の發展にも想像は大なる役割を演ずるものである(五)。

さて、吾人の精神生活は記憶と想像によりその內容を豐かにし、發展することが出來る。もはや吾吾は現在的に時の流るまゝに生活するものでなく、過去と未來を現在のうちに包含しつゝ進展してゆくのである。こゝで吾人の精神生活が歷史的であるといふことが可能になる。かくして吾々は個人の過去を知り、將來の目的、希望を知ることによつて、その個人の精神生活の理解に進むことも出來るのである。

(一)「想像力は空想的評價によつて小なる事物を擴大してそれで吾々の魂を滿たす、而してそれは又大膽なる傲慢によつて大なる事物を吾々自身の寸法にまで小さく縮める。例へば神の事を口にする場合の如く。」（パスカル）

(二)「われわれはいとも好んで未來を眺めたがる、なぜならわれわれは未來の中であちらこちら動いてゐる偶然的なものをひそかな願望によつて好んでわれわれの爲にひき寄せたいと思ふからである。」（ゲーテ）

欠

ることの著しいことを重要なる特質とする。

（八）かくて感情は自我の目的と活動の關係に於て本質的性質を示すものである。卽ち意欲と密接に結びついてゐる(一)。

（二）そして感情はその時、其の場によつて獨自個性的で、ニュアンスに富み、以つて人間の生活に豐かな色彩ある內容を與へてゆくものである。

さて、感情の基本方向として**快**、**不快**のあることは一般の認めるところである(二)。この快、不快の感情はあらゆる複雜多樣なる感情にもその底流としてその方向を規定してゐると考へられる(三)。

九九　吾々は常にある比較的、持續的な感情狀態にあるものである。これを**氣分**と云ふ。氣分は時や場合によつて變化が感ぜられることもあり、又意識の前面へあらはれて、特殊の感情として發展することもある。氣分は通常意識の底層にあつて、あらゆる意識領域に擴がり乍ら、穩やかにそれらを色づけてゐるのである。

吾々は日常生活を通して、比較的一貫した恒常的な氣分をも持つてゐる。これは**生の氣分**と云はれる。吾人の日常經驗はかゝる生の氣分に根源的な規定をうけて發展してゐる。世界觀とか人生觀とか

欠

云ふ極めて高い上層意識も亦かゝる生の氣分に根據をもつと云ふことが出來る。

この氣分には大體一對づゝ二組の種類を見出すことが出來る。先づ**明朗の氣分**と**憂鬱の氣分**が擧げられる。前者は內部が光で充ちてゐると云ふ氣持で表現される氣分である。自由な、輕快な、生き生きした心の動きの感じである。人に對しては信賴的で、親切で、フモール的である。善良で善意に充ちた態度へ容易に進展する。憂鬱はこれと對蹠的に心の暗さの體驗として表現される。おさへつけられてゐる感じ、空虛の感じをこの氣分の特徵とする。世界に對する體驗の貧弱、興味の喪失等が生じ易い。

さて、これに對して、**滿足の氣分**（たのしさ）と**不滿足の氣分**（いらだたしさ）が擧げられる。此の一對は前者の一對の氣分に對して、直接生活に於ける何等かの外的對象との聯關に於て生じて來る氣分である。

たのしさは外界の事情に依存してゐることが極めて多い。この氣分をもつにはかゝる外界を必要とするのである。從つて又この氣分は紊され易い傾向をもつもので、偶然に支配され易い。明朗さは深く內面的であるのに、これは表面的であると考へられる。又、明朗さはその反對である憂鬱さをも含み得る程深さをもつのに、滿足の氣分は、同時に不滿足の氣分を含むことは出來ない。同じ樣に、不滿足の氣分は、外界に對する刺戟され易いいらいらした性質を有することによつて憂鬱の氣分と區別される。敵意のある怒りつぽい傾向が含まれてゐる。外面的、動搖的の性質をもつといふことが出來る。

さて、かゝる氣分は個人の生活を貫いてその經驗や態度を規定するが故に、氣分は個人の生活像の特性を示して來るのである。卽ち氣質や性格の基礎形態と考へられうるのである。

氣分は又單に個人のみならず、社會全般の全般的雰圍氣としてもあらはれて來る。緊張、弛緩、平安、不安と云ふ如き社會的氣分が釀成され、個人もそのうちに同化するのである。

一〇〇　吾々は時には特殊な事件や場面に當面して感動し、强い感情の興奮を感じ、それが時間の經驗につれて色々と發展し、移動してゆく意識體驗を有つのである。かゝる意識體驗を**情緒**と呼ぶ。

（一）情緒は日常の精神過程の中に强く鋭くあらはれて來て、日常的過程を紊だす傾向がある。

（二）情緒は意識の底層に根源をもち、暗い衝動力を擔つてゐる。從つてその發動に當つて抑止することが困難で、上部意識との抵抗と葛藤がかもされる。（三）情緒は身體的表出をもち、行動を發するが故に、その影響は社會的の意味をもつて來る。情緒は單に個人的の意識過程ではなくて、他人との